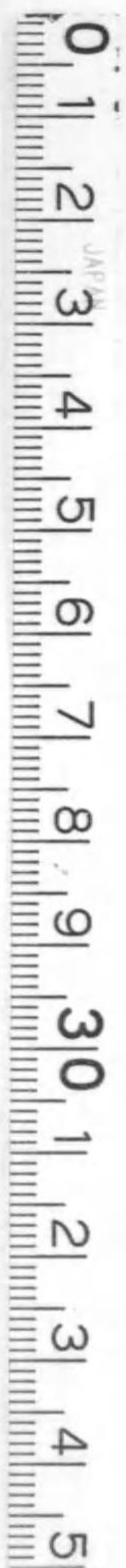


324  
586



始



3212-6

釋宗演

觀音經講話

1062  
寶 國



鎌倉東慶寺安置  
大宋陳和鄭作

寶 國



鎌倉東慶寺安置  
大宋陳和郷作

## 例言

- 一、本書は婦人道話會に於ける釋宗演老師の觀音經御講話を速記したるものなり。
- 一、開講は大正三年三月にして、同六年五月に滿講す、其間三年三箇月に亘る。大部分速記なれども、間々筆記に屬するものなきにあらず、勿論始めより編者に於ても又記者に於ても、公刊を豫期したるにあらず。
- 一、近頃會員の多數並に會員外の紳士淑女、其遠隔の者は遙に書を寄せて、公刊を懇懇する者すら、又少なしとせず。
- 一、即ち意を決して原稿を整理し、茲に上梓す、憾むらくは、老師に御巡教の爲め寧日なく、又印刷の事決するや、其工程に急を要するものありたるを以て、更に老師の御檢閲を経る暇なかり

き。  
一、惟ふに筆者の聞き違ひもあるべく又書き損ひもあるべし、若し本書に假りにも瑕疵あり若くは不備不足の點あらばその言ふ迄もなく、編者の足らはぬ責任也、豫め老師に拜謝し且つ讀者諸賢の寛恕を祈る。

大正七年十一月

婦人道話會幹事泰嶽識

## 觀音經開講前話

釋 宗 演禪師述

經文に「實の如く自心を知る」とあり、又デルハイの宮殿には神の言葉として「汝自身を知れ」とある如く、御互に先づ心知らねばならぬ。さて心といふものは取りやう次第で、如何やうにもなるもので、何がなしにぼんやり考へる時は、世界は我がもの、如くに思はれる場合もあり、又或場合には、世界は洵に廣いやうな狭いやうな、楽しいやうな苦しいやうな、色々に思はれることもある。同じ月を眺めても、此の世をば我が世とぞ思ふ望月の缺けたることも無しと思へば、斯ういふ歌を作つた人もある。詠み人は何といふ人であつたか——多分藤原道長であつたと思ふ。此のやうに世界中を我がもの顔に思はれることもある。さうかと思ふと又物を悲觀した場合には、大變小さな心持ちになつて、「月見れば千々に物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど」斯ういふ歌を作つて、涙を流して眺めた人もある。今申す通り、世界を我がもの顔にして喜ぶ人もあれば、其れを悲觀して泣く人もあり。當人の心持ち次第で、世界が楽しくもなり苦痛にもなるので、此處が餘程面白い所である。

——面白い所であるが、其心、其我れといふものは畢竟どんなものであるかといふに、それを調べて

二  
見るのが佛教の初門であつて、初門即ち入口とは言ふものゝ、それが又實は一番のおん詰りである。我れといふものは、取りやうによつては、此れは迷ひの根本であると佛は仰せられて居る。それ故に一つ道を求めようといふ志を發する時には、一應我れといふものを明かにして置かなければならぬ。もう一度我れといふものを別語で申して見ると、我といふは常一主宰を義とすといふてあります。此れは讀んで文字の如く、常といふは常である。一といふは數字の一番頭らに立つあの一の字それである。主宰といふは物を宰るといふ意味の主宰である。此の常、一、主宰の義理を明かにしなければ、我といふ意味が成り立たない。處で、試みに我々の身體を見ると果してどうであるか。假りに私自身がいふ通り、常であり一であり主宰であるかと、一々詮索して見るに、我々は決して常に非ず一に非ず主宰に非ずといふことが、論より證據、此れは實際の有様で如何ともすることが出来ない。常といへば、現在も將來も不變でなければならぬ。けれども決して變らずではない、即ち常でないのである。相の上からいふて見るなら、何一つとして我がものではない、決して一ではない。世界の有様は千差萬別、複雑限り無い所の色々様々の状態を呈して居る。主宰といふからには、言はゞ與ふる處、取る處、殺す處、活かす處、悉く我が自由自在になるかといふのに、決してさうはゆかない。我が身體一つすら、常の如く一の如く將た主宰することが、どうしても出来ない。其處が佛教の我といふものゝ考へ初めであります。

假りに我が此の身體を無常の點から一つ眺めて見ると、お互に相當の壽命を保つように考へるけれども、殆んど我れといふものは、當り前に行つた所で人生の平均が三十年、統計などで見ると東洋人は三十年でも長命な位になつて居る。或は三十年といひ、或は五十年といひ、七十年といふては昔から稀れであると云はれて居る。併し今日にては、大分人間の慾望が増長して、百歳或は百二十五歳までも生きる理由があるなど、理窟を付けて居る。理窟の方から行けば、二十五歳が人間の成熟期であるから、其の三倍や五倍生きるのは當り前である。自分は百二十五歳まで生きると力んで居る人もある。處が我々獨り百二十五歳或は二百歳まで生きるとする、彭祖は八百歳まで生きたといふが、假りに八百歳まで生きたとして考へて見る。世界中の人が皆其の通り長命であるかといふに、今まで千年二千年三千年五千年と、歴史に就いて調べて見ても、決して世界中の人がさう長生きをするものではない。我れ獨り長生きをした所で、それが幸福であるか仕合せであるかといふに、我々は其の通り長生きをしても、自分が末を樂みにして居つた子供が先きに死んで仕舞ふ、末頼もしい孫が先きに死んで仕舞ふ、心の能く合ふた親しい友達が取り／＼に死んで仕舞ふ。私共も此れに就いて一種大變に深い感じを惹き起して居るが、それは一寸思ひ出したから、次手にお話するのであるが、もう四十三年許り前のことで、私の幼少の時、色々世話になつた清見寺の眞淨和尚は、つひ先き頃大阪の旅先で腦血栓とかで急に死んで仕舞はれた。色々力にして居つても、忽ち先きに死んで仕舞ふ。先づそんなも



のである。さういふ譯のものであつて、自分獨り長生きした處が、子が死ぬ、孫が死ぬ、友達が死ぬ、當てにして居つたことが外れて仕舞つて、我れ獨り取り残されて、而も長生して何事も獨りで用が達せるならば宜いけれども、人手に掛つて介抱され世話になり、さうでなければ、老ひの身で水汲み御飯炊きもオボツカなくせねばならぬ。何の此れが幸ひであらふ。決して幸ひでもなければ仕合せでもない。言ひ方に因ては一種の不幸といつても差支へが無い。それで今思ひ起したことがある。昔し仙崖和尚といつて、私共の宗門の方で偉らい人があります。嘗に法道で偉らいのみならず、色々多藝多能の人であつて、繪でも書でも何でも出来たが、此の仙崖和尚、當時黒田家の殿様に大變お氣に入りであつた。何か仙崖和尚に一番目出度いことが書いて貰ひたいといふ御意であつて、臣下のものが仙崖和尚の處へ行つて、何か一番目出度いことを書いて貰ひたいと申込んだ。仙崖は書きませうといつてやがて書いたのは、「親死ぬ、子死ぬ、孫死ぬ。」斯ういふのであつた。無難なことであるが、洵に目出度いことである。親から順々に天年を全うして行くのであるから、此れ程有り難いことはないのであるが、殿様は不興氣で、親死ぬ、子死ぬ、孫死ぬ。死ぬこと許りで、何も結構なことはない。どうか此裏を書いて貰ひたいと言つてやつた。仙崖和尚は、裏を書くのは譯はないといつて、早速に孫死ぬ、子死ぬ、親死ぬと書いて、此れは如何であるかといつたといふ事であるが、こう倒さま事になつて獨り生きながらへて居ても何の樂みであらう、我々人間は、唯だ何か好いものを着、旨いものを食

べ、樂に暮らして行けるやうにと、色々空想を描いて居るけれども、皆な先き／＼に外れて仕舞には死んでしまふ。昔の人が一般に厭世的思想を起すのは、斯ういふ所からである。又統計で見ると、生れる人も多いが亡くなる人も多い。途中で葬式に出會うと、知らぬ者の葬式ならば、或は何とも思ふまいが、段々遠方に吹いて居た風が、何時ともなしに近づいて来て、今度は親戚の誰々が死ぬといふことになる、少し驚く。それから風が段々に吹き寄せて、身の内の人、近い人が亡くなつて来る。これではならぬと驚いて居ると、もつと近づいて来て、孫が死ぬ、子供が死ぬ、親が死ぬといふことになる。段々驚くべく近くなつて、仕舞には我れ一個が、斯うしてあゝしてと計畫して居る内に、遂には呼べども還らずといふことになるのが事實である。斯ういふ所が無常觀といふもの、起る所以であつて、佛教の本旨ではないけれども、先づ世の中の人間が、所謂醉生夢死して、丁度飲酒家が酔つ拂つて居るやうに浮か／＼として居つて、其の睡りが覺める時には、一時無常の觀念を惹き起すに至るのである。斯ういふ工合に眺めて見ると、源實朝の「ながめこし花もむなしく散りはて、あとなく春の暮れにけるかな」といふ、此れは優しい言葉の歌であるが、實際むなしく此の世を暮らして仕舞ふことは、其の通りである。又「さくら花咲きてむなしく散りにけり、吉野の山はたゞ春の風」といふ歌があるが、此れも同じく實朝の詠んだものである。唯だ浮か／＼として居る間に、自分の頭に火のつくやうなことが出来て来るのは、人生の状態である。斯ういふやうな有様であるが、さて死ん

でどうなるか。生れて来たことは且らくよしとして、死んでどうなるかといふ時に於て、平生よりして其處に何等確かな得たる所の、一の信念を立て、置かなければ、心が物寂しく、恐ろしく、此の位心配なことは無からうと思ふ、宗教心といふものゝそろゝ芽を出し掛けて来るのは、斯ういふ所からである。大抵人は得意の時には宗教心を發しないで、生死の眞際になつて來ると、遅蒔きながら苦しい時の神頼みで、初めて其處に氣がついて來るのであるが、其の時は餘程手後れであつて、大死するやうな有様の人が多からうと思ふのである。如何せん、どうも宗教心は、さういふことに觸れないと多くは起らないやうである。此れは己人的の方面から觀たのであります。

若し進んで社會的の方面より、現代の世の中を考へて見ると、世間的のお話になりて政治經濟の畑に這入るかも知れぬが、一々は申さないけれども、實業界はどういふ現象を呈して居るか、政治界はどういふ有様になつて居るか、斯ういふて居る我々仲間の宗教界の有様はどうであるか。數へ立て、見ると喜ぶべきことは一つもなく、實に憤して慨すべきこと許りである。斯ういふ現象の起つて來るのは、つまり表面だけ進んで、人の精神が洵に薄弱になり、根柢が無く、一時的の目前のこと許りに走り、瞬間的の快樂をのみ追ひ、唯だ虛名虚飾を貴んで、浮いたこと許りを考へ、うか／＼として日を暮らして居るからである。其の原因は何であるかといふと、どうしても斯うしても、眞摯な莊嚴な、敬虔な心を缺いて居るといふことに歸する。然らば其の眞面目な心、敬虔なる最も神聖なる心とい

ふものは、何で養ひ得られるかといふに、決して學問や理窟の及ぶことではない。何としても確かりした宗教的の土臺を据えて、其の上に立つて世に處さなければならぬ。今日の如く社會の模範たるべき地位に居る人々の中から、甚しく腐敗せる分子が續々現はれて來るやうでは、日本の前途も大に氣遣はれると思ふ。勿論此は私の杞憂に過ぎないかも知れない、若し杞憂に止まらば誠に幸であるが、兎に角心配に堪えないことである。斯ういふことを言ふて居ると、外の道へ這入る譯になるから、大抵にして置くことにするが、兎も角浮いたこと許りを考へて、宗教心の養成に少しも氣を附けないといふことは、甚ば危険千萬のことであるから、手後れにならない内に、さういふことに十分の注意をしなければならぬと思ふ。

此の浮か／＼と目を過して居ることに就いて、佛は二三の坊さんにお尋ねになつたことがあります。人の命はどの位續くものであるか、斯うお尋ねになると、一人の坊さんは、それは僅かの間である。唯だ數日の間に過ぎないと答へた。けれども、佛は汝未だ道を得ないと仰せられて、もう一人の坊さんにお尋ねになつた。それが答へるには、唯だ飲食の間にある。お茶を飲みながら逝く人もあれば、御飯を食べつゝ、箸を握つた儘で往生する人もある。即ち人の生命は、茶を飲み飯を食ふ程の間のものであると答へた。けれども、佛は又汝未だ徹底せずと仰せられて、更に他の坊さんにお尋ねになつた、其の坊さんは、人命は呼吸の間にある。即ち出る息と引く息の間にある。——昔の古い道具に、鍛

治屋の使ふふいごといふものがある。押したり引いたりして風を出すのであるが、一寸と停めると風も同時に止まる。其の一寸の間である。時計の針がチクタク／＼動いて居るが、機械が損すると針も一緒に止まる。其の間である。我々の身の機關も其の通りであつて、機關の運轉して居る間は宜いけれども、一寸大なる故障を受けると、直ぐ氣息が止まるのである。故に其の坊さんは、人命は呼吸の間にあり。と斯う答へたのである。そこで始めて汝道を得たりと佛が仰せられた。これは四十二章經にさう書いてあるのであります。今もいふ通り、頭に火が附かぬと氣が附かずに居るが、斯ういふ工合に考へて見ると、洵に人命といふものは山の水の如く無常のものである。無常と感ずると、不安な念が其處に起つて来る、心安からざる思ひを爲すやうになる。それが道理である。さて不安の心が起つては、一日もその儘に安んずることが出来なくなる。今もいふ通り、時の上から考へると、佛のお言葉の如く、我々の命といふものは、電の如く、影法師の如く、霜の如く、露の如く、水の泡の如く響の如きものである。金剛經には大變それに就いて譬を擧げてある。のみならず、平生うつかりした考で居ると、自分が大層偉らさうに思はれ、大きな顔をして居つても、一旦眞面目に考へると、忽ち自分の小さなことが分つて、消えて仕舞ひたくなる。假りに我々人類同志の頭数を數へて、大體の言ひ方ではあるが、地球上の人数は約十五六億ある。概算であるが十五億乃至十六億と云はれて居る。其の中に自分も籠つて居るので、洵に我一人といふものは小さいものである。それなら其大多數の人類

のみが、獨り地球を占有して居るかといふに、さうではない。人類以外に於て、動物もあれば植物もある。皆な生きて此の地球上に棲息して居るのである。空を飛ぶ鳥の如き、或は地上を走る獸、草葉の蔭に啼いて居る虫蝶の如き、又は海川の水に住む鱗介の如き、皆此に籠つて居る。其數は調べ上げたものも無いが、幾萬幾億どころでなく、實に無量無數計るべからざるものである。其の無量無數の中のタツタ一つの我が如何に大きな顔をした所が、殆んど滄海の一粟で、廣い大海の中に於ける一粒の粟よりも小さい、そんな言葉で形容し得られるものではない。九牛の一毛といつても、逆も較べものにはならない。此の如く動物、植物、有機物、無機物が、無量無數に山川其の他一切の地上を占めて居る。其外に、土石の類、草木の類、是れ又無量無數であつて、其の中に自分が仲間入りをして居るのかと思ふと、洵に我といふものは、殆んど見る影もないことになるのである。それなら地球のみが獨り虚空を獨占して居るかといふに、さうではない。御承知の通り、地球よりも一萬二千倍大なる太陽が、天界の一隅に日夜光りを放つて居るのである。然らば其太陽が獨り占めかといふに、太陽に似たる遊星恒星といふやうな星が、又無量無數にあつて、其の中には我が地球が一番近い星でも、其光が全速力で飛で來て而して我々人間の肉眼に映ずるまでに三年位は費るといふことである。其最も遠方の星になると、其の光りが我が地球に達する迄に、三千年乃至五千年の長い間途中に費つて、初めて我々人間の眼にびかりと映つる。此れだけのことを考へても、如何に空間の廣く天體の宏大なる

かゝ推し測られる。其の廣大の中に小さな我一人である。さう思ふと、殆んどどうも我れ我れといふが、自然と消えて無くなつて仕舞ふといふやうな有様である。斯ういふやうに、色々の方面から我れといふものを考へて見ると、實に不安で溜らない、一刻も安んじて居ることが出来ないのである。

其の點に就いて、佛は生老病死の四苦といふことを説かれて居る。猶ほ八苦といふこともあるが、それは外の時にお話することにする。四苦といふのは即ち「生れる、年が寄る、病氣になる、死ぬる。」といふことであるが、此れが必ずしも順序的のものでなく、不規則になつて現はれ、段々に又倒まになつて現はれて来る。死ぬるものもあれば生れるものもある。生れては病氣になる。死ぬる又生れる。色々斯ういふものが、暫くも止まないで現はれるのである。お互ひの身體が即ちさうである。今までに素人考をお話しても、斯うして話をして居る中に、頭に通うて居る血が段々に下つて、足の尖きに廻つて行く。其の足の血が又背中の方へ上つて来て、肩から顎へと遂に頭の上に戻つて来る。頭から足の尖きへ、足の尖きから頭へと、斯ういふ工合に血が廻つて来るやうに、人間の生老病死も様々に替つて現はれ、暫くも止まらないのである。けれども、それが間斷なく行はれて居るから、何時も相變らずお目出度といつて居るのである。處が果してお目出度いのかお目出度くないのであるか、それは分らない。さういふやうな有様で、爪一つ見ても、昨日取つたものが今日は幾らか伸びて居る。何時伸びるともなしに伸びて居る。頭の毛一本でも短いものが長くなる。何時長くなるともなしに長く

なる。といふやうに極く短時間の間でも、移り變り／＼して居るけれども、唯だそれが間斷なく行はれて居るから、氣が附かずに居つて、昨日の我れは今日の我れ、今日の我れは明日の我れと思つて居る。けれども、昨日の我れは今日の我れではない。のみならず、此座に上つた時の我れと今の我れとは、違つて居るといつても宜しい。併し今日の我れは、昨日の我れの如くに働らいて居るから、同じものが働いて居るやうに思ふけれども、それは、多少の學問的の眼を通して見、又は宗教的の考を加へて眺めて見ると、殆んど常なり一なり主宰なりといふことが、事實に於て行はれて居ない。一旦此に氣附くと、其處に不安の念が起つて来る。不安の念が起つて来ると、一日も安んじて居ることが出来ない。どうしたら此の境涯を脱することが出来るか、禍を轉して福となすには、それはどうすれば宜いか。そこに懷疑の念が生じて来る。それが哲理である。人間は不自由であるから、自由を得たい。我れは不完全であるから、どうしても完全を見出したい。我れは相對的であるから、飽くまで絶對を見出したい。我れは目前的の心のあるものであるから、永久不變のものを求めたい。それが思ふに宗教の世の中に出来る、出来初めであらうと思ふ。

宗教の世の中に出て来たのは、さういふ風に人間の自覺から出て来たものらしい。それが表面から見ると、佛教とか耶蘇教とか回教とか、餘計なものを宗教家が作つて、無理強ひに勤めるといふやうな有様であるけれども、併し乍ら、決して無理強ひは出来ない。元と／＼人間の要求から起つて来た

もので、自然の發生である。譬へは、火を以て木に向けると、木は元より焼けるべき性質を有つて居るから、直ぐ焼ける。火を以て石に附けようとしても、此れは燃えない。石に燃ゆべき性質が無いからである。更に火を以て水に附けようすると、或化學作用に依ては附くかも知れぬ。色々の作用があるから、場合によつては附くかも知れぬ。併し普通は、水の中に火を附けようとしても、附かないのみならず、火は消えて仕舞ふといふやうなものである。我々人間と宗教の關係も其の如くで、決して我が心の中に無いものを、それを外から持つて來て植附けようとしても、出來るものではない。決して實、宗教心といふものを元來我々は有つて居る。有つて居りながら、それを自覺して居るかどうか。唯だ浮か／＼として過して居るが、今もいふ通り、自分の身體を調べ心を調べて見て、そこに一種の自覺が生じなければならぬ。唯だそれだけのことである。

斯ういふ話で大分時間か過ぎたから、今日は未だ普門品に這入ることが出來ませぬ、因て先づ觀世音菩薩といふことに就いて一寸申上げて置く。觀世音菩薩といふ方は、何處にお生れになつて、どういふ御經歷があるか。斯ういふことは、經文の上から歴史的事實を調べ、又は經文の傳説的事實に就いてお話すると、觀音菩薩といふ方は、大悲心陀羅尼經を初め、莊嚴經、悲華經、思益經其の他の經文によつて、略ぼ其の御出所を明かにすることが出来る。而して金光明經に出た所の正法明如來といふ佛であらせられたといふことである。さういふ所も書物によつて明かになつては居るが、其のこと

は専門家の研究に屬すべきことであつて、今日此處で詳しく申上げる必要は無い。唯だ一二の點を一寸申上げて置く。正法明如來といふ高い如來の位にある方が、どうして觀世音菩薩といふ低い菩薩の位を以て呼ばれて居るかといふに、高い如來の儘では、洩れなく一切の衆生を濟度することが出來ないから、下化衆生の爲に、自からへり下つて、高い如來の位から菩薩といふ低い位にお就きになつたのである。其の時に觀世音菩薩といふ名が附いて、此の世に現はれてお出でになつたと、經文にさう載つて居ります。それからもう一つは、現在活きた觀音は何處にお出でになるかといふと、今も申上げた通り、段々人間が眞面目な考を起して來るといふと、不安、懷疑、煩悶、さういふことに陥つてどうしても安心を求めなければならぬといふことに氣が附いて來る。そうなつた時には少し觀音といふことが心の内に現はれて來るかも知れぬ。言はゞ觀音の光——影法師位は認めるやうになると思ふのである。といふのは、觀音菩薩は一言で何であるかといふならば、與樂拔苦といふ御身であるとしてある。與樂は文字の通りで樂を興へること、拔苦は苦を抜くことであつて、一口にいふと、觀音といふことは、我々が此の苦みを抜き、樂みを興へてやらうといふことになる。此れが即ち觀音といふことの解釋である、經文にはさういふてある。我々が不安、懷疑、煩悶の極、安心を求めるといふ時になると、自然に心の中にあつて、何等か光り、影法師といふやうなものを認めることになる。私はそれに就いて斯ういふことを言つて見たいと思ふ。世の中に——事柄は大分隔つて居ることの

やうであるけれども——酒のことに就いてこういふ言がある。一杯、人、酒を飲む。二杯、酒、酒を飲む。三杯、酒、人を飲むといふことがある。一寸奇抜なことを言つたものである。さういふやうな口調で私に言はせるといふと、若し此所に人あつて、観音經を讀むといふならば、一讀、口、經を讀む。斯ういふて宜しい。二讀、身、經を讀む。斯ういふても宜しからう。三讀、心、經を讀む。斯ういふ風に、口と身體と而して心とに引き分けても宜しからう。斯ういふ工合になつて來ると、先づ經文にある觀音は、元とく何處から出ましになるかといへば、人間は銘々に厭やでも應でも觀音の大慈大悲の中にあるといふことに氣が附いて來る。觀音を信じない、佛教は嫌ひである、大體坊さんが氣に喰はない、信じて居ることに碌なことが無い。といふやうなことを云ふて、自分に信ずるとか信じないと云ふても、それは丁度小さな魚が水の中に居つて、水を忘れて居るやうなもので、水が嫌ひだとか何とか云つても、大體水の中に游泳して居るのである。我と佛教と少しも關係がないといふても、銘々の心の中には、一つの生きた觀音があるのである。斯ういふことに氣が附いた以上は、我々は元々觀音の温かき大悲の光りに包まれ、拔苦與樂といふ同情の懷ろの中に、安眠して居たと云ふことが分つてくる。「雲霧れて後の光と思ふなよ、もとより空に有明の月」である。であるからして、もう此れからは觀音經を讀むといつても、最初の内は口に讀んで見る。私も子供の時のことを考へると、始め此經を習ふ時分には、譯の分らないことを、唯だ師匠から教えられた儘讀んで居つた、心では何の一

向自覺したことも、氣附いたことも無く、何が無しに讀んで居つた。けれども、其處に知らずくの間、觀音の感化を受け初めたのであります。——身で讀むといふことになる、觀音の大慈大悲の心を我が心にして、之を身に行ふのである。口、經を讀む時分は、邪惡の念はまだ斷ち去るとが出來ないのであるが、苟も身體に讀む場合になると、即ち觀音の心を我が心にして讀むと、決して惡い恐ろしいとは出來ないことになる。自然と立派な行ひになるのである。——次に心で讀む場合になれば我々が一念の心の上に、觀音様の萬徳圓滿な御姿が、生々として現はれ來る。之を堅い言葉に直していふと、先づ第一に主觀的觀音で、我が心即ち觀世音なりと斯ういふ心が起つて、初めて其光りを認めて來ると、貪慾、瞋恚、愚痴といふやうなものが、自づから消え失せて仕舞ふ。我が心の本體は何か。觀音即ち我が心の本體である。斯ういふ工合に觀るのは、言はず主觀的の眺め方であります。客觀的に眺めて見ると、此の天地間に滿つる所の森羅萬象、一切の萬物は、物として觀音の現はれに非ざるものなしといふことになる。斯うなると、何處へ行くにも歸るにも、處として觀音の淨土ならざるはなしである。これは客觀的に見たのであります。けれども、主觀とか客觀とかいふことは、能く學者達が使ふ言葉であるが、つまり總ての物が觀音であるのであります。我々は平生主とか客とか、我れとか彼れとかの別を立てるのであるけれども、眞實、悟りの眼、心の眼を以て之を見る時に於ては、主觀も無ければ客觀もなく、三千世界唯だ是れ一個の觀音である。總て是れ一卷の觀音經である。

南無大慈大悲觀世音菩薩と稱へるより外はない。斯ういふやうな観音を、一つ我々の頭に刻んで置いて、さて其れから段々經文に這入つてお話をしたならば、親しく観音に接して、寝ても起きても観音の光りの内を出ない。する事爲す事観音の慈悲を外づれないといふことになると思ふのであります。初めに一言お断りしたやうに、今日は大約此の邊に止めて置いて、此の次ぎから親しく本に就いてお話したいと思ふ。

猶ほ此は私の願ひであります、今此處でさう申上げて宜いか悪いか分らないけれども、會員方の中で、普門品は字數も太したものでないから、お暇があつたならば、少しづつ其れを書いて、口でよく読んで戴きたい。尙ほお暇があつたならば、全部書いて下すつて、それは何時までといふ限りは無いのであるが、出来上つたならば、それを私が集めて、一つ所に納めたいと思ふ。之が私の願ひであります。實は現今私の住して居る寺に、大さう有難い観音が安置されてありますので、それには色々由來もありませんが、他日其寫經が少しづつでも出来上つたならば、其所に納めて、それを因縁にして自利々他の修養を爲したならば、講釋だけでないに、多少事實に現はれて行くことになるので、大變結構なことと思ふ。一言思ひ出したことを御披露して置きます。今日はこれで散會にします。

# 觀音經講話

釋宗演禪師述  
婦人道話會速記

## 第一回

無上甚深微妙法。百千萬劫難遭遇。我今見聞得受持。願解如來眞實義。

**和訓** 無上甚深微妙の法は、百千萬劫にも相違ふこと難し。我今見聞し受持することを得たり。願くは如來の眞實義を解し上らむ。

**講語** 今日よりして、觀音經を拜讀して、お話を致すのであります。其前豫め一言お注意をして置きますが、書物の講釋には種々爲様のあるもので、單に學生とか修行者とかいふ人に御話するのならば、或場合には、六かしい熟語とか漢洋の言葉などを用ゐなければならぬともありますが、此の席にはさういふ必要は無からうと思ふ。相成るべくは互が平素打解けてお話をされる様に、極く平易

に極く心易くお話をした方が、或は宜からうかと思ふ。それに私も随分多忙に暮して居つて、色々考致したい書物も心得の爲め別に書附けはして置いたが、それを今一々調べて居る暇が無い。よつて此の度は、私が知つたといふよりも、寧ろ信じたといふ側でお話を致して見たいと思ふのでありますから、其お積りで御聴き下さることを御願ひ申します。

それで今日は、さう時間もありませんから、最初の標題位でお話が終わるであらうと思ふ。それに就いても、一御相談申上げて置きたいことは、斯ういふお話をする不肖の私と、又お聴きになる貴女方が御互に最初に斯ういふ観念を持つて居つたならば宜からうと思ふ。それは仕ういふ観念かと申すと、我々は全體何の現はれであらう。と斯う第一に自問自答をして見るのである。すると直きに答が出来てあらうと思ふ。我々は年長けたるも幼きも、貴きも賤しきも、皆押しなべて觀世音菩薩の現はれである。斯ういふ言はゞ自信といふて、一つの観念を最初に判然と自分の心に据えて置いてそれから徐々としてお話をしてみたり聞いたりしたならば、親しく相接する所があるに相違ない。所謂感應道交といふて、總て斯ういふお話になると、寧ろ理窟とか一種の學問とかいふものは迂遠である、直ちに自分の麗しい且つ最も清らかなる感情で、最も直感的に、直覺的に、觀世音菩薩と我々が親しく相一致して居るものであるといふことを観念して置かないと、誰だ面白いお話をしたとか聞いたとかいふて、折角のお話も單に一場の談話に終つて仕舞はうと思ふ。處が考へ様によつ

て、私自身が觀世音菩薩の現はれである。と斯う自覺して見る。多くの人の内には、それは坊さんの側からはさういふのであらう、佛教の見る所はさうでもあらうかなれども、我々は人間であつて、觀音の現はれではない、と斯う思ふ人もあるかも知れぬ。併し私に云はすると、什しても我々は觀世音菩薩の現はれであると、明かに云ひ得ると思ふ。それは何故かといふに、段々經文の中に這入つて行くと詳しく分るのであるが、大體觀音といふのは、觀音即ち慈悲と智慧と而して勇猛心の此の三つの現はれである。此の慈悲といひ智慧といひ、勇猛心若くは道義心といふものは、世間儒教などでは智仁勇なども云つて居るが、觀音は即ちその現はれであります、つまり觀世音菩薩は、種々經文の中にある通り、十方國土の中に、刹として身を現さずといふこと無しで、十方世界は總て觀音の領分のやうなもので、何處にも身を現はさないといふことは無いといふことが説いてある。それから段々這入つて行くと、「慈眼視衆生、即ち慈悲の眼を以て衆生を視ると、福聚海の如く無量なり」と。斯ういふ言葉もある。斯ういふことは何處から言ひ得るかといふと、觀音の説法は即ち大慈大悲の教で、丁寧にいふならば、與樂拔苦、苦みを抜いて樂みを與へるといふことに外ならないのであります。それは獨り向ふに崇め尊んで居る一つの觀世音菩薩のみならずして、我れ自身の内容を叩いて見ると矢張り我々は、固より生れながらにして大慈悲心を有つて居るのである。此の大慈悲心を有つて我々が生れて居るといふことは、私は決して無理な言ひ分では無からうと信ずる。それならば慈悲許りか



といふと、同時に佛若くは菩薩であります。それであるから、經文の中にも詳しくいふてあるが、「智慧は諸々の闇を破り、光明は世間を照らす所の佛」である。此の言葉が現に經文の中に出て居ります。即ち觀世音菩薩は一面から見ると、又大智慧の根本であります。此の大智慧といふものは、決して他所から借り來つたものではなくて、我々が生れながらに備えて居るものである。而して更に又一面には勇猛心——此れも經文に詳しくいふてあるけれども、什いふ戦でも、什いふ急な難儀の場合が生じてても、「能施無畏」で、現に經文の中にあります。斯ういふ點から見ると、觀世音菩薩は即ち勇猛心又は道義心と呼んでも宜からうと思ふ。或は今日の學校などで普通にいふ所の言葉で申すと、明かなる智慧、美はしき感情、而して堅固なる所の意思の力といふことになる。斯ういふものは誰から授かつたといふものではなく、皆自分自身の内容に備えて居るものである。斯ういふことから、道理上から見ても信仰上から見ても、我れ即ち觀音の現はれてあるといふことに、什しても立ち戻らなくてはならないことと思ふ。さういふ意味からして、先づ經文のお話をするにも、それを聽いて下さる上に於ても、常に我れは觀音の現はれてある、少なくとも、我れは觀世音菩薩の片割れである。と斯ういふ自信を持つて居て頂きたいので、廣い義理からいふと、斯ういふ意味の感じといふものは、決して佛教の獨り私する所ではなくて、何の教にも通じて在るべきものと思はるのである。斯う一つ根本を極めて置いて、それから聽いて戴くならば有難いと思ふ。

扱て觀世音のことに就いては、印度に於ける歴史があり、支那に於ける歴史もあるが、寧ろそれ等は後廻しにしてお話しの方が宜いかも知れぬ。それで日本に於ける觀世音の始めといふのは、御承知でもあらうけれども、丁度推古朝といふて宜いのである。其の推古朝あたりには、既に觀音が信仰の標的として現はれて居るのであるが、それからして觀音の教化が、上は王公より下は士庶人に至るまで行はれて居つたといふとは歴史上に明かでありませぬ。其の推古朝に於ける聖德太子が、自ら我れは觀音の化身であると自信せられて居ります其様は能く繪などにも描いてあるが、若し天下の一大事なりと思はるゝ時は必ず夢殿に立て籠られて所謂深入禪定中に於て親しく觀世音から教を受けて、而してそれを經綸の上に行はれたと云ふのである。其の時聖德太子の御一心が、御自身に觀音にありなされて、感應道交の妙境に達せられたものであらう。それから奈良朝、特に聖武天皇の時に、光明皇后などは、熱心なる佛教信者であらせられて就中觀音菩薩を御信仰になりました。其の光明皇后の御事蹟などでも、皆書物に現はれて居るから、大概は御承知でもあらうが、一例を擧げて申すならば觀音の慈悲を御自身に體しなされて、有らゆる善根功德を行はれ、就中——今日も一寸風呂の話が出ましたが、大變に立派な湯殿をお拵えになつて、下層社會の者で風呂へも這入ることの出来ないものに施浴して、自由にお湯に入れてやりたいといふ誓願をお起しになつて、只お湯へお入れになつた許りでなく、金枝玉葉の御身を以て、下つて御自身湯女といふやうな有様で、——丁度女の三助——

—と申しては恐れ多いが、御自ら今の貧しい人々、氏素性も分らないやうな、哀れな人々の身體を潔めてやらうと、御自ら袂をとつて袖をからげて、さういふ賤しい人々の垢を取つておやりになつた。所が或時に、大變汚ない二た目と見られないやうな癩病患者が、其處へやつて來た。皇后は此れは可哀さうな、風呂へ一度も這入つたことが無いやうだと、同情を以て御自ら洗つてお遣りになつた。總體癩病患者といふものは、貴い人には無いもので、先づは賤しい人に多い。而して病氣が重くなると、身體中、何處もかも膿だらけになつて、大變汚ないものである。人の迷信かも知れぬが、其の膿を人の口で吸つて仕舞へば、病氣が早く癒るといふ話であるから、光明皇后は更に同情を以て、其の患者の不潔な膿を、御自分の口で以て皆吸つてお遣りになつた。そのみならず、其の患者へは決して他言してはならぬとの仰であつたから、これ程の事蹟が、其當時誰も知らない位であつたといふことであります。中々こういふ尊ひ所業は容易には出来るものではなからうと思ふ。それから奈良朝の時代は、上下を通じて觀音を信するやうになり、又宗派の區別もなく、各宗何れも觀音を信するといふ有様でありました。

かくて奈良朝から平安朝に移つて來ると、愈々益々觀音信仰が盛に行はれて居ります。それであるから京都の清水の如きは、田村將軍の發願に因つて彼の様な莊嚴なる大伽藍が建てられ今日まで數多の善き因縁を結んで居ります。花山法皇は觀音の御信仰が洵に深くあらせられて、三十三ヶ所の靈場

を取り立てられました。能く田舎でも都會でも、御詠歌と稱して謠ふ歌がありますが、あれは花山法皇の御製であると傳へられて居ります。果してそれが本當であるか付かは、調べて見ないから分りませぬが、さう言ひ傳へて居るのである。而して法皇御自ら巡禮として、觀音の靈場をお廻りになつたといふやうな有様で、それから數百千年の今日に至るまで、兎に角觀音の信仰といふことは、殆んど萬人の精神を支配したといつて宜い。少くとも日本人の精神は恰も地中に水の行き亘つて居るが如くに、此の信仰心が瀰蔓して、宗派の異同も何もあつたものではない。現世、未來と假りに二つに分けていふならば、未來よりも現世に於て、皆安心が出來るといふのが觀音の本願である。現世に安心しなければ、未來の安心は覺束無い。寧ろ現世を先きにして、心を淨め安んじて樂しみを受けさせたい。而して心と同時に肉身——靈と共に肉、之を同時に餘さず洩らさず救ひ上げたいといふのが、觀音の本願である。さういふ工合に思つて見ると、我々は觀音と何等かの因縁があり關係がある如くに考へられる、即ち段々考へて見ると、我々は智慧の現はれ、慈悲の現はれ、又意思の力の現はれである。と、什しても信じなければならぬことになる。斯ういふ所が宗教の極めて大切な所で、さういふ自信があるならば、苟くも觀音の慈悲の現れる人間として、間違つた邪しなな、まして況んや罪惡を作るといふやうなことには、什しても心が向けられなくなる、此れが有難い所である。さういふ積りで此の講話を聽いて戴けば尙更有難い。

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五、是れが標題であります、此字義も六かしく講釋すれば際限のない事であるが、今日此席ではさういふ必要は無らうかと思ふ。成るべく一通り簡單にお話する積りである。何分平生貴女方のお使ひになる言葉とは違つて、縁遠い事のやうにも思はれるかも知れませぬが、兎も角順序として、初めの妙法蓮華經の五字の字義から申上げて見よう、妙の字は説文的に解釋すると、女偏に少いと、斯う書いてある、何事でも言葉の届かぬ所に至ると、あゝ妙だと、何時でも使ふ字であります。妙の字は今もいふ通り、説文的にいふと少い女といふとであるが、それに就いて昔有名な歌がある。「妙の字は少い女の纏れ髪、結ふにははれず解くとかれず」。これは能く妙の字を解釋して居ると云はれて居る。さういふやうな有様で、妙の字は我々の言葉の及ばない所で、讚歎した所から發する所の文字である。あゝ妙だ。丁度始めて松島へ行つて其風景を什感じたかといふと、歌詠み、俳諧師、詩人、文人と色々行つたけれども、何と松島の景色を形容しても能く其真を言ひあらはすことが出来ない。そこで讚歎の餘り、彼の俳人、貞室は「松島やあゝ松島や松島や」と詠んだ。これも矢張り妙の字である。段々と云はうくと心に練つて見ると、仕舞にはそれより外に言ひやうが無いのである。吉野は花の名所で、親しく一目千本の爛熳たる景色を眺めては、これも何といつて宜いか言葉が無いから、洵に「これは」と許り花の吉野山」。詩に作つても矢張りさうである。古人

の不識三廬山眞面目。只緣三身在三山中。故に妙の字は、到底言葉で言ひ現はせない所の心を現はす文字である。其の字義であるから妙法といふのであります。次に法の字は、大變廣い意味を有つて居るが、一口にいふと「のり」といふことである。佛教では世間の言葉で物といふのに、多く法の字を使つて居る。言ふまでもなく、物あれば必ず法ありで、大は天地より小は微塵に至るまで、苟くも形を現はしたものは、必ず法則が備はつて居るのである。一寸心無くして眺めると、水の上に泡が浮んだやうに、唯だ目にはばい鼻にはばい口にはばい色々物質的のものが、姿、形を漠然と現はして居る如に思はれるけれども、一種の學問上、否もう一つ進んで宗教上の意味から眺めて見ると、甚だ妙である。法の字は物といふことに平たくいつて居るが、其の物には如何なる法があるかと、ずつと眼を放つて天體を眺めて見ると、太陽系統、星、地球等の間に、求心力であるとか、遠心力であるとか、種々其處に法則が備はつて居つて、地球一つでも、ぼんやりと存在して居るやうに見えるけれども、決してさうではなく、色々緻密な法則が行はれて居るのである。其の關係、物と物とが段々に繋がつて居る有様は、例へば、限り無き鎖が何處までも果てしなく、過去未來、無限にずつと引つ張られて居るやうなものである。縦に時間の上から考へると、さう思はれるし、横に場所の上から考へると、無限大の網を擡げたやうなものである。其處にも極く緻密なる嚴正なる因果の法則が行はれて居つて、山が聳えて居るといつても、唯だ空しく聳えて居るのではなく、川が流れて居ると云つても、ぼんやり流

れて居るのではない。火の燃え上るのも水の低きに就くのも、皆一々法則があるので、誰が何とする  
 ことも出来ない確な法が、其處に行はれて居るのである。それを佛教では色々の換え言葉があつて、  
 或は眞如といひ或は菩提といひ或は實相といひ、一々算えて來ると煩はしい位であるが、世間の人の  
 目には其の名の多いのに眩惑されて、何か異なつたものゝやうに思ふけれども、名に迷はずして、實  
 に就いて見る時には一つである。一つの大法が何處までも無限に行はれて居るのである。儒者は至誠  
 息むこと無しといつて居る。今妙法も其の通りで、息むことなくして行はれて居るのである。何故そ  
 れならば法の上に妙の字を附けたかといふと、實にそれが奇々妙々、言葉に言ひ盡せないからであ  
 る。誰やらの俳句に「ありと見て無きは常なり水の月」といふのがある。今水にきらりと映つて居る  
 月、月の姿には違ひないけれども、手を伸ばして捉えようとすると、月影であるから何も留まらな  
 併し見ようによつては、之を裏にして「無しと見てあるは常なり水の月」といふことも出来る。此の  
 世界といふものは、決して一方に偏することが出来ないものである。唯だ一方にのみありといふと、  
 大變片偏ることになる。有りといへばあるが、同時に無いといふことも出来る。平等といふことも出  
 來るが、同時に差別といふことも出来る。其實は有でなく無でなく有でないでもなく無でないでもな  
 く所謂四句を離れ百非を絶してと云ふとチト六かしくなるが畢竟は實に眞空であつて、跡も形も留ま  
 らないものである。眞空無相といふ言葉が佛教にある。一言注意して置くが、眞空とは何も無いとい

ふことではない眞即空で眞實を自身自身が空であるのである。我々は誠々と平生言ふけれども、誠は何  
 であるかといふと、肉眼で見れば何も見えないものである。けれども、什しても千古萬古を打ち貫ぬ  
 いて、決して變らない所のものである。「年毎に咲くや吉野の山櫻木を割りて見よ花の有りかは」是は  
 昔から言ひよるした歌ではあるが、あの冬枯れの木の中にチャンと麗しき花が包まれてあるかといふ  
 に、何の跡も形も無いのである。世間の人は形の見えないものは眞實でないと思つて居るが、斯う  
 いふことは、佛教では眞空といひ妙有といひ、眞實は空なると同時に亦有である。其處を付言ひ現  
 はして宜いか分らないから古人は眞空妙有といふてを、扱てさういふ風に學問的に言へば限りもな  
 いが一體此の妙法といふは、言句や理窟にあてがうべきものでない、花は咲ひべし折るべからず、鳥  
 は聞くべし捕ふべからず、妙法は味ふべし論ずべからずである、凡べて眞理の極致は無言で會得しな  
 ければならぬ、孟子も「曰く言ひ難し」と云つたのは此處である、去りながら一般の人には何か妙法  
 の表象とするものが必要である處から且らく其れを人格化して佛様とか神様とか又は今の觀音菩薩と  
 か申すのである。我々は此妙法があるから、安心すべき地盤があるのである。此妙法といふものを認  
 めなければ、吾人の生活は、唯だ物質上の營み、唯だ肉體上の働きだけで、其の乾燥無味なる有様は、  
 洵に情けないものである。抑々我等の身體の健康は、象や牛などには及びも附かない、目は鷹、鴟鳥  
 には及ばない。鼻は猫や犬などの鋭敏には敵はない。さういふ風に較べて見ると、自からは萬物の靈

長などいふけれども頗る覺束無いものである。然らば精神作用は何處かと云ふに是も頗る怪しい、如何な聖人でも、一寸前きのことは分らない。唯だ學問だけ理窟だけでは妙法は分らぬ、そこで我等は一つの別天地を開かねばならぬ、是に於て始めて宗教上の眞實の信仰が大切になつて來る、其の妙法を佛は譬へを以て御示になつたがそれが、即ち蓮華である。

蓮華といふものは其の道の學者の説によると、蓮華は華果同時といつて、花と實が一緒に出來るといつて居る。成程蓮華がそろ／＼咲かうといふ時に、能く見るとチャント實がなつて居る。大抵のものは、花が落ちて實がなるが、蓮華は華が咲くのと實のものとが同時である。妙法は其の意味に譬へられて居るのである。此の妙法といふものは、今佛になつても菩薩になつても——亦垢の凡夫でも少しも増減はない。我が一念信仰の萌した時、其の時が直に成佛得脱した時である。尋常修行の順序から云ふと一念信仰を起して後五十二位の階級を経てソロ／＼佛の位に登るのが當り前である、然るに此妙法を標榜する大乘の立場から云ふと、我々の一念發起した其の時が即ち佛の活現せられた時で、東海道を旅行でもする様に五十三次、次ぎへ／＼と宿々を追ふて行くのではない。純圓獨妙なる法華經の地位から眺めると、一念の心に向けた時が即ち成佛得脱した時である又妙法蓮華は原因結果であつて、佛は結果で我々衆生は原因である。斯ういふことも言ひ得る。此の如くに、凡夫心の中にも、具足圓滿なる佛の法がある。併しながら其れは一念信仰を起して見ないと、それを認めることが

出來ない。要するに妙法といふものは、恰も蓮華の華果同時なるが如きものであつて、佛の中に衆生を含み、衆生の中に佛を包むといふ妙體であるから、蓮華を以て譬へたのである。妙法蓮華經といふは、御承知の通り一口に法華經と稱して居る。其の經の字の意味は「つね」である。眞理は常である。如何に世が革まるも、眞理は常に變るものではない、と云ふ義である。要するに宇宙萬象一切の物は皆この妙法蓮華經の題目である只一念の信仰に因りて此妙法を味ふことが出來る其外色々の義理がありませんが、學者の講釋になるから、今は略して置きます。

其の妙法蓮華經には、色々翻譯があるけれども、多く用ゐられて居るのは、八卷程に分れて居るものである。其の法華經の中に、普門品第二十五といふのは、法華經八卷の中には、一體二十八品といつて、二十八章に分れて居る。其の二十八章の中の順番からいふと、此の普門品は二十五番目に當るから、それで二十五といふ字が書いてある。矢張りこれは法華經の一部である。其の妙法蓮華經の中に、觀世音菩薩とあるが、此のことは前申し上げて置いたから今は只字義だけを話する。觀世音といふことは、世音を觀する、と斯ういふのである。世間の音聲を觀するといふことである。觀とは心で明かに物を見る。其場合に使ふ字が觀である。等しく見ると言ふても肉の目で見ると心の上で見るとの區別があるが此心で見のが「觀」である。それから觀音は什して觀音といふ名を得たかといふと其の所由は一切世間の音聲を觀して、而して慈悲方便を施すといふことから出て來て居るのである。元來

菩薩と云ふ者は眼の發達した人には眼の方から教え、鼻の鋭敏な者には鼻の方から教えるといふ工合に、種々善巧方便を施されるのであるが。此の觀世音は耳の方から一切衆生を導く。と斯ういふことになる。これは楞嚴經に出て居ることであるが、娑婆の教體は音聞より始むといふことがある。此娑婆世界の衆生は五根の中でも、耳が一番鋭いから、其の方から法を説いたならば、能く了解が出来るといふので此耳根圓通に因つて耳で見、目で聞くと云ふ有り難いことを教へられたのである。就中、今人あつて、南無大慈大悲觀世音と一心不亂に唱へると、觀音は何處にでもお居でになるから、其の聲に應じて、響の聲に應ずるが如く、又は人の門に立つて扉を叩けば内から直ちに答をするが如く、即座に身を現はして、人々を濟度なされるのである。丁度幼い小供が走つて来てお母さんといふと、親は無意識的に後ろを振り向き、直に手を出して伴れて行くやうな有様で、今觀音の大慈大悲の本願として、世間の衆生を救濟しようといふ所から見ると、何處から現はれるといふこともなく、世間の音聲即ち觀音の御名を唱へるものがあれば、直に身を現はして濟度なされようといふのである。今音聲を觀するといふことは、世間的にはチヨット無いことである。世間的に言へば、見るのは眼の役目聞くのは耳の役目といふ風に極まつて居る。然るに心の上で觀すると、人の呼んだ聲が耳から這入らうと目から這入らうと、何れの門から這入つても、大慈大悲の懷ろに融通されて仕舞ふのである。例へば川の水であるが、大なる川、小なる川、或は清く或は濁り色々の違ひがあるけれども、一度び大

海に到つて仕舞ふと、これは隅田川の水だとか、利根川の水だとか、議論をする餘地は無い。皆な一樣に大海の水である。それと同じく、眼から這入つても耳から這入つても、圓通といふ境涯に至ると、ずつと融解されて仕舞ふのである。觀世音菩薩——菩薩といふことは皆人の口にするので、詳しい講釋は今略して、大體菩薩は大心衆生といつて、大きい心の人といふことである。即ち自分を棄てゝも、人を救ふといふ大なる心を有つて居るといふのである。故に利他の願心を有つて居る人々は僧でも俗でも、皆な菩薩に違ひないのである。

次に普門品。普は「あまねく」、門は家の入口の門、これも學問的に講釋するには及ばないが、併し茲に一つの門があるから、是非とも其の門から這入つて行かねばならぬと、さういふ風に限られた譯ではない、どの門からでも宜い。其の意味が即ち普門である、觀音が衆生を濟度するといつても、種々の門が開かれてあつて、例へば眼門とか耳門とかどの門から這入つても、直に手を取つて安樂の世界に到らしめようといふお思召である。門はつまり方便で、濟度の方法が數多あるといふので、普門といふ。觀音が衆生を濟度しようとして、應病與藥、其の方便手段が色々あるをいふのである。現に普門品には三十二身といつて、例へば婦人が出て來ると、觀音が婦人の身となつて現はれる。幼い小供が出て來ると、又小供の身となつて現はれる。我々でもさうである。私は常に種々の人に出逢ふけれども、婦人に逢へば、矢張り婦人の心持になる。態々さうするのではないけれども、丁度鏡と鏡

と照らし合ふやうなもので、花が目の前に来た時には紅と映り、柳が来た時には緑になる。それが當り然であらうと思ふ。私は謙遜して觀音の片割れといふのではない。自然に觀音にならねばならぬと思ふ。来た人に應じてそれ相應に現はれて、道を説かなければならぬ。優しい婦人に對して、議論を吹っ掛けた處で應ずるものではない。男子の態度で、肩を怒らして應接しては、婦人を説くことは出来ないものである。唯だ表面から見ると、坊さんは唯坊さんの形であるやうであるけれども、意生身の其上から見ると、私共のやうな詰らないものでも、一日の間には色々に早變りをして、一人の坊さんではない、婦人になつて逢ふこともあれば、子供になつて逢ふこともある。貴さにも賤しきにも其の時々によつて變る、そこは無位無官の坊さんの有難い所で、私は常に自身に感謝して居る、觀音の三十二の化身といふけれども、それは大數を擧げた迄で、三十二には限らないのである。百千萬億無量無邊にお姿を現はして、どうぞして數多の人の爲め、世の爲めに利益になるやうにと本願をお立てになつたのである、妙法蓮華經普門品は、觀世音菩薩のお働きになる數多の門戸を開いたものである。其の慈悲方便を説かれた所のお經である、普門品の品字は類と同じである、世間で稱する所の品類と熟字する文字であります。

第二一回

爾時無盡意菩薩。卽從座起偏袒右肩。合掌向佛而作是言。世尊觀世音菩薩。以何因緣名觀世音。佛告無盡意菩薩。善男子。若有無量百千萬億衆生。受諸苦惱。聞是觀世音菩薩。一心稱名。觀世音菩薩。卽時觀其音聲。皆得解脫。

**和訓** 爾の時に、無盡意菩薩即ち座より起ちて、偏に右の肩を袒き、合掌して佛に向つて、是の言を作す。世尊、觀世音菩薩は何の因緣を以てか觀世音と名づくるや、佛、無盡意菩薩に告げ玉はく、善男子、若し無量百千萬億の衆生あつて、諸々の苦惱を受けむに、是の觀世音菩薩を聞いて、一心に觀世音菩薩を稱名すれば、即時に其の音聲を觀じて、皆解脫することを得む。

**闡釋** それで今日より、普門品の本文に這入つてお話を致します。「爾の時に無盡意菩薩」……大抵我々が經文を見ると、何れの經文でも、皆爾の時に」といふことが一番最初に出て居ります。爾時佛在云々といふことが、大抵どの經文にも書いてあります。一口に讀んで仕舞へば、爾時はその時であるけれども、もう少し詳しくいふて見ると、その時といふのは、此の前を一寸受けて居る。それは法華經の本文へ這入つて見ると——此の普門品は第二十五番目であるが、其の前の二十四番目に於て、妙音品といふのがあつて、妙音菩薩が自分の得た所を、佛の前に詳しく話して居る。それが終つて、そ

れから此の無盡意菩薩が話をすると、斯うなつて來た其の時、其の時を指して爾の時といふのが事相上の解釋——事實の上の解釋である。總て經文の解釋には、事釋とて事實の上の解釋と、觀心釋といふて精神的に我が心を主として解釋すると二通りの方法がある。そこで此の爾時といふことに就いては、昔から多數の學者が之を解釋して、随分六かしいことをいふのである。即ち爾の時といふのは、我々が轉迷開悟といふて、迷を轉じて悟りを開く其の時を指すといふのもある。或は離苦得樂、苦しみを離れて樂しみを得る其の時、或は止惡修善、惡しきことを止めて善きことを修める其の時、斯ういふ工合に色々にいふて居るけれども、併しさういふ風に六かしく云はなくても、爾の時といふのは、此れから先き私がお話を致す其の時である。貴女方の内で之を聽いて見よう、と斯ういふ一念を起した其の時である。話さう、話されよう、説かう、聽かうと、お互の心と心とがピッタリと出會う所が即ち爾の時である、斯ういふて差支ないのであります。それに就いて考へて見るに、佛が愈々說法登場せられる時分には、何時でも三緣具足といふことがある。三つの因緣が能く具足した所で始めて法をお説きになる。それにはチャンと理由がある。次手だから此三緣具足といふことについて一寸一言説明を加へて見れば、三つの因緣とは何であるか、それが何と何と和合するかと、人天の和合、時節の和合、所在の和合、と斯ういふ三つである。人天といふのは文字の示す通り、人間と天部。時節は言ふ迄もなく時のことで、所在とは或所である。もう一遍平たく言へば、人の和合、時

の和合、所の和合、斯ういふ三拍子揃つた所で、始めて貴き光りが其處に現はれるのである。佛と人の和合、——それから我々でも時節到來と云ふ言葉を、お互に平生使つて居る如く、時節といふのも又大切である。併しそれだけではまだ十分でない、其他色々々の因緣が和合して、總てが都合能く整ふた所で初めて或物が成り立つといふ、さういふ有様である、——人天の和合——佛と人と出會うた時である、さういふ場合、説かう聽かうといふ其の時である——時節といふもの、利用も又大切なとて時を得なければ、何事も成り立つものではない。一寸いふて見ると、櫻の花は美しい、隅田川へ行つても吉野山へ行つても誠に美しいことであるけれども、時を得なければ、あれだけに美しい花にはならない。古人の歌に「春來てはみな若葉にそなりにける雪いたゞし翁草まで」、そんな有様で……時に會へば枯木も再び花を生ずといはれて居る。其の通り時が來ると誰が咲かすのでもなく、花が自づから咲き出すのである。さういふ風に、萬事萬端時が大切である。處といふことも、矢張り大切である。若し其の處を得ないと、折角の説法も無駄になる、成程或場合には青天井の下でも説法する、天幕的傳道更に結構であるが併し何時もそればかりでは十分でない、佛の先例を見ると、矢張り處を得て説法して居られる。御存知の如く、佛はあの通り雪山で六年一日の如く修行して、それから下山なされて、始めて説法なされたのが有名な鹿野園と云ふ所である。最初此處で説法なされたに就ては彼の橋陳如等の五比丘に係はる深き因緣のあることであるが、其話は他日に譲ることにする。今でも矢張



り處といふことが大切である。お寺が仕うとか斯うとかいふけれども、お寺といふ所が最も大切な所である。嚴くいふならば寺は神聖な場所であるけれども、悲しひかな末世になると、仕うも世間ではお寺で説法をすると、大抵爺さん婆さんだけが命の洗濯にでも出て來るといふ有様である。片田舎などでは、説法を聞きながら、晝寝をしたり煙草をのんだり、又は世間話などをして居る。そんな有様である。しかのみならず、お寺といふ所は唯だ何か葬禮をする所とか、祖先にお経でも讀む許りの所のやうに思つて居る。それも悪いとはいはないが、それ許りの所の様に思ふから、寺は神聖な所であるに拘はらず、今は妙なことに變つて來て居る。寺が處を得ないといふは情けない。此の間も何處やらへ行つてもいふたが、實は寺があるから説法が出来るのだ。貴君方が時々寺は目出度くない所不吉な所と、斯ういふすら勿體ないことである。そこで一つ學校で話をしやうとすれば、學校は物を學ぶ所であるからして調和しない。公會堂、議事堂は何だか店借りの様な氣がする。併し所によつては場所が無い爲めに、已むを得ず劇場を利用して説法することもあるが、それには當座困ることがある。ワザト其處に持つて行つて、本尊の掛物を掛けるとか何とか、仕うも妙でない。劇場で説法の出來ない筈は無いが、斯る所は、本來が娛樂の場所であるから、仕うも莊嚴の氣が出ない。其處へ行つた人は娛樂といふ氣が失せないで、眞底身に浸みて法を聽かうとしない。何か知らんが敬虔なる莊嚴なる意味が劇場では什しても現はれない。これも淫を得ないからである。故に處を得るといふことは

大切なことである、是は大分餘談に亘つたが、何事もさうであらうと思ふ。事柄は違ふであらうけれども儒書を見ても、天の時、地の利、それから人の和といふことを重んじて居る。天の時を得なければならぬ。地の利を得なければならぬ。人の和を得なければならぬ。斯ういふことを云つて居る。人の和合と而して地の利、天の時、之を得たならば、其處で始めて或る仕事成就するといふのであるが、それに違ひ無からう。つまり「爾の時」といふのは、顔と顔と相對した時、心と心と相接した時、其の時を指すと見て宜しい。

「無盡意菩薩、即ち座より起ちて、偏に右の肩を祖さ」云々。是迄色々の菩薩が現はれたが、無盡意菩薩は、第二十五番目に出られた、これを事相上から考へると——これは東方の不闍國といふ國に、普賢如來といふ佛がある。其の普賢如來の補助者として、「無盡意菩薩」といふものがあると、書物に出てゐる。其の菩薩が千里を遠しとせずして、態々佛の會座へ參つて、娑婆世界の爲めに教化を施さうとせられた、斯ういふことが事實上の解釋である。而して其の無盡意と云ふ名前は、什なことを意味するかといふに、天台大師の書かれたものを見ると、中々六かしいことが書いてある。其は所謂空諦、假諦、中道諦と斯ういふ。此の三つの眞理が決して盡くこと無しといふ其の意味から、無盡意といふ名前が現はれたのである。此の天台の三諦三觀のことは餘程六か敷理窟であるから御預りにして今は只妙法を且らく三つに分けたものと思ふて宜しい。さて無盡意菩薩といふ方は什んな菩薩かといふと

矢張り互ひの身を離れない。初めに申し置いた通り何でも貴女方でも私共でも總べて興樂拔苦を行願として居る人は皆此無盡意菩薩であると思ふて少しも差問へない、敢て今更昔しの無盡意菩薩の戸籍調べをするにも及びませまい、兎に角我等素地の凡夫でも一念の正信さへあれば、男と云はず女と云はず皆ことごとく無盡意菩薩の活現したものであります。菩薩といふことは前に申した如く、人を助けよう世を利益しようといふものは皆菩薩である、廣い意義から云へば假令教えは異つて居ても、耶蘇も大菩薩である。マホメットも孔子も皆大菩薩である。決して佛教以外のものと見るべきものでない。皆佛教中の大菩薩の現はれである。獨り孔子、耶蘇、マホメットのみならず、苟も大なる心を有つて、我を棄て、人の爲めにならうといふ心あるものは、總て女の菩薩、男の菩薩である。其境遇や身體は違つて居つても、皆な立派な菩薩である。好し什んな裏長屋に住まつて居るものでも、濟世利民の志ある者は皆立派な菩薩である。希臘のダイオデニスとか、唐土の顔回などは其等の人である。

「爾の時、無盡意菩薩、即ち座より起ちて」と斯うある、此語は始終佛經では最初に出るとであるが凡そ人に物を教へるに、言葉を以てすると身を以てすると二通りある。座より起つといふのは一見何んでもない様に見えるけれども、身を以て教へるのである。畢竟ものを言ふにも、身體の作法から現はすのであつて、即ち坐つて居る座から起つて、右の肩を袒ぬき掌を合せて佛に向つて、さて如何であ

りませうと問ひ出した。偏袒右肩は彼國の最敬禮であります、これも一寸見ると、無意味の様に思へるけれども、其所に有り難い精神が籠つて居るのであると、註釋にはさう書いてある。即ち座より起つてといふは、確くいふて見ると、菩薩は諸法皆空を以て座となすとある。今此目に一抔、耳に一抔、限りなく羅列してある諸物の姿は元來皆な空である。唯々因縁和合に因て露はれて居るのである、之をほどいて仕舞へば一切皆空である、「引きよせてむすべば柴の扉かな解れば元の野原なりけり」の歌の通りである。けれども、今此に座を起つといふのは、單に座布團から起つてと見て居いて宜いのであるが、先きにも云ふた通り觀心釋といふことから見ると、それは菩薩の座つて居る場所、即ち一切皆空の座布團から起つ、それでなければ衆生の濟度が出来ないから、それから起つてと、斯ういふ意味になる。即ち何も無いといふ所には座つて居ないで、其處から起つて、偏袒右の肩を袒ぬき——肩は左右の肩があるが、經文によつて觀心釋的にいふて見ると、左の肩は定の現はれである。佛教では左右の肩を禪定と智慧との現はれであるとして居る。即ち左の肩は禪定であつて、右の肩は智慧である。ソコで右の肩を袒ぬくといふのは、智慧の光りを發して、而して衆生を利益して人としての本分を立たせよう。斯ういふ働きの現はれである。これは印度で一般に行はるゝ禮法である。殊に坊さんの禮法である。今私の懸けて居る此の袈裟が即ちさうである、右を現はして左を蔽うて居る。何でも自分がへり下つて向ふを崇める時には、印度では今いふ意味に於て必ず斯ういふ作

法を行ふのである。偏に右の肩を袒ぬぐ——斯んなことから出たのであるかも知れぬが、人に力を添える時に、一と肌脱かうといふやうなことを我が國でいふて居る、併しそれは詳しく調べたのではないから、斷言することは出来ない。今無盡意菩薩が右の肩を袒ぬいで、而して掌を合せる。これも矢張り彼の國の禮法である、禮法は國に依つて違ふ。日本では日本の禮があつて、腰を低くして頭を下げる、西洋では親しい間柄では握手をする、最敬禮としては直立不動の姿勢をとる。さういふ風に其の國々の禮法が異つてをる。

「合掌して佛に向つて是の言を作す」合掌即ち掌を合せることは、平生私共は小供の時から教えられて無意識にやつて居つたのであるが、此にも大いなる意味がある。古い所は一々知らないけれども、佛の以前から合掌の作法があつて、何か宗教的の働きを現はす時には皆な合掌したものを見へる、殊に佛敎での合掌は深い意味のあることである、吾々は全體手が二本あつて、細かにいへば指が十本づゝある。此の指の十本は、矢張り物に例へられて居るのである。佛敎では十界——此十の世界といふとである。即ち精神界から眺めると、一心の上に十の世界がある。それは佛の世界、次に菩薩の世界、それから聲聞の世界、緣覺の世界、天人の世界、人間の世界、それから阿修羅、畜生、餓鬼地獄と、斯う十である、今は唯名前だけを擧げたのだが、上は光明に充たされたる佛の世界から、下は淺ましい餓鬼、畜生、地獄の世界までである。是は世界の地圖には無いが、我が心の上にはチャンと

現はれて居る。我々の身體は、昨日今日と變りは無ければ、心の上からいふと、凡聖同居龍蛇混雜で佛もあり菩薩もあり乃至餓鬼も畜生も地獄も、チャンと我が一念の上には現はれて居る。「佛偏師くびに掛けたる人形箱佛ださうと鬼を出さう」と古人が歌ふた通り考へて見ると面白い、これは佛の中に地獄があり、地獄の中に佛があるといふ意味である。兎に角この十界といふものは、十本の指に例へられて居るので、この十本の指を合した形が合掌である。即ち十の世界を合すれば一心となり、開けば十界となる。其處が面白い。開合自在である。開かうとつぼめようと、什うにもなる。我が一心の向けやう次第である。一つの自分を離れて十の世界がある譯ではない。又それを大きく別けて見ると、右左となる。これも色々別け方がある。例へば生れると死ぬるとで、生死の二つに別ける。それが斯う合せると、生死一如である。生れると死ぬるといふことは、皆大抵其處に間隔があるやうに思ふけれども、其の實、一心から眺めて見ると、生と死と一如である。斯ういふ有様である。又凡聖一如である。假りに右を佛、左を衆生と斯う分ける。迷ひと悟りに分けることも出来る。それも一心から眺めると凡聖一如である。迷ひも悟りも無い。又父子の二つに分ける。世間的にいふと親子である。又夫と婦、夫婦と見ることも出来る。分れては父子となり夫婦となるが、合すれば世間である。又夫と婦一體である。皆さういふ工合で、分れば二つであるけれども、合せば一つである。これが何處までも教理が貫ぬいて居る。故に斯ういふ意味に於て、假令一遍手を合せるといつても、其處

には甚深不可思議なる意味が味はれて来る。唯だ無意味にやるのではない。これは佛教の生れる前きからかも知れぬが、自然と斯うやつて来て居る。悲しい時、嬉しい時、知らず／＼手を合せるやうになつて居る。淨瑠璃の文句にも、覺悟は宜いかといふと、兩手を合せて南無阿彌陀佛と唱へる。自然の形が斯う現はれるのである。處が、無盡意菩薩、偏に右肩を袒ぬぎて、掌を合せて、佛に向つて是の言を作す。これだけが身を以て教える所である。また言葉には何も云つて居ないのである。佛といふことは、度び／＼申上げたやうに思ふが、世間一般には、佛といふ字が大變誤解されて居る。一と通り其の次第を述べて見ることにしよう。

佛といふことは、人生と大變縁遠いものとせられて居る。一體佛といふ字を解いて見ると、印度では佛陀、支那では覺者、日本では「ほとけ」ほとけはほとけで、大和風に斯ういふ工合に解して居る。ほとけ又はほとくといふのは、絲をほどく意味であつて、「ほとけ」とは誰が結びけん白絲の、賤のおだ巻繰り返し見よ」さういふ意味に解されて居る。——絲の結びをほどくといふ意味に解されて居る。固い言葉に直せば轉迷開悟である。さういふ意味の佛である。けれども其のことは疾つくの昔に忘れられて仕舞つて、今我々が死んだ人に戒名を附けると、それが佛であるとせられて居る。何やら信士とか居士とかいふ名が附いて、始めて佛といふやうな事になつて居る。それは露骨にいふと、死んだ人を佛といふのは間違つて居る。死んだ人を佛にする宗旨ならば有難くない。寺へ寄り附いても面白

い場所でない。佛は大變冷めたものである。斯ういふ風に考へて居る。故に人が死んだ時には、あの人も佛になつたといふやうなことをいふ。成程死んでも佛になるでもあらうが生前あらゆる罪惡を犯したものが死ぬと急に佛になるとは論理に合はない、ソナナことは小學校の小供でも合點しない。元來佛には寸分も不吉、不快、不幸、不淨といふやうな意味は無いのであるが、それに矢張り佛は目出度くないといふ感情を有つて居る。神といへば目出度い、佛といへば目出度くないと思つて居る大變な間違ひで、情けないことである。ソナナことは論外のことではあるけれども、一言注意して置かなければならぬ。尙ほ此のことに就いては、もう少し話して置きたいこともあるが、それは後に至つて、或必要を認められた時に改めて話させよう。

「掌を合せて佛に向つて、是の言を作す。世尊。」——今時何處やらで自ら世尊といふて居るものがあるといふことであるが、頗る滑稽である。併し釋迦牟尼佛を世尊といふのはソナナ僭越なことである。苟も三界の大導師であるから、人天が崇め尊んで世尊と稱したのである。世尊とは三世に亘り、十方を貫いて最貴最尊の人といふのである。彼の人格の怪い者共が、自ら世尊といふのは僭越を透り過ぎて却て滑稽千萬である。元と佛には十の名稱があるといふことで、御承知でもあらうが、如來、應供、正遍智、明行足、善逝、世間解、調御丈夫、天人師、佛世尊、と斯ういふ風に色々の名前がある。其の十の名前の一つが世尊である。佛には別段に俗的地位とか爵とか、功級とか勳等とかとい

ふものは無いけれども、精神的に於ての十通りの尊號が備つて居る。世尊は其の一つである。世尊よと斯う此に始めて言葉が發せられた。今までは身體の作法だけである。これが言葉を以て人を教へる意味である。あゝ世尊よ、と斯う呼び奉つたのである。觀世音菩薩は何の因縁を以て、觀世音と名づくるや」最初に觀世音とは何ぞやといふ題で、お話を致したけれども、序にもう一遍申上げて見よう。世の中の人は、觀世音菩薩を知るも知らざるも、日本に於ては甚だ因縁が多い。觀世音は各宗各派の區別無く、どの宗派でも尊んで居る。日本のみならず、蒙古でも滿洲でも、西藏又は中央支那の大部分に至るまで、大抵皆觀音を祭つて居る。東洋諸國では、觀音は何處に行つても、家庭の本尊となつて居る。さういふ風は大變衆生とは、因縁の深い御方である。故に無盡意菩薩は其の意味を質して、觀世音は仕ういふ因縁から觀世音と稱へ奉るのであるか、斯ういふことを尋ねたのである。矢張り世音を觀するといふことは、前回にも申した積りであるが、これは楞嚴經などを拜讀して見ると、音といふことを特に擧げて居る。例へば目と耳とを比較して、音の方から言ふて見ると、三つを擧げて居る。仕ういふ三つがあるかといふと、通眞實、圓眞實、常眞實と、斯う三つで、皆眞實といふ文字を使つて居る。何故通といふならば、目といふものは妙なもので、其の前に戸が一枚あればもう見えない、障子一枚あつても見えない。けれども、此の音聲になると、戸が嵌まつて居つても、障子が建つて居つても、三四町隔たつても又は一里程離れて居つても、坐つて居て、諸々の障物物を透してか

らに、心に入れることが出来るのが通眞實である。假りに目と耳とを比較して見ると、目の届く所よりも耳の届く所が大變に廣いのである。それから圓眞實とは、我々は上を見ると下が見えない。後ろは勿論目が無いから見えない。右を見れば左が見えない。何れも片つ方しか見えないけれども、音になると、前にある音、後ろにある音、上の音、下の音、右、左、總て聽へて、其の通り心に入れることが出来る。故に片寄らないから圓眞實といふのである。それから常眞實。これは昨日聽いたことも去年聽いたことも凡そ聽き込んだことは皆な覺えて居る。別して三つ見の心百まで、稚ない時聽いたことも能く覺えて居る。大人に成つて聽いたことよりも、小供の時に聽いたことが一番能く耳に残つて居る。目に見たものは、心に再現せしむることが出来ないけれども、覺えないことが多々ある。寧ろ其の方に於ては、聲の方が判然殘つて居る。故に常眞實といふと、斯ういふことが擧げられる。世音を觀するといふことは、一切諸々の音聲を觀する、——心に觀するのであつて、聲を聞くよりも聲を觀るのである。一寸悟り臭ひけれども、大燈國師であつたか、「耳で見て目で聞くんらば疑はじ、自づからなる擔の玉水」。斯ういふことになる。修行した人ならでは受取りにくい矢張り其の意味で、我々が目で物を見るが如く、聲で物を認めるのである。さういふ意味が觀世音の字義にある。處が、觀世音菩薩は何の因縁を以て觀世音と名づけたかと佛に尋ねると、「佛、無盡意菩薩に告げ玉はく、善男子」——

善男子とは、世尊の申された言葉である。——佛からは善男子といふ。無盡意菩薩よ、といふ所であるけれども、實は此菩薩が大勢を代表してあらるゝのであるから、善男子といふのである。六かしくいふと總て疑問には三通りある。一つは不解問といつて、了解が出来ないから、幾度も問ふことがある。次は試験問といつて、チャント向ふを試験しようとして、問ふこともある。それから第三には利益有情問といつて、自分は分つて居るに拘はらず、問ひを發する。即ち大勢の人に成り代つて問ふのである。此處の無盡意菩薩の問ひは、利益有情問の問ひ方である。故に佛は告げ玉はく、「善男子、若し無量百千萬億の衆生、諸々の苦惱を受くるならば」と斯うある。百千萬億の衆生——衆生といふことは、大抵の人は人類計りをいふやうに思ふけれども、決して人類ばかりではない、世界有らゆる所の物、少くとも生命のあるものは、皆な衆生の中に籠つて居る。凡そ衆生とは——衆縁和合に因て生ずると云ふて諸々の因縁の調和によつて、此に現はれて居るものを衆生といふのである。其の他解釋は種々あるが、要するに、生きたし生ける所のものは皆衆生である。處で、世の中は人類計りでないから、斯ういふても宜い。無量百千萬億の數限りも無い衆生。——此の衆生が色々の苦惱を受けて居る。此の娑婆世界は勘忍の世界といふて、即ち堪らへ忍ぶ、何處までも忍ばなければならぬ。それが挫げたならば、世界は苦しいものである。煩苦計られざる世界である。其の苦しいことを我々は堪えなければならぬ。忍耐して挫げずに行けよ、と斯ういふのである。處て其苦しいことを、觀音經には七

難三毒二怖と、現はれて居る、其の七通りの難苦とは、水難、火難、風難、賊難、劍難、囚難、惡鬼難をいふので、さういふことを初めとして、又四苦八苦といふやうなものがある。即ち我々には生老病死があり、憎く、欲しく、惜いと色々附き纏つた八苦がある。苦しい側を數えて見れば、總て實に苦しいこと許りである。肉體上の苦しみは澤山あるのみならず、同時に精神界の苦しみを有つて居る。天道は公平無私であつて、貴さも賤しきも、肉體上の勞苦が無ければ精神上の苦痛を有つて居る。寧ろ肉體上に樂をして居る人は、精神上の苦痛が仲々多い。肉體上の苦痛は我々が汽車旅行して通つて見ても能く分るが例へば炎天乾しになつて、泥田の中に蛭に噛まれ、汗を拭く間も無く働いて居る人もある併し心は安樂ぢや。同時に精神上に於て、種々無量の苦痛を持って居る富貴の人もある、比較的的身體に樂をして居る人は、精神上隨分心配に堪えないことが澤山ある。所謂天道は人を殺さずで、富める者は心で苦しむ貧しき者は内に樂みがある、苦樂壽夭は貧富貴賤に都合能く埋め合されて居るのが面白いではないか。處が菩薩は、有らゆる生きたし生けるものが、諸々の苦しみ惱みを受けて轉展反側して居るのを憐み給ふのである。「若し是の觀世音菩薩を聞いて、一心に觀世音菩薩を稱名すれば」——心の苦しみでも身體の苦しみでも、苦しみを感じたならば、直に南無觀世音菩薩と一心に稱名するぢや、其一心になつて稱名する處に有難いことがある、實は世界中何處もかも觀世音の慈悲の海でない所はないから、其處へ我心を向けたならば、觀世音菩薩は何時でも其の苦しい運命を轉

じて樂な運命にして下さることが出来る。此處等が有難い所である。一心といふ文字は、平生能く使つて居るが、一體我々の心は二岐に分れ易い。善惡とか愛憎とか、始終二岐に分れたがるから、其の時に色々のものが衝突して煩悶苦痛を重ねるのである。そこで、一心一向で例へば數ある矢をひと束にする如くにして、所謂「稱ふれば我も佛もなかりけり」で南無觀世音菩薩、南無觀世音菩薩と一心不亂に御名を稱する時に於ては、觀音は即時に其音聲を觀じて、解脱せしめらるるのである。其靈驗の實例は古來數多ひことであるが今は一つ二宮尊徳翁のことを御話しやう。

二宮尊徳は、今更の如く崇拜するものが多いが、其人は道徳と實業——寧ろ農業と道徳とを結び付けて之を實行せられた點に於て、確に崇拜すべき人であると思ふ。この人は、勿論初めは貧しかつた十四歳の時に親戚に婚禮があつて、「其處に働いたお禮として、二百文ばかりの錢を貰つた。それを懐ろにして、我が家に歸らうと、途中觀音堂の在る寺へ立ち寄つて、堂の下に行儀良く跪いて、拜禮をして居た。其處へ坊さんが出て来て、お經を清らかな聲で讀み出した。尊徳はそれを聞きながら拜んで居たが、お經が終ると坊さんに尋ねた。今聴いたお經は曾つて聴いたやうなお經であるけれども今日は別して心に浸み渡つて有難く感じました。何といふお經であるかと尋ねた。坊さんのいふに、それはお前の平生聴いて居るのは、棒讀みであるが、自分は今訓點を附けて讀んだ。それで能くお前の耳にも這入り、腹へも納まつたのであらう。そこで尊徳は、什うかもう一遍お讀み下さい。此に十

六文のお錢がある。——先に貰つた二百文は、其の時色々の買物をした爲め、今十六文だけ残つて居る——それを謝恩として献ずるから、什うかもう一度聴かして下さいと頼んだ。坊さんは繰返して觀音經を讀んだ。尊徳は浸み／＼有難く感謝して、家へ歸つたといふ話がある。斯ういふやうな有様で、二宮尊徳が其以後觀音經を讀誦して居たか什うかは知らないけれども、其の實、親しく觀世音菩薩の拔苦與樂の精神を自分に體得して、其の生涯の歴史は、身を以て觀音經を活讀し、殆んど觀世音菩薩の化身の如くに、私を去つて公けに就き、國の爲め世の爲めに猛進したのは、眞の生きた觀音の精神を、直に我が精神として、而して働いた人といふて宜しい。故に觀音の誓願は未來往生を示さるゝのではなく、寧ろ現世に於て肉身の我が生きて居る間に於て、身體の苦しみと同時に、精神の苦痛も觀音の智慧と慈悲との力に依つて、悉く解き除いてやらうと、斯ういふ心の其の現はれが觀音林である。即時其の音聲を觀じて皆解脱することを得む。人々皆此菩薩の御心を吾が心として自利々他の妙行を勵まされんことを希望します。

### 第三回

○若有持是觀世音菩薩名者。設入大火。火不能燒。由是菩薩威神力故。若爲大水。所漂。稱其名號。即得淺處。若有百千萬億衆生。爲求金銀。

瑠璃磚礫碼礫珊瑚琥珀眞珠等寶入於大海假使黑風吹其船舫飄墮羅刹鬼國其中若有乃至一人稱觀世音菩薩名者是諸人等皆得解脫羅刹之難以是因緣名觀世音。

**和訓** 若し是の觀世音菩薩の名を持つる者あらば、設ひ大火に入るとも、火も燒くこと能はず。是れ菩薩の威神力に由るが故に、若し大水の漂はす所となるも、其の名號を稱すれば、即ち淺處を得む。若し百千萬億の衆生あつて、金銀瑠璃磚礫碼礫珊瑚琥珀眞珠等の寶を求めむ爲めに大海に入らむに、假使黑風其の船舫を吹いて羅刹鬼國に飄墮せむも、其の中に若し乃至一人の觀世音の名を稱する者あらば、是の諸人等皆羅刹の難を解脫することを得む。是の因緣を以ての故に觀世音と名づく。

**講話** 扱て今日は、此に一應素讀致しただけの處をお話致す積りであるが、これからが即ち七難といふことで、七難とは火難、水難、風難、劍難、惡鬼の難——即ち羅刹難、それから囚難、賊難であつて總稱して七難といふ、其れに就き一々觀音菩薩の御説法があります。

一 通り文言はち分りになつたであらうが、「若し是の觀世音菩薩の名を持つる者あらば、設ひ大火に入るとも、火も燒くこと能はず。」此れが七難の内の火難であります。即ち火に就いて觀世音菩薩の御説法である。最初に申上げて置かうと思ふが、觀世音菩薩といふものは、矢張り事の上と理の上とに

就いて考へて見なければならぬ。事といふのは事實の上の解釋で、理の上といふのは我々が精神上に就いて有つて居る所の觀世音菩薩を指すのである。何時でも佛教の解釋には、此の事釋といふ事實の上の解釋と、理釋といふて道理の上の解釋と二通りある。言ひ換えれば、一は物質的の解釋、一は精神的の解釋、此の兩方面が何時でも附いて廻つて居ります。これはお経ばかりでなく、佛教のことは總てに就いて此の二つが備はつて居ります。そこで觀世音菩薩と云へば大抵大慈大悲の觀世音として、誰も皆知つて居る。併し一切の觀世音菩薩の本體といふものになると、獨り大慈悲ばかりではない。大慈悲を備えて居ると同時に、一面には又大智慧を備えて居る。而して又他の一面には大勇猛心といふものを備えて居られる。即ち一つの觀音様で三方面があるといふても差支ないのである。一面は大慈悲心、一面は大智慧心、一面は大勇猛心、斯ういふ三方面の働きがある。これは世間で普通にいふ所の智仁勇と同じものである。昔から忠臣楠正成公の歌として知られたる彼の「仁と義と優にやさしき大將は火にも燒かれず水に溺れず、」——斯ういふやうに觀世音菩薩は智仁勇の本尊である。此の意味でいふ時には、觀音は決して外にあるものではない。觀心釋でいふと、自分自身、それが觀音の現はれである。お話をする私とても、及ばずながら觀世音菩薩の一分體であると思ふて居る。貴女方も自分自身が觀音様の分身である。「我々は元より觀音の權化である」と、斯ういふ觀念が常に附いて廻つて居なければならぬ。これが先づ最初に申上げて置くことである。



それで、「若し是の觀世音菩薩の名を持つる者あらば」南無大慈大悲の觀世音菩薩と、斯う念じた其の時に、念ずると同時に觀世音菩薩が其處に現はれて御座る。これは今もいふた通り、智仁勇の三面を備えて御座る觀世音菩薩、其觀世音菩薩が御出ましになると、大火に入るとも——假令如何やうな大火事に出合ふとも、火も焼くこと能はず、と斯うある。それは何故であるかといへば、此の菩薩の威神の力に由るが故にと本文にある。これも矢張り觀音靈驗記といふやうなものが色々あるが、さういふ書物にあるものから見ると、事實上の觀音様の靈驗といふものが極めてあつたか、火も決して焼くことが出来ず、水に這入つても決して溺れないといふことが数々書いてある、けれども今は其因縁漸などどくしく申上げない積りである。因縁のみのお話をすると、早耳の人はそれは佛教の無稽である、妄信である。爺さん婆さんの氣休めに、さういふ靈驗的の因縁話を作つたものであると、輕卒に色々の評をなす。私ども書生時代には、何も知らずに、唯だ皮相から見、矢張りそれは迷信であるとか妄信であるとか、輕々しくいふたものである。中々そんなものではない、靈驗のあらたかなることは、争はれるものではない。併し今はさういふ詳しいお話を致す暇がないから、事實上のお話は後廻しにして置いて、重に理釋即ち精神上の解釋に就いてお話しの方が、宜からうと思ふ。

さうして見ると、此に「大火に入るとも火も焼くこと能はず」と斯うある。其の大火は何か、今眼の前にポッポと燃えて居る大火は何かと尋ねて見ると、之を精神上から云へば、今燃え立つて居る其

の火は、外でもない、自分の精神上に燃え立つて居るのである。我々は精神上に就て篤と觀察して見ると、朝から晩まで火事場の中に居る有様ではなからうか。それが爲めに法華經には、三界は猶火宅の如しと仰せられて居る。これは色々譬を設けて、親切丁寧に説法をせられて居るが、三界即ち慾界、色界、無色界、此の三つの世界は火宅の如しといふて、火が燃え立つて居る家屋の様なものぢや。其の火事場の中に我々はウツカリしてをると警告なされたのである。什ういふ火が燃えて居るかといふと三毒であるとか、五慾であるとか、さういふ火が燃え立つて居るのである。三毒といふのは、貪慾、瞋恚、愚痴、此の三つであると、斯う佛教ではいふ。何故ならば、此の三つは我々の心の命を取る所の毒藥のやうなものであるからである。それから五慾は何であるかといふと、財、色、食、名、睡眠、——斯ういふ色々慾で、五つの數になつて居る。併しこれは五つに限つて居る譯ではない。推擴して見ると、八萬四千の大數に達するといふことである。熱といふものは、物を焼くのが性質である。それ故にお經の言葉によると、例へば「瞋恚の火は能く功德の林を焼く」、さういふやうな言葉は一二にして止まらない。今一寸記憶に浮んで來るだけのことをいふのであるから、文句には多少相違があるかも知れぬ。今いふた句の意味は、嗔りの火は有らゆる功德の林を焼いて仕舞ふといふので、什んな善いことをして置いても、一度び怒りを發する時は、其の善根功德を悉く焼いて仕舞ふといふのである。或は「憂愁の火來つて我を焼く」とある。憂愁とは愁のことで、世にウサ、ツラサと云ふ火で

ある。其の火が我が身を焼くとある。斯かる有様であるのに、殆んど我々といふものは、此の物質上の火を恐れることは知つて居るけれども、精神上の火は、朝から晩まで其の中に居つても氣附かないで居る。恰も頭に火が附いても知らないと同様である。茲に三毒といふもの、名稱に當て嵌めて見ると、火は嗔りに當て、宜い。我々が迷の内で、最も恐るべきものは何かといふと、瞋恚即ち腹を立てるといふことである。人間といふものは、誠に優しい顔をして居るけれども、一寸したことで直に怒る其怒りの炎が燃え立つて来て或時は其れが形を換えて嫉妬の心になる。人を嫉むとか、人を恨むとか、遂には離間、中傷、讒誣といふやうに、色々になつて現はれて出るのであるが、其の初めは唯だ一つの嗔りである、「長閑なる心の海も時ありてつぶてを打てば白浪の立つ」我々が心に逆つた境遇に身を投ずる時には得て、怒りを發するものである。斯ういふことはお互ひに経験して居ること、思ふ。誰にでもあること、思ふが、自分の思つて居ることに、あべこべのことを持つて来ると、猛火炎々として、嗔りの心が頭を擡げて来る。人と人とが何か話をして、ヒョツと感情の衝突を起すと、心の中の猛火が炎々と燃え立つて来ることがある。さういふ時には平生觀音様を信じてゐる人、少くとも平生多少精神的の修養がある人ならば嗔の心がひとつと頭を上げて来たのを、まア待てと頭を押ゆることが出来る。昔の賢き人は、さういふ時に臨んで心に十分の餘裕を持つてゐる。其の時には黙つて何も言はない。相手がどのやうな口を利かうとも、それに逆らつたり、刃向つたりしては、取り返しので

つかないことがある。一朝の怒りによつて、其の身を滅すといふことは、澤山例證のあることである。修養の精神を有つて居る人は、自分の胸に燃ゆる所の猛火を打ち消して、能く考へてものをいふのである、其れには一寸自分の氣息を數へても宜い、息が出るか這入るか、僅かな其時のハツミに氣を付けて、それから後に口を利くと、言ひ損ひもなく仕損ひもない。これは實際に就いてのお話である。然るに我は相手の無禮につりこまれ、其の怒りを人に移して力ひだ時には、一時相手を制伏したやうであつても、後で退いて考へると、洵にお耻かしいことが多ひ、斯く云ふ私ども、時々さういふとがあり勝ちで、慚愧することが多いのであります。故に平生心を練つて居る人は、何かさういふ心持になつた時は、觀音様のお顔を一寸拜ひ、仕うして拜むかといふと外でもない、我々は觀音様の現はれである筈である。言ひ換へれば、我々は大慈悲の現はれである、我々は大智慧を固より有つて居る筈である、我々は大勇猛心を有つて居る筈である。と斯ういふ工合に拜むのである。即ち自省自憤て人に瞋らず、我を責むるのであります。昔の人は中々善いことを云つて居る。「負けて居る人を弱しと思ふなよ、忍ぶ心の強きなりけり」それに違ひない。表面から見ると、心を殺して相手にならないのは弱いやうであるけれども、怒りの心をジツと押える力といふものは、驚くべき強さである。「世の人が邪けんを抜いて斬るならば、我が堪忍の鞘に收めよ」これも面白い言葉である。さういふ有様で總て人に對さなければならぬ。斯ういふことは、道理や理窟を超えた實際の上の話である。其處は信仰、

修養がなくては、容易に實行し得られない所である。けれども平生我が心を養ふて其處に置いたならば、何れの日にか到り得ることが出来る。

斯ういふやうな有様で、一度び我々の心が其處にある場合には一心不亂に南無觀世音の御名を唱えるのである。南無觀世音菩薩と一抄の冷水を灑ぐ時には一方の炎々として燃え立つて居る迷の火が、ぱつたりと消えて仕舞ふ其れと同時に迷の火が一轉して、光明赫灼たる智慧の光と變つて来る。此の如くにして「觀音の名を持つる者あらば、設ひ大火に入るとも火も焼くこと能はず」と斯ういふこととなるのである。又彼の不動菩薩のお姿を見ると、背に炎が燃え立つて居る。其の炎々として燃え立つて居るあの姿は、智慧の火であつて迷ひの火ではない。此の迷ひの火がぱつたりと消えて仕舞つた時には、チャンと悟りの光りが現はれて来る茲が有難い所である。斯うなつて見ると、唯だ吾等は消極的の引込思案になつて、何事も怖えさへすれば宜いかといふに、然うではない。此活動世界は只々控を目に〜といふ考ばかりではいけぬ。進んで以て此の智火の炎々たる力——此の智慧の光といふものを以て、一切萬事、暗の世の中を照らし抜くといふ働きが出て来なければならぬ。其態度は趙州露刃劍。寒霜光炎々。更擬問如何。一分身作兩段。——とゆう風に行くのであります。

これは女性としては少し變りものであるが其氣概は見上げたものである、併し今時の新しい女などは全然趣きが違ふ、曹洞宗の了庵禪師の妹で、慧春尼といふ方は、大變姿色の美はしい方であつた。それが後に尼になつたが、餘りに直情徑行的人で、女性の手本とはならないけれども、——此の人は、仕舞に火定三昧に這入つた。火定三昧とは、火の中で端坐大往生を遂げることであるが、それは相州小田原の最乗寺でやつたことで、山門の前に薪を山の如くに積んで、慧春尼自らそれに火を附けて自分自身で火定に這入つて仕舞つたのである。其の時分に兄の了庵禪師が其處へ行つて、おぬし、暑いか寒いかと問はれたらば、慧春尼は大喝して、卻て知る和尚工夫尚ほ生なること有り生道心の知る所ではないといつて、遂に火定三昧に這入つたのである。この事は漢文の傳記があつて、詳しく書いてある。こゝにいふ風な火となると、それは智慧の火、或は悟の火ともいふべきものであるが、私し其の心は取るべくして其形は真似るべからざるものである。猶火に付いて、も一つ有名な話がある、其れは甲斐の信玄公が深く歸依して居つた快川國師、これは皆様も御承知の通り、信長公は到頭武田家を滅ぼした人で、信玄が亡くなつて仕舞つて、其の子の勝頼の時分に、之を攻め滅ぼしたのである。其の時に信長公は、快川國師の盛名を慕つて、是非來て貰ひたいと度びく招待に及んだ。けれども、快川國師は何か外に事情もあつたであらうが承知しなかつた、そこで信長が怒つて、國師の住持して、居られた慧林寺を焼いた。山主たる快川國師は素より、國師に隨從して居る修行者も諸共に、之を山門の上に追ひ上げて、其下に澤山薪を積んで、それに油を注ぎ掛けて焼きたたてたのである。元來信長といふ人は、短慮性急の人である。其の前にも叡山の本堂を焼打ちして、多數の人を

焼殺した人である。其の時に快川國師が山門の上に登つて自分の弟子達と問答をされた。「諸人即ち今火船裡に向つて、如何んが大法輪を轉じ去らむ。各々一轉語を着けて看よ。」と斯ういふ問を掛けられた。それは今此の火定三昧に這入るに方つて、什ういう活說法をやるか、人々修得底の所を、言語を以て一つ言ひ現はして見よといふのである、斯ういふやうに色々問答があつて、皆んなに其の所見を言はせて置いて、一番仕舞ひに國師が言はれた。「安禪は必ずしも山水を須みず、心頭を滅却すれば火も自づから涼し。」これは七言絶句の下の二句であるが、此の句は新たに快川國師が作つた譯ではない。昔し唐朝の時分に、杜荀鶴といふ詩人があつて、或夏悟空禪師の庵室を訪ふて作つた詩である。此の頃は秋涼が催して、風の肌觸りが宜いけれども、それでも我々は残暑が烈しいとか苦しいとか、皆溢して居る。然るに土用の真中にあつて、悟空禪師は何時でも暑いと云はれたことが無く、日光の差し込む所に坐つて平氣で居られる。それに杜荀鶴が感心して作つた詩である。此の上の句をいふて見ると、「三伏炎中一衲を被す、兼ねて松竹の房廊を掩ふ無し」、斯ういふのである。一衲といふのは坊さんの着物である。土用真中の暑い盛りに、人々は赤裸々になつても苦しがつて居る。それにチャント衣を着けて端坐して居られるのは、威服の至りである。そののみか、其處らを見ると、涼しさうな松とか竹とかいふ植木も何も無い。房廊は部屋の下のとて、それが何も緑蔭に蔽はれて居ない。斯ういふ暑い所に、悟空禪師は暑さを知らぬ顔に坐つて居る。成程心を鍊つた人は違ふ。實に威服したとい

ふのである。轉結が今の句である。「安禪は必ずしも山水を須みず、心頭を滅却すれば火も自づから涼し」。心を鍊つて居れば、暑いからといつて、イヤ函根へ避暑するとか伊香保へ行つて見るとか、又は涼しい海岸に行つて見るとかいふには及ばない。何も山水を必要とはしない。心頭を滅却すれば——心さへ滅ぼして仕舞へば、熱い火も何も感じないで却つて涼しさうに覺える。我々は今日あたりも、暑いくと互ひに云ふて居るが、つまり我れ自身が肝腎であるので、我れ自身が暑いとも冷たいとも思はないで、我が心に清凉界を發見したならば、火と雖も自づから涼しい。さういふ因縁のある詩であります。それを快川國師が換骨脱胎して、之を唱へながら直ちに火の燃え立つて居る中に飛び込んで仕舞はれた。壯絶快絶の逸話であると思ふ。

つまり初めは迷ひの火であつても、其れを吾物にすれば其儘悟りの火となつて、有らゆる妄想、煩惱、不潔、不淨、何もかも智慧の火で焼き亡ぼして仕舞ふ。餘程痛快なものである。故に此の觀世音菩薩の名を持すれば、設ひ大火に入るとも、火も焼くこと能はずといふのである。斯ういふ宗旨の信仰が熱烈なる所からして、事實の上に現はれた靈驗等を見ると、全く奇蹟じみたことが澤山ある。これは信仰上からいふと、決して迷信的奇蹟ではないと私は斷言する。さういふ風に種々の靈驗はあるが今は略して置く。此の結びの言葉に「是の菩薩の威神力に由るが故に」とある。觀世音菩薩は優しい方であるけれども、一面には威神の力を有つて御座る。立派な或る力を備えて居られる。それを念じ

たならば、それで宜いといふのである。

次に「若し大水の爲めに漂はざるしも、其の名號を稱すれば、即ち淺處を得む」。斯ういふて居る。大水といふのは、これにも事釋と理釋と伴つて居るが、事實上のお話をすればこれに就いての靈驗談が澤山ある。海の上を旅行して水難を免れたとか、大洪水の時に觀音を念じて助かつたといふやうな話は、多數あるが、今日は略して置く。理釋即ち精神的に眺めて見ると、大水といふのは外のことではない。つまり迷の心の恐ろしいことは、火の如く又水の如きものである。廣い野原を焼くやうな火も、初めは煙草の吸ひ殻から起り、大洪水——家を流し樹木を僵し、有らゆる寶を流して仕舞うやうな水でも、本は蟻が通つた小さな穴から洩れ出るのである。我々はなか／＼八萬四千の妄想を絶つといふことが出来ないけれども、其の初めを質せば、唯だ一點の心の迷ひである。それは貪慾、貪慾がもう一轉して愛慾、貪慾といふ方に持つて行つても宜い。此の貪慾、愛慾は、多くは迷ひの水といつて、水に譬へられて居る。愛河——愛着の河にも譬へられて居り、愛着の海とも譬へられて居る。誰やらが「夢と思へば何でもなひが其處が凡夫でナ、あなた」と云ふた通り其の迷ひの水の爲めに、寶を失ひ身を滅ぼすものは、今日にも、又古い因縁話にも澤山あるが、最も手近い處では日々の新聞紙上にも澤山現はれて居る。色々の身分階級の人々が此の水に溺れて、浮き名を流す許りか、身を誤り家を滅ぼすものが尠くない。それも詰らない無教育の人許りならばまだしもであるが、貴族、大學者、名

僧であつても、矢張それを免れない。是れ皆愛着の水に溺れるからである。昔しから英雄豪傑と稱へられて、驚天動地の目醒ましい、驚くべき仕事をして居ながら、他の半面を見ると、此水の爲めに溺れて居た人が澤山ある。これは和漢許りではなく、古今東西、歴史に多數實例があるが、今一々は申上げない。其の原因は、つまり愛着の水と、斯う云はれて居る。僅なる心の迷ひが、それが水の如く恐るべき猛烈の力を有つて居つて、我が身を漂はして仕舞ふのである。我が身許りか、世界中をも漂せしめて仕舞ふのである。然るに斯ういふ場合であつても、一度び名號を稱すれば——南無觀世音菩薩と唱へて我が本心に立返ると、——心無してそれを聞けば、唯だ念佛を唱へるやうにも思ふであらうが、さうではない。我々は觀音の智慧の現はれである、觀音の大勇猛心の現はれである。さういふ自覺を以て我が本心に立ち返るのである。南無觀世音の力といふものには、何物も敵する事が出来ない。其の力を以て愛着の水を退けるのである。それで今大水の爲めに漂はされても、名號を稱すれば、即ち淺き所を得むと、斯ういふのである。迷ひの中に居つてもさうであるが、一度び悟つたとなると——明かに自分自身を悟つた以上は、愛着の水が慈悲の水となり、有らゆる有難き法水の流に變つて、世間の迷ひを一々救ふことになる。雲の如く雨の如く、慈悲の水として、一切を霑す働きとなり、見る所聞く所、觀音の慈悲の水でない所は無といふことになる。——「若し大水に漂はざるも、其の名號を稱すれば即ち淺處を得む」——其境涯を得るには我は觀世音菩薩の現はれであるといふ

其自覺唯それだけで宜い。そこに心が据るならば、勇氣は自然と現はれて来る。決して卑怯未練な心は起らぬ、我は觀音の現はれとして、さういふツマラヌことは出来ないといふ自信力がついて来る。自ら尊び自ら重んずる所の心が生じて来る。是れが即ち信仰の力で取りも直さず觀音菩薩の力でありませす。

「若し百千萬億の衆生ありて、金銀瑠璃砗磲珊瑚琥珀真珠等の寶を求めん爲めに、大海に入るあらば」と斯うある。今でもさうであるが、寶を得んが爲めに色々の冒險をやる、さういふことは歴史譚に色々載つて居るが、例へば、ダイヤモンドを亞弗利加に探見するとか、金鑛を濠洲に發見するとか、さういふ風に西洋人が冒險をやつて居る。印度あたりでも、盛りの時代には、冒險的の仕事が澤山行はれたやうに、色々の書物に書いてある。つまり人間の最も欲する所のものは寶である。而して寶を代表したものが、金銀、瑠璃、砗磲、珊瑚、琥珀、真珠等としてある。斯ういふものは、一々解釋するに及ばない。之を七寶といふて居る。此の内には色々のものが籠つて居る。ダイヤモンドもあれば、碧玉も紅玉も其の外色々のものが籠つて居る。それは事實上のお話である。あちらでは、斯ういふものを發掘しやうとか、見附け出そうとかいふ時には、隊を組んで行く場合が澤山ある、獨りではなく、多勢で出掛けて行くのである。こゝに百千萬億の衆生云々とあるのは、遺憾なく多數を現はしたものである。有らぬ人々が斯ういふやうに、遠い所に寶を求めようとして、即ち金銀瑠璃砗磲

砗磲珊瑚琥珀真珠等の寶を得ようとして、大海に這入り込むことがある時に、と斯ういふのである。これは事實上の説法であるが、更に前いふたやうに、解釋の方面——精神上で解釋すると、この金銀以下真珠までの七つの寶は七聖財といふものに譬えられて居る。七聖財といふのは七つの精神上的の寶といふことで、此の精神上的の寶を有つて居れば、其の外に何が無くとも、心は貧弱でない、貧しくないと云はれて居るのである。この七聖財を一通り説明して見ると、一體七聖財にはそれ／＼順序があるけれども、必ずしもそれに拘泥するには及ばない。其の一は信財といふので、それが一つの寶である。もう一つは進財、同じ音であるが字が違ふ。初めの信財といふのは、信は法藏第一の寶なりと經文にもあるが、其の信は信仰心のことで、清らかな信仰心があれば、正法を受けて成佛の本になるのであるから、これは法の倉の第一の寶である。一切功德みな此中より生ずといふ言葉もあるが、斯ういふことは詳しく話しないと、十分に分らぬかも知れないが、細かなことは他日に譲つて置く。次の進財といふのは、進といふ字は前へ進むの意味で、精進の進である。世間では、菜や大根許り喰つて肉類を喰はないことを精進といふけれども、それは眞實の意味ではない、何處までも勇猛心を揮つて、出来ないことを成し遂げる、それが精進である。さういふ所から轉々して來た言葉であつて、實際の意味は勇猛精進——此の事は仕うしても本氣になれば出来ないといふことは無い。さういふ心を以て努力することが即ち精進である。一切のこと、奮闘努力以て之に當るのが即ち精進であ

此の心を以て法の寶を求むれば、何でも得られないことは無いのである。實に我々は寶の山に這入り込んで居ながら、精進努力を缺いて居る爲めに、手を空しくして歸るのである。故に精進が一つの寶であるから、進財といつてあるのである。三番目の寶は聞財といふので、聞くことを以て寶とす。とある。聞くといふことは智慧を廣める本であるが、少し傲慢の氣があつたり、我見の強い人は、下聞を耻づる風があるもので、佛敎は聽きたいが、何だか頭を下げてそれを聽くのが耻かしいといふやうな小さい我慢があつては、中々法の貴いことを知ることが出来ない。佛は、「聞けよ、思へよ、實修せよ」と仰せられて居る。聞惠、思惠、修惠といふ三つのものがあつて、聞いたならば考へよ、考へたならば之を行へよと仰せられて居る。總て一番最初にものを聞いて見るといふことは、大層人の爲めになるものであるから、それを聞財といふ。それから次は慚財であります。我々は常に慚づるといふ心がある。孟子の所謂羞惡の心で、其の慚づるといふのが、即ち精神上の財産の一つである。これが無敎育のもの又は無信仰のものになると、有らゆる罪科を犯しても、心に慚づるといふことがないが、苟くも人間にさういふことを犯しては、相濟まぬといふ心があれば、それが善い方へ赴く一の途で、所謂羞惡の心は義の端めとなるのである、これを慚財といふ。それから戒財である。これも詳しいお話しになると、一朝一夕には盡きないのであるが、兎も角も非なることを防ぎ、惡しきことを止めるといふのが、佛の戒法の趣意である。さういふ趣意から起つて、色々の戒法といふものが立てられたが、

佛は此の戒法さへ世に残りて行はれておれば吾が身の壽は盡きても我法の生命は千年萬年經つても決して亡びないぞよと遺敎經の中に親しく説きのこされてあります、戒と云ふと何か窮屈な氣がして、ソナナことは世捨て人のすること、吾等世俗には何の役にも立たぬと思ふ人もあるかなれどそふでなひ、梵網經に據ると、孝を名けて戒法となすと、斯ういふ風に世間的に云ふてある。而して孝順は至道の法なりと佛は仰せられた。其の戒を一つの寶とするのである。其の次は捨財。捨といふことは、世間には唯だ捨るといふけれども、佛法の意味では慈悲喜捨の捨で同じく物を人に施しても、俺が施したといふ心は少しも有つて居ない。丁度不用の物か詰らないものを谷川へでも捨てたやうな心持を以て、人に物を施せよ、と斯ういふて居る。俺は斯ういふことをしたとか、俺は斯ういふものを人に施したとかいつて、人に誇つて居るものも世間には少くないが、それでは菩薩や佛のお心持を丸出しにしたものではない。什んな良いことをしても、どんなに人を助けても、一寸とも恩に被せないて洒々落々たる心持で居る。斯ういふ意味が捨である。其の捨を以て財産とするのである。それからもう一つ、定慧財といふのがある。定といふのは、心を動かさないこと、思つて宜い。慧は智慧のこと、禪定から起つた智慧でなければ、本當の智慧ではない。本當の智慧は禪定中から發するのである。本當の禪定は必ず智慧と相伴はなければならぬ。禪と定とは影と形の如く常に相伴はなければならぬ。殊に禪宗は禪定を専門として居るから、一層是に重きを置かなければならぬ。此の定慧を以て財産と

するのである。これで七つて、これが菩薩方の七聖財といふのである。

我々は精神上に於て、斯ういふ無盡藏なる財産を元より有つて居る筈である。然るに我々は、其の財産の所有者であることを我自身に忘れて居る。身は假令如何に富んで居るといふても、此の心の中の財産を缺いた人は、之を精神的に見て貧乏人と謂ふても宜い。世の中には、物質上に富んだ人に、此の精神的の寶を有つて居ないものが多い。どつちかといふと、貧乏人の方が却つて精神的に富んで居る傾きがある。斯ういふことは大に考へなければならぬことである。これは今いふ精神上の寶であるが、更に物質上から見ていふと、觀音を信じた爲めに、金の茶釜を堀り出したとか何とか、色々思ひ掛けない寶を得た靈驗談が澤山あるが、さういふことを云ふと、何に馬鹿なことを、觀音を信じたからとて。寶が得られるものか。それは迷信である妄信であると世人は一概にいふけれども、精神的に斯ういふ財産があつたならば、事實上に於てもそれが事實となつて現れようと思ふ。それを今日唯だ迷信だとか奇蹟だとかいつて、何の考もなくして輕卒に之をけなすのは大に考ふべきことである。そこで「金銀瑠璃等の七寶を求めんが爲めに大海に入る」とある其の大海といふのは是れを迷ひに譬へても宜い。悟りに譬へても宜い。苦しみの海と見ることも出来れば、又樂しみの海とも見ることが出来る。眞如の海とも見られるれば、佛性の海とも見ることが出来る。兎に角先刻申したやうな精神上の寶——七聖財を求めんが爲めに、此の行衛知れない大海原に向つて、冒險的に這入り込む時といふのである。

である。

「假使黒風其の船舫を吹いて、羅刹鬼國に飄墮するも、其の中に若し乃至一人の觀世音菩薩の名を稱する者あらば、是の諸人等皆羅刹の難を解脱することを得む。是の因縁を以て觀世音と名づく」。斯うずつと見て、假令黒風が——海の大風といふことで、支那の文字には黒風とか白雨とかいふことを能く使ふ。こゝに黒風とあるのは頗る面白い。即ち烈風猛雨、一寸前さも分らないといふので黒風といふのである。それを精神上で云へば、貪慾とか、瞋恚とか、愚痴とか、有らゆる猛烈なる風、それが吹いて來て、船舫——我々の乗つて居る船のことで、精神上でいへば六波羅密の船としてある。即ち布施や持戒や忍辱や精進や禪定や智慧や色々あるが、孰れも結構な乗り物である。——それが迷ひの烈風の爲めに吹き飛ばされて、羅刹鬼國に漂はされる。羅刹鬼國といふのは、人を喰ふ鬼の住まつて居る國で、此の春(大正三年)の大正博覽會には、南洋の人喰ひ人種が來て居つたといふことであるが、亞非利加とか南洋諸島の内には、今でもさういふ人種が居る。未開國には今でも居るが、開けた國には居ない。併し精神上から見ると、開けた國にも人喰ひ鬼が澤山居る。新聞などにも女喰ひとか男喰ひとか、そんな恐ろしい名の附いた者が少なからず載つて居る。羅刹鬼といふものは、實地あるか無いかは別として、精神上には到る處に澤山居る。さういふ邪見——殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、慳貪、瞋恚、愚痴といふやうな、恐ろしい境涯は皆羅刹鬼國である。我々の乗つて



居る船が、若し誤つてさういふ淺間しい境涯に漂ひ墮ちても——其の位に迷ひに迷つても、不圖氣が附いて、一度悔悟の念が萌せば、一切の迷ひの雲が晴れて後明かなるが如く、大勢の内で假令一人ても大なる利他の心を以て觀音の御名を稱すれば……皆其の徳に化されて仕舞ふのである。其の中若し乃至一人の觀世音菩薩の名を稱する者あらば、其の中の多くの人の中で、假令一人なりとも觀音の御名を稱するものがあれば、即座に大勢の者までが神機一轉苦を變じて樂となし羅刹鬼のすむ恐ろしき國も直に光明赫々たる淨土となることは決して疑ふべきことでなひ、實にそこが宗教信仰のありがたひ所てあります。

第四回

若復有人。臨當被害稱觀世音菩薩。名者彼所執刀杖。尋段段壞。而得解脫。若三千大千國土滿中。夜叉羅刹。欲來惱人。聞其稱觀世音菩薩。名者。是諸惡鬼。尚不能以惡眼視之。況復加害。

【讀】若し復た人あり、當に害せられんとするに臨み、觀世音菩薩の名を稱する者は、彼の執る所の刀杖、尋いで、段々に壞れて、解脫することを得ん。若し三千大千國土の中に滿つる夜叉羅刹、來つて人を惱まさんと欲するも、其の觀世音菩薩の名を稱する者を聞く時に、是の諸々の惡鬼も、尚ほ能

く惡眼を以て之を視ず。況んや復た害を加へんや。

——前回から七難といふことのお話を始めて居る。今日の所は、其の七難の中の刀杖難、刀や杖の災難をお説きになるので、其のことに就いての經文である。何時も申す通り此の御經許りでなく、總て佛教といふものを會得しようといふのには、事釋といふ即ち事實の上の解釋と、それから言はゞ觀心釋又は理釋といひ、言ひ方は色々あるが、觀心釋といつて、心に觀じて而して解釋する、何時もさういふ工合に、事釋と觀心釋との二方面あるといふことを常に心得て置かなければならぬ。そこで例へば此處に出て居る刀といひ杖といふのは、事實の上から見れば、小供にでも誰にでも分る切れる刀、振り舞はす所の杖であるけれども、それは所謂姿に現はれて居る所の刀杖であつて、それを觀心といふ心の上から眺めて見ると、此れは鍛冶屋が拵へた刀であるとか、或は細工師が作つた所の杖であるとかいふやうな、さういふものでは決して無い。つまり刀杖といふのは、我々の驕慢瞋恚の心を指していふのである。人間といふものは、誰でも驕慢といふ心を有つて居るに違ひない。此の驕慢といふ心が全然無かつたならば、それは如何にも意氣地の無いものである。併しながら、あるとしても驕慢の心が盛んになると、殆んど自分の身を忘れて人を損ひ、色々の罪科を現はして來るものである。驕慢に限つたことではないが、驕慢といひ或は瞋恚即ち怒る心であるとか、或は慳貪といふ貪る心であるとか、或は邪見といふ、邪まの心であるとか、或は愚痴といふ心であるとか、其の他可愛

惜い憎いといふ色々の心を、皆さういふものを、私は決して有つて居りませぬと云ひ得るものは、決して一人も世の中には無からうと思ふ。凡夫の身である上は、これがあるのは當り前であるが、唯だ茲に大切なのは其の使ひやうである。今お話ししたやうな刀杖の如き恐しき心を以て、其の儘濫りに之を使ふ場合に於ては、大變な罪なり咎なりを生み出すのである。けれども其のものを善用して使ふ時に於ては、それが矢張り一種の智慧若くは巧妙なる働きとなるのである。煩惱を煩惱として其の儘に用ゐることは可けないけれども、煩惱を轉じて菩提となすならば、有らゆる善根功德の本ともなるので、つまり煩惱は智慧菩提の現はれである。大乘佛教の觀心釋の見方は、何時でもさういふ風に見るのである。正宗の名劔でも、使ひ手によつては人を切るの兇器ともなり亦身を護るの利器ともなる即ち能く人を殺すと共に人をも活かす、若し使ひ手が悪かつた時には、濫りに人を斬り殺す恐るべき兇器である。或る意味でいへば、我々は常に貪慾に支配せられて居る。瞋恚に支配せられて居る。愚痴に支配せられて居る、併し其支配せられてをると知るときソコに直に神機一轉の妙が現はれるのである。

それは追々とお話を致すのであるが、理釋の方から眺めて見ると、今不圖思ひ起したのであるが、明治天皇の御製の歌に斯ういふのがある「四方の海みなはらからと思ふ世に、なぞ波風の立ちさわぐらむ」これは一度び大慈悲といはうか、佛ならば大慈悲の心を以てじつと世界を眺めて見ると、萬國

それ／＼境を異にして居るけれども、皆は、らからである。四海は兄弟である。皆な同胞である。慈悲の眼を以て觀じて見ると、これは親類是は他人と別つべきものではない。精神的に於て皆な兄弟姉妹であるのみならず、佛のお言葉には、三界は我が有なりと仰せられてある。其の中にある衆生は悉く我が子なりとある。斯ういふ意味が法華經に述べてある。處がイヤ自分は佛に生んで貰つた譯ではない。それを我子だなんといつて、佛も随分勝手なことをいふものだと思ふ人があるかも知れないがそれは豆の如き眼で物を見るからで、精神的に見れば、佛は大慈悲心といふもので此の世界を包んで居る。其の立場から親しく眺めて見ると、三界即ち此の世界に於て、獨り人類計りでなく、人類を始めとして有らゆる動物も植物も餘さず洩らさず皆佛の赤ん坊である。我が有なりとは我が領分である此の世界は殆んど我が一家内も同様である。而して其の中にある有らゆる衆生は悉く我が子なりといふ意味である。丁度先帝様の御歌が矢張りさういふお思召であらうと思ふ。世界が皆な兄弟の如くに國と國とは條約を結び好しみを修めて、分け隔てなく平和を樂んで行かうといふのに、付うして此の平和の海に忽ち恐るべき荒波が起ち大風が吹くのであらうか、如何にも淺ましいことであるといふお思召であらうと思ふ。此の御製は丁度日露戰役の時に、深く御寂感があつてお詠み遊ばされたとお承つて居る。さういふやうな有様で、世界の平和もさうであるが、之を我が心の上に引き附けて考へて見てもさうである。心の平和は當り前に見て長閑な海の如くあるべきに拘はらず、何時も平れで長閑

であるかといふに、さうではない。始終心が動いてあゝ思つたり斯う思つたりして、斷え間なく轉變して居る。一々調べて見ると、昔の人は随分細かなことをいふたもので、我々が朝から晩まで色々に心の變ることを算へて四億二千遍も變化するといふて居る。什ういふ方式で算へたか分らないが、兎も角細かに算へたものである。果してそんな莫大な數に變化するか付うかは分らないけれども、能く／＼自分の心を調べて見ると、朝から晩まで欲しい惜しい憎しい戀しいと色々の心が生ずる。前に申したやうに、慳貪とか瞋恚とか愚痴とかいふ心が、様々に浮び出て來るのである。其の有様は殆んど水の滔々として流れて盡きざるが如く、雲の飄々として空中に浮ぶが如くに、今此處に斯ういふことを思ふかと思へば忽ち又外の心が浮び出で、千變萬化して限りが無いといふ有様であるが、其の様に變化する心を調べて見ると、多くは貪慾とか瞋恚とか愚痴とかといふ不道德の心が多分を占めて居るのである。不道德といつては明晰でないが、言ひ換へれば色々の罪とか咎とか惡心とかさういふ心が勝を制して居つて、良心、慈悲、正義、至誠、人道といふ觀念が極く乏しい。實に淺間敷いものである。これは元と／＼宗教的の信念がない處から、自然惡い方に誘惑されるのかも知れない。大體我々の心は善惡の二つに分れて居つて、善と惡とか常に戰爭して居るやうなものである。昔は波斯の二神教といつて世の中には善神と惡神があつて此の世界を支配して居ると考へ、これが常に相戰ふて居るのであるから、我々は善神といふものに聲援を與へ、惡神といふものを打ち滅ぼさなければならぬと

いふやうに考へて居つた。さういふことも矢張り一つの宗教の意味をなしたものである。我々の心もそんなものであつて、種々の心が起つて來るけれども、多くは善くない心の方が多くて、善い心の方は滅多に出て來ない、それ故に佛は三寶の徳を説になつて、和合の徳が最も大切であるとを教へられて居る。而して頻りに之を鼓吹し、之を獎勵して居る。何でも和合の徳が無ければ、我が一身の平和は勿論のこと、一家の平和一國の泰平を得ることが出來ないものである。宗教が實際の上を用をなして其最も貴い所は全く此の和合の上にあると云はれて居るけれども、我々の心は中々始終和合して居るものではない。自分の地位であるとか、境遇であるとか、周圍の色々の感化であるとか、外來の色々の刺戟であるとか、そんなものを受けて居る爲めに色々様々に心が遠く離れてゆく。人間は一々其の面が違つて居る如くに、心の赴き方も違つて居る。其の又一つの心を調べて見ると、幾つにも違つて居る。つまり我が心の中から醜いものも現はれば、美しいものも現はれる。佛の姿のやうな尊い心も現はれば、惡魔のやうな恐しい心も現はれる。之を觀心的に觀察して見ると、あり／＼と明鏡に物を寫して見る如くに分かる、今日は佛の姿のやうに現はれるかと思へば、明日は惡魔の形となつて現はれ、勝手次第に色々様々に現はれて、甚だ五月蠅いやうに思はれるけれども、見方に依ては其の様々に出て來る所が面白い、結局善惡の兩面は交々現はれるのであるが、其の悪い方面に現はれるものを之を指して刀杖といふのである。言はゞ惡しき心が刀杖の現はれである。恐るべき心が刀と

杖とに譬へられて居るのである。若し驕慢とか瞋恚とか、斯ういふ心が頭を擡げて來ると、先刻も申した通り、一たび振り舞はせば直ちに人を斬るやうな刀となり、五尺の身體を眞向に薙ぎ倒すやうな鐵の棒ともなり、手を動かし足を運ぶ毎に、色々様々の惡事をなすのである。一たび心の中にさういふものが起つて來ると、妻子も怨敵の如くになり、親しい親子の間にも鐵條網が出來て來る。家族五人あれば五人、十人あれば十人、皆な一の妖怪の如く幽靈の如く惡魔の如く、人皆我に祟りをなし我を規ふやうになる、是れ一に我が念頭に恐るべき影を宿すからである。其の心を刀杖といふ意味に觀心釋では見て宜いのである。

併し觀心釋ではさういふ工合に見るのであるが、事釋といふ事實上の解釋も疎そかにしてはならない。或は觀音靈驗記とか或は何の利生記とかにさういふ事蹟は澤山あるが、今の人は碌々調べもせず唯だそれを迷ひの奇蹟といつて居る。さういふ人には迷信の奇蹟と見えるかも知れない。それは宗教を自覺しない人のいふことである。我が精神界の音づれを知らない人は、其の小さな學問や小さな智慧の型に嵌まらないことは、皆之を一種の奇蹟と見て退げて居るけれども、さうではない。言はゞ我が心自身が己に一の奇蹟である。故に私に言はせると、世の中の多くの人は神祕でなひことを神祕じやと思ひ、神祕であることを却つて常事ぢやと認めてをることがある其れは何故なれば、其の人の學問が小さく智識の範圍が狭いからである。我が五官に囚はれて、其の中に考へた斷案に過ぎな

いからである。此の世界は五官だけの世界ではない。五官に觸れない甚深微妙の範圍が非常に廣い。苟くも宇宙人生の眞意を知らんとせば、肉の眼で見外に、心の眼で見なければならぬ。耳も肉の耳の外にある、一つの肉の耳ばかり當てにして聴くやうでは可けない。佛法には天眼通、天耳通、他心通、宿命通、漏盡通即ち五神通或は六神通と云ふ様なものがあるけれども、普通世の中の人には、我が肉の眼ばかりを當てにして世界一切のものを見て居るのであるから、それに當て嵌まらないものは直に奇蹟とか迷信とか、或は一種の神祕不可解と、斯ういつて仕舞ふが、そんな譯のものではなひ若し五官以上精神的に一つ眼を持つて居るものは、そんなツマラヌものではなからうと思ふ。吾が宗教の立場から見ると、世の中の人々が奇蹟といふて居ることは、決して奇蹟でもなく神祕でもなければ不可解でもない。それが當り前である。其の奇蹟でないといふ證據として、觀音靈驗をお現はしになつた實例が澤山あつて、昔からさういふことを書いた本が幾らもある。其の事實上のことを擧げたいけれども時間を限つた此の席では其の暇もないが、御承知の口蓮上人、これは言ふ迄もなく法華經を命とせられた方である。此の日蓮上人に就いての事實を一つ申上げて置く。これは觀音經に限つたことではなく、法華經全體に就いて靈驗のあつた話。それを或る書物に書いてある通り、一寸一節、お話するよりも讀んだ方が確かであるから讀んで見ましよう、其の誦の中に東條景信といふ人があるが、これは念佛の信者で、大變日蓮に反對したものである。

景信は兎を驅る虎の如く、馬を一文字に乗り寄せて、「ヤオレ日蓮、久遠實成の彌陀尊を貶し、念佛を無間地獄なりと罵る、謗法の報今こそ思ひ知りつらふ、觀念せよ。」斯ういふて、太刀を揮つて斬り附くる。日蓮は右手に持つたる念珠を揮つて、憂然として太地に打ちつくる。太刀の物打、大珠に深く斬り込んで、念珠のばらりと散亂する時、切尖餘つて日蓮の右額を、右筋かひに三寸許りを劈いたり「え、仕損じたりや思ひ知れ」と返す太刀を打下さんとした一刹那、不思議や其の太刀三段に折れて、日蓮は辛く一命を拾つたのである。

これは今の普門品で、念彼觀音力、刀尋段々壞とある通りに、一心不亂に觀音を念じたならば、振上げた刀も三段に壞れたといふ、其處の一段である。もう一つ龍ノ口で斷頭場裡に、命が消えなるといふ時、矢張り刀尋段々壞、前の如くに斯う書いてある。これは今の鎌倉の龍ノ口の刑場の話である。兵士等の驅け走つて騒ぐを見て、賴基等ばもう哀愁の涙に掻き暮れて、

これは四條賴基といふ人である。日蓮の信者で、四條金吾と共に能く日蓮の遺文に見えて居る人である。

「只今此の處にて、邪見の刃を受け給ふか」といひも敢へず、男泣きに泣き伏したり。さうすると日蓮は不覺の殿原ではある。これ程の喜びをば、たゞお笑ひなされうぞ。」と彼等をいましめて、自ら敷草の上にひんすと座し、神色自若として自刃の下に首を伸べながら、心を最後の讀經に證す

のであつた。夜は既に三更を過ぎて、十二日の月は山の端に没し、四面暗澹たる中に、磯打つ波の音ばかり、人の心を轟かす。刑場の三方には、隙間もなく兵士を配つて、平右工門尉賴綱は少し退つて馬をたて、劍手に選ばれた依智三郎直重は、三尺二寸蛇胴丸と名づくる利劍の鞘を拂つて、切り水を灌ぐ、光り焔火に映じて、人の心を寒からしむ。人埒の彼方には、日明、日興、日進父子、日向、日頂を始め、四條兄弟、熊王四郎等は、口の中に題目を唱へながら、涙にくれて合掌したり依智直重は太刀を背の方に廻して。日蓮の傍に小膝をついた。「いかに御坊、おん身は叛反の科もなく、強盜の罪もなく、たゞ新法を弘めん爲めに諸宗の謗を受けて、淺間しき最後を遂げらるゝは返すくもおん痛ましく存じ申す。直重齡ひ五十、いかに天下の嚴命なればとて、大徳の出家に刃を中つること、其の罪の深さ思ひ知られて、後生が恐しく御座る。何卒只今よりおん心を翻して誹謗をおん止まり下され、直重一命に換へて、おん命を救ひ參らさう。いかに御坊」と流るゝ涙は見えずとも、誠心は聲にも著し。日蓮も此の武士の情を嬉しく思はないではなかつたが、毅然としてそれを退けた。「御芳志は厚くおん受け申す。さりながら、法華經の爲めに身を棄てんことは、日來月來の本意でござる。御邊が情によつて、よし一命は救はるゝとも、法華經を離れては日蓮の生命はござらぬ。法華經を捨て、地獄に墜んよりも、この儘斬られて成等正覺を取り申さう。いひく此の素つ首を刎ねられよ。」

斯ういふ勢である。實に仕うも富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はずとは此のことである。

端坐したる體は、宛然として地より生へた如く、合掌瞑目して經文を唱へて居る。直重も今は論すべき言葉がなかつた。已むなく後ろに廻つて太刀を取り直した。日蓮は大なる眼をかつと睜らいて虚空を睨みながら、「いかに約束をば違ひらるゝぞ」と大喝した。この時白刃は上段に振上げられて一閃忽ち身首地を異にせんとした其の刹那、海にはつと光を落したものがあつた。不思議や江之島の方より、月の如き光り物現はれて、巽より乾に向つて轟然として飛び去つた。其の光り煌々と、並み居る人の面は固より、礫の真砂の數までも讀まるゝ程であつた。劊手は眩暈いて地に倒る。頼綱は鞍の前曲にしみがついて、身を慄はして蹲踞る。まして刑場の兵士等は、刀を地に伏せて、一町餘りも遁げ退いたのである。日蓮は泰然として後ろを振向き、「いかに殿原、大切の囚人を捨て、遠く退く方やある。近く打寄れや、〜」と高々に呼ばつたが、怕れて寄るものが無かつた。「夜が明けては見苦しからう、首切るならば、急ぎ切れ」云々。

仕うであります。此の勢ひあつてこそ、刀刃も段々になつて壞れるであらうと思ふ。これは日蓮上人のお話であるが、我が禪宗の立場から見ても、一度び我が心に徹底する時には、もう一つ言ひ換へれば豁然大悟した時には、泰山を挾んで北海を超えたる如きは、朝の間のお茶の子である。限りなき空の星の數を數へる如きは何でもないことである。富士山を燈心で倒す位は何でもないことである。禪宗の立場から見れば、そんなことは奇蹟でも何でもない。當り前のことである。唯だ其の眞の徹底の境涯に達しないものは不可思議であるとか、神祕であるとかいつて、佛法はさういふことをいふから人を愚にする、迷信に導くと、そんなことをいふて居るので、これは如何なる大學者でも大思想家でも到底我々の徹底した見地に向つては、言語若くは文章のやうな、そんな飛道具を以て來て陥落させようとしても陥落させることは出来ないものである。富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず、確乎不拔何人も動かすことの出来ないものである。斯ういふ譯であるから、我が圓覺寺の開山の祖元禪師がまだ歸化せられない前に、宋の雁蕩山に聖胎長養せられて居た。其の時元の兵が其處へ侵入して來て、亂暴にも禪師を捕へて、一刀兩斷にして仕舞はうと迫害を加へた。禪師は氷のやうな刃の下にありながら、神色自若として、口を衝いて一の偈を唱へられた「乾坤無地卓孤筇、且喜人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風」電の影の下に春風を斬るとは眞に恐れ入つた譯である。此の講釋は他日に譲つて今日はしないけれども、其の泰然自若とした態度に、亂暴な元兵も思はず刃を收めて却て敬意を表して去つた、斯くて祖元禪師は虎口を逃れたといふ。斯ういふやうなことは奇蹟でも何でもない。我々が一度び大慈大悲の觀世音菩薩の御名を念するならば、丁度露や霜が朝日の前に消えて仕舞ふやうに、刀杖の難も忽ち消え失せて仕舞ふ。刀杖といふことを觀心釋

で見ると、あれが憎くて溜らんとか。これが可愛くて溜らんとか、或は惜しくて溜らんとか欲しくて溜らんとかさういふ慳貪瞋恚愚痴の心をいふので、其の刀杖を振り上げて我が頭の上に持つて来た時に、南無觀世音菩薩と稱へて宜い。假令稱へなくても、觀世音菩薩は全體これ慈悲、全體これ智慧、全體これ勇猛心の疑り塊りである。此の慈悲智慧勇猛心の三つを併せて、始めて觀世音菩薩の御姿を拜むことが出来るのであるから若し我々が水火の中に飛び込んだ所で、苟くも一身を觀世音菩薩に托したならば、洵に愉快に小氣味能く煩惱が消えて仕舞ふ。假令貴女方が口に觀音經を讀まれなくとも宜しひ平生下僕を使はれる上、亦は人と交はられる上に、色々の短い智慧や小さい心を以て接する時には向ふが厭な顔をするに違ひない。それは我が心の至らぬ爲めである、狭い智慧のなす所である、總てさういふ浅い狭い心を捨て、仕舞ひ、油然として一點慈悲の心を起されたならば、自分の心は平和であつて人も亦自づから服従して来る。さういふことの意味が刀が壞れるといふのである。斯ういふことは詳しくお話しして居ると長くなるから、大抵にして置かうが、先づさういふ意味に解釋して置いて宜しい。本文に「若し復た人あつて當に害せられむとするに臨めば」とある、何かの災難で、我が命を取られるとか、危害を加へられたといふ時は、善神が惡神に負けた時である。寸善尺魔と諺にもいふ通り、悪いことの加勢は多いが善い方の味方は少い世の中である。併しさういふ障礙物が道に横つて居るのは却て我が力を試めすこととなるのである。さういふ危害を加へられた間一髪の時

に一度び心に觀世音菩薩の御名を唱へ觀世音菩薩を念じたならば、彼が執る所の刀杖も直にずた／＼に壞れて仕舞ひ、而してしかも解脱することを得るとある。解脱といふことは、何か世の中から蕩抜け出て山の中へでも這入るかのやうに思つて居る者もあるが、さうてはない、解脱といふことは自由の意味である。世の中は障礙物の多い所である。不如意、不満足、不平、さういふことに満たされて居るのが世の中の常である。其れを形容すれば實に涙の谷である。苦しみの海である。それに囚はれると此世で浮ぶ瀬がなひのである俗に魔が差すといふことは、我が心の善神が惡神に捕はれた時である。それを拂ひ除け切り開いて解脱自由なることを得るのである。

「若し三千大千國土、中に滿つる夜叉羅刹來つて人を惱まさんと欲するも、其の觀世音菩薩の名を稱する者を聞く時は、是の諸々の惡鬼も尙ほ能く惡眼を以て之を視ず、況んや復た害を加へんや」三千大千國土といふことを解釋するには、印度に古く説かれてある須彌山のことを一と通りお話しなければならぬけれども、今日は其の暇がない。印度古代の天文學地理學を研究するには必要であるが、此席ではそれには及ぶまいと思ふ。世界中と一口に云ふて居るけれども、此の宇宙の廣大無邊なるのは實に驚くべきものである。つまり三千世界といふのは、無限の宇宙間といふのである。事釋といふ事實の上から見れば、天文學者の調べて居るやうに、地球は常に回轉して居るが、それに熱と光を與ふるものは、地球の面積に一千倍もある大きな太陽である。其の太陽系の中には太陽を中心として遊

星だの恒星だの、大なる星小なる星が幾つも附屬して居る。此外宏大なる空間には無数の星が光を放つて居る。其の中には彼の星から此の地球に光が達するまでには、幾千萬年を要するといふやうな面も其の光の速度が一瞬間に幾千里を走るといふ速度でありながら、尙ほ其の位の悠遠なる歳月を経て始めて此の地球に光が達するといふのである。空間の無限なると天體の宏大なることは、實に驚くべきものである。三千世界といふのは之を概括していふたのであつて、事釋でいへばさういふやうなことである。觀心釋でいふと、三千大千國土といふことは、我々の精神の世界を指していふのである。我々の心の世界には、何も事實上の世界のやうに、距離が何萬里あるの、什うのといふのではないが此の空間の無限なるが如くに、我々の心の世界も無限である。其の世界に一杯満ちて居る夜叉羅刹、我々は平生何も気がつかないけれども、此の無限の心の中に含まれて居る色々の心の作用は、皆夜叉羅刹である。夜叉といふのは翻譯すると疾捷鬼といふ字を使つて居る。これは瞬間にして幾千萬里を飛び去る鬼である。羅刹といふのは此の間も申したが、食人鬼である。これは皆梵語で翻譯するとさういふことになる。疾捷鬼とか食人鬼とかいふものは、今何處に住んで居るかといへば、其處は觀心釋でいふて見ると、三千大千國土は、即ち我々の精神の世界である。其の精神の世界の什んな處に居るかと點檢して見るに決して遠方ではない。所謂煩惱、妄想、貪慾、瞋恚、愚痴、それから分れて八萬四千と一口にいふけれども、それ處ではない。無量無邊の夜叉羅刹を心に有つて居る。我々は

優しい心も有つて居るが、其れが一度び心の向けやうによつては、中々恐ろしい心となつて現はれるので、昔し婦人に對していふた言葉にも、内心如夜叉、外面如菩薩といふて居る。婦人ばかりでなく人間は皆さうである。人面獸心である。表は人間でも心は獸である。さういふ風に人の心を調べて見ると恐るべき見にくい振舞も、表てに見えない心が作るのである。「我が心鏡に寫るものならば、さぞや姿のみにくかるらん」といふ歌があるが、そんなものである。精神的に觀じて見ると皆其の通りである。其の三千大千國土に滿つる夜叉羅刹が來つて人を惱すといふのである。我々のやうな小さい目では分らないけれども、我が心に一點惡心を起すといふと、加勢する惡魔が始終我々を悪い方へ導ひて行く、又一點善心を生ずると、善神が現れて、そんなことをするものじやないといふた様なものである。畢竟するに順境といひ逆境といふも、仔細に點檢すれば皆心の影法師である。確かり眺めて見るとさうである。此の影法師といふことに就いて、或本に面白いことが書いてある。斯ういふ話。

或る處に若い夫婦があつて、其の女房が難産の爲めに、遂に命を取られて仕舞つた。處が亭主は、洵に可哀さうなことをした。氣の毒なことであると、どうしてもあきらめられず朝な夕なうつくしくして居つたので、其の不憫だ〜といふ思ひが嵩じて來て仕舞には女房の形か身はれて見へるやうになつた。折しも夏の夜のことであるから、蚊帳を釣つて居ると、其の蚊帳の外に元の女房が寂しげな



態をして立つて居る。其の姿が目についた、サア其れからは夜の目もろくに寝られず起つても居ても只女房の事計り氣になつてならぬ明日の晩になると、又同じやうな元の女房の姿が見える。其の翌晩も又其の翌晩も同様に憐れな姿を現はすので、果してこれが元の女房であるか何だか、其の瘦せ衰へた姿が今度は恐ろしくて溜らなくなつた。それで平生仕事をして居つても、又あれが来るか仕うかとそんなと許り考へて又今夜も恐ろしい目を見るのか、此れは我が迷ひてあらうか、若しくは女房が浮ばれないのであらうかと、色々様々に思ひ惱んで、苦しくて溜らない、さういふことが絶え間ないので、仕方が無いから、彼の禪寺に居る和尚さんに頼んで、何とかして退治をして貰はうと、或日其和尚さんの處へ尋ねて行つて、實は斯くくの譯で女房が死にましたので、不憫なと思つて居た處が、遂に幽霊になつて現はれて来るやうになりました。何分毎夜のやうに出て来られるので、恐ろしくて堪りませんが、仕ういふ風にしたならば退治が出来ますか、彼を浮かばせることが出来ますかと問ふた。スルト坊さんは無造作に其處に豆を一杯入れてあつた盆を持ち出して、何に其の幽霊は難作なく退治が出来よう。此の御盆の豆を一攫み攫んで、之を内へ持つて歸つて而して今晚寝る時に、確かり手の中に豆を握つて居るが宜い。若し時刻になつて、元の女房が現はれたならば、斯ういふ譯にして、先づ斯ういふ問を出して見よ。此の手の中にあるものは何かといつて、手を出して見せよ。其の時幽霊は屹度豆であるといふに違ひない。それならば、此の豆の數は如何程あるか、と又問ふて見

よ。今度は幽霊の方で答があるまい。さうすると大丈夫退治が出来たので、直ぐ形が消えて仕舞ふに違ひない。譯もないことであると教へた。亭主は喜んで、其の晩教へられた通りにやつて居ると、果して元の女房が姿を現はした。すると直に握つた豆を突き出して、これは何かと問ふて見た。聲に應じて幽霊は豆であると答へた。それなら幾つあるかといふと、今度は答が無い。はつと思つて見るともう姿が消えて居つた。妙なこともあるものだ、あの通りチャンと幽霊が出て居つたのが灯火を消す如く丸て影を隠して仕舞ふたと思議がつた。翌晩もさつぱり出て来ない。亭主はそれで安心して。兎も角も和尚さんに禮をいふて譯を聴いて見ようと、早速出掛けて行つた。仕うも不思議などで、貴僧のお言葉の通りやつて見ると、全く姿を現はさない。これは仕ういふ譯でありませうと問ふと、坊さんのいふには、不思議も何もあつたものでないお前が女房の難産で死んで仕舞ふたのを、あゝ可哀さうだ。浮かばれないで居るだらうと、其のこと許り思ひ詰めて、到頭不憫が嵩じて、女房の姿が目につくやうになつたのだ。言はゞお前の心から現はれる幽霊である。それが證據には、手に握つて居るものが豆であることは、お前が知つて居るから、此方の思ふて居る通り、幽霊が豆であると答へたが數だけはお前も知つて居らなかつたから、幾つかと問ふたら答が無いのはあたりまへである。皆自分の心である。心から現はれ出でた所の影法師である。何でもないことであるが、世間の人は、其の何でもないことに、色々苦しむことが多いと、さういふことが或る書物に書いてあつた。

今いふ夜叉羅刹も其の影法師である。何故とならば、其の觀世音菩薩の名を稱するものを聞く時に於ては、さういふ場合に於ては、是の諸々の惡鬼も尙ほ能く惡眼を以て之を見ないといふのであるから、我々が觀世音菩薩の名を念じて其の大慈悲、大智慧、大勇猛心の現はれであると、深く自覺して居るならば格別、さうでないといふ心が弱くして直ぐに周圍の事物に囚はれて仕舞ふ。惡鬼は常に我々を覘つて、我々を呪はんとして居る。丁度足許から鳥が起つやうなもので、つまり我々の心がお留主になつて、我々を取り圍んで居る周圍の事情が複雑して居ると、直ぐそれに囚はれて仕舞つて、色々の罪科を作るやうになるのであるが、什んな周圍の事情があらうとも、何にこれしきのことと思つて、心強くして居れば、思ふことが易く行はれるのである。それを幾度か經驗して來ると、つまり此の惡鬼も尙ほ能く惡眼を以て自分の顔を見るやうなもので、心が弱くして周圍の事情に制せられると、前に申した亭主が女房の幽霊を見るやうなもので、自分から諸々の惡鬼を招くことになる。要するに對境は影法師である自分の心から招くのである。實例を以て申せば昔し洞山の鎮守の神が洞山禪師の御顔を拜みたいと思つたが、どうしても洞山禪師のお姿を見ることが出来なかつた。然るに或る日フト洞山和尚が無作法なる——待者を御叱りなされた時漸くチラと洞山和尚のお顔を拜むことが出来たといふことがある。斯ういふやうに一度び觀世音菩薩の御名を唱へる時には、諸々の惡鬼、夜叉羅刹のやうなものも、惡眼を以て眺めることが出来ないものである。まして況んや復た害を加ふる

といふことは出来るものではない。さういふやうに私は解釋して居る。

第五回

設復有人。若有罪。若無罪。杻械枷鎖。檢繫其身。稱觀世音菩薩。名者皆悉斷壞。即得解脫。若三千大千國土。滿中怨賊。有一商主。將諸商人。齎持重寶。經過險路。其中一人。作是唱言。諸善男子。勿得恐怖。汝等應答。一心稱觀世音菩薩。名號是菩薩。能以無畏。施於衆生。汝等若稱名者。於此怨賊。當得解脫。衆商人聞俱發聲言。南無觀世音菩薩。稱其名故。即得解脫。無盡意觀世音菩薩。摩訶薩。威神之力。巍巍如是。

**讀方** 設し復た人ありて、若くは罪あり若くは罪無きも、杻械枷鎖を以て其の身を檢繫せられむに、觀世音菩薩の名を稱する者は、皆な悉く斷壞して即ち解脫を得む。若し三千大千國土の中に滿つる怨賊、一人の商主あり、諸々の商人を將て、重寶を齎持して險路を経過せんに、その中の一人是の唱言を作さんに、諸々の善男子恐怖を得ること勿れ、汝等當さに一心に觀世音菩薩の名號を稱すべし。是の菩薩は能く無畏を以て衆生に施す。汝等若し名を稱する者あらば、此の怨賊に於て當さに解脫する

ことを得べし。衆々の商人聞いて俱に聲を發して、南無觀世音菩薩と言ふなり。其の名を稱するが故に即ち解脱を得。無盡意觀世音菩薩、摩訶薩、威神の力、巍巍たることは是の如し。

**講話** 當婦人道話會では、私の積りでは家庭の教にもといふ考で、斯の如く觀音經を講ずるのであつて、別に六かしい講釋をしたり一種の佛教學者を作らうなどいふ考へではない、つまり家庭の教として、此の普門品のやうなものが洵に適當であらうかと思ふのであります。私は多少世間の家庭の有様を知つて居る。日本では家庭の教といふものが、洵に乏しい。昔から斯うであつたか、或は近頃斯うなつたのであるか分らないけれども、どつちかといふと——社會を假りに階級を分けて上中下とすると所謂上流社會、中流社會といふやうな所に、比較的家庭の教が少い。歐米のことは詳しくは知らないけれども彼方と此方とはあべこべであらうと思ふ。亞米利加人の下層社會には家庭の教が洵に少いけれども、併しながら中流上流の社會に這入つて見ると、何れも宗教の空氣が十分に行き亘つて居るやうに私は見受けた。私は前年渡米して十ヶ月許り彼方の家庭に居つたのです。處が日本には、貴族富豪といふやうな人々になると、洵に宗教が唯だ形式になつて居つて、墓參りするもお寺參りするも、殆んど形式——儀式のやうな有様である。人々の心を安んじて、それを本として、一家内何かの宗教的意味に於て、親子夫婦兄弟姉妹それらの一家族が、敬虔親愛の情に繋がれて居るといふやうな家庭が乏しい。又私の見聞の狭いからでもあらうが、唯だ教育——といふことは如何にも結構で

皆それは盛んであるけれども、獨り教育だけで、圓滿に何もかも整ふかといふに、さうは行くまいと思ふ。教育ともう一つ精神の根底ともなすべき宗教的信念が無ければならぬ。私は今特更に宗教的信念と云ふので、何の宗教を捨て、何の宗教を取つたら宜いとおす、めする譯ではない。何の宗教でも宗教的生命が活きて居れば結構である。唯だ宗教といへば、お祀りだとか葬式だとかそんなことだけに思はれるのは、甚だ迷惑の事である。それ等は全く宗教の本領を會得しない人々の云ふ事であらうと思ふ。それに就て多少所感があるけれども、それは他日に譲つて置いて、此度はさういふ家庭の宗教とも見るべき、其の宗教心を養成する資料として普門品を選び取つたのである。家庭に於ては婦人に最も責がある。故にこれは婦人本位としてお話しするのであるが、男子方も其の積りで聞いて下されば有難い。

「設し復た人あり、若くは有罪若くは無罪」云々。かねてもいふ通り現在御互は有罪でないけれども假りに有罪といふので、其の積りで聞けば宜しい。此の本文だけは平易で明かであるが、同時に斯ういふ本文を一寸聞くと妙な考を起す人がある。觀音經は無暗なことを説いて居る、果して此の經文通りならば、觀音を信じさへすれば刑法も法律も入らないものになる。佛法を信じさへすれば國家の法律が役に立たなくなるとは不都合である。斯ういふことを考へて居る人がある。何か立派な博士でさういふことを云つて居るのを見たことがある。それは佛法を知らないから早合點をするのである。

さうではない。總て佛法は何の解釋でも、何時もいふ通り事釋と理釋、事實上の解釋と道理上の解釋も、一つ言ひ換へれば物質上の解釋と精神上の解釋と、此の二通りが始終附いて廻つて居つて、就中我々が重きを置いて居るのは、理釋若くは觀心釋といふ方で、それに依つてお話するのである。故に何遍も繰り返して、貴女方の心の中から喚び起すのであるが、元とく觀世音菩薩といふのは、事釋でいろくいふこともある、即ち歴史的にお話することもあるが、それは二の次ぎである。もう一つの觀心釋これは決して明かに目の先に現はれた菩薩でも何でも無い、我々が精神上から生み出す所の觀世音菩薩である。それが嘗てもいふ通り、大慈悲心、大智慧心、大勇猛心の塊まりて、獨り慈悲許りではない。智慧も勇猛も併せて觀音菩薩の根本精神である。世間で所謂智仁勇、さういふ根本精神を具體化して觀世音菩薩と立て、居るのである。私は觀世音菩薩の現はれであると斯う堅く信じてお話するのである。同時に貴女方も矢張り我は觀音の權化であるといふ自覺をチャントもたれたならば、聞く方と説く方とが一致融合して、茲に始めて生きた觀音の御説法が始まるのである。さういふやうな有様で、今此に罪あり罪無しといふは世間の刑法治罪法とかいふさういふことに照らして罪あり罪無しといふのではない。つまり精神上からいふのであつて、第一我が心の上に罪があるか無いかを自分自身に反省したら宜いのである。ずつといふて見れば心の上に罪があると知れば之を有罪といふので、即ち惡人といふて宜い。又無罪といふのは善人のことで、良き心持ちといふて宜か

らう。今此の觀音の根本的大精神から眺めて見ると、心の上に罪があると思ふ者も罪が無いと思ふ者も、一心に觀世音菩薩の名を稱へ奉つるさういふ意味である。罪のある者は勿論のこと、罪の無い者でも冤罪の爲めに鐵窓の下に苦められるといふことがある。之を事實の上でお話すれば、「桎械枷鎖を以て其の身を檢繫せんに」と、斯うある。これは字義をお話すれば能く分ることで、桎は手がせ、械は足がせ、枷は首がせ、鎖は身體を縛つて置く所の鎖である。處が私は無垢な身體で縛られる筈はない。さういふ人もあらうけれども、それは事實の上のことである。一たび精神的に我れ自身の心の状態を考へて見ると中々手がせも嵌められ足がせも嵌められ首がせも嵌められ、身體中色々なものが纏ふて居る言ひ換へれば桎械枷鎖とは、我が貪慾、瞋恚、愚痴、懈怠といふやうな色々な心の執着して居ることをいふので、所謂八萬四千の妄想煩惱を此處では桎械枷鎖といふのである。中々これに纏はれて居る。故に表面から世間を眺めて見ると、妙なもので隣りの牡丹餅は甘いやうで、イヤあの人には身分が良いとか結構な身柄であるとかいふけれども、云はれて居る其の人の精神的状態を見ると、成程暖かな着物を着、旨い物に喰べ飽きて、樂な身分のやうであるけれども、動もするとあべこべにさういふ身柄の人に限つて精神の上に色々苦しみがある。私は處々方々を巡つて色々な家庭を見ることがあるが、さういふ風のもが大分あるやうだ。夫婦であつてもうまく調子が整はず、兄弟であつても動もすると他人同前に疎々しく、甚しきは慾の爲めに親子同志が財産を争つて、或は親類を煩は

し或は法廷を煩はして、汚名を世間に流すものなど色々ある。それが何にか平常は色々飾り物や色々な粧を外から着けて辛ふじて醜體を蔽ふて居るだけのもののである。比較的人に美される人に、柵械枷鎖の檢繫が多いのである。それは人々自身で心に照して見れば分ることである。その身を檢繫せられるといふは、檢束せられて居る、縛られて居る、繫がれて居るといふことで、これは誰が苛めるといふのでもなく、誰が苦しめるといふのでもない。其の實自身獨りて、苦しんで居るのである。近頃は男で神經衰弱、女性ではヒステリーといふやうな病氣で、一寸見た所では、他所目では苦しいやうでもないが、其の自身は朝から晩まで何にか氣になつて非常に苦しんで居る。さういふ氣の毒の人が澤山ある。餘り贅澤我儘がき、過ぎると得てさういふことになるのである。これがあべこべに、碌なものも喰べられず、子供に着物も充分に着せられないやうな分際でも、表面から見れば如何にも苦しいやうに思はれるが、其の實精神上から見れば却つてそれが勵みになるので其の日々を愉快に暮して行ける。斯ういふ者が所謂下層社會にある。全體人間を下層とか中層とか分けるのは間違つて居るが、假りにまづさういふて置くのである。そこで若くは罪あり若くは罪無きも、柵械枷鎖を以て身を縛られても言はゞ惡念妄想の中に没頭して居つても、一たび熱心の心を以て觀世音菩薩の名を稱する者は悉く斷壞してとある。こゝが有難いこゝが宗教的精神を有つて居る人と有つて居ない人とが違ふ所であらうと思ふ。平常無事太平に立派な顔をして居るけれども、人間の宛て事と何やらは先か

ら外づれるもので、いつ何時不慮のことが無いとも限らない。幸福が直に不幸に陥ることは珍らしくない。さういふ時に苦しい時の神頼みといふが、斯ういふ時に宗教心がむら／＼と起つて來るのである。此處が平常宗教的の心得あるものと心得の無い者で、安心不安心の依つて分れる所である。斯ういふ淺ましい物に身體を縛られて居つても、觀世音菩薩の名を稱する時は、觀世音菩薩は「世の中に憎しと思ふ人ぞなし、罪ある人はなほ憐れなり」と斯ういふ歌があるが、觀音様はつまり慈悲、智慧の塊であるから、どうぞして救ひ上げたいといふ御心許である。我々も又觀世音菩薩の片割であるといふ確信が腹に湧いて來ると、其の御心とびつたり出遣ふ。——南無觀世音菩薩、此の一聲の下に皆悉く斷壞する。即ち手がせ足がせ首がせ總て我々を縛つて居る所のもが悉く斷たれて仕舞ふ。總ての邪魔物が碎けて仕舞ふ。そんなものは、すつぱりさつぱり段々に破壊されて直ぐに解脱するのである。解脱といふのは、此の世の中が五月蠅いから靜かな所へ行くとか、安らかな所へ行くとかさういふ意味ではない。解脱といふことは「自由」と認めて宜い。即ち自由を得ることになる。さういふ意味である。以上は、何もわざわざ「妻子あるものが、恩愛の絆を切つて仕舞ふといふやうな、さういふ無理な考を起さなくとも確乎たる信念さへあれば、妻子、眷族、財産、地位、名譽、それが何も自分の煩らひにならないのであるから、愉快に自由に此の世を送ることが出来る。即ち解脱することを得んといふのである。

「若し三千大千國土の中に満つる怨賊」この三千大千世界といふことは、先達ても一言申して置いた通りで再び詳しくお話は致さぬが、唯だ無限の國土とさう解釋すれば宜い。無限の國土は何處にあるかといふならば、之を精神的に解釋すると、限りもない我が心の國土である。現在事實の上の國土は限りがあるけれども、我が心の國は限りがない。その中に満ちて居る怨賊である。怨賊といふのは我を害する賊である、怨賊に捕はれて觀音の信者が其の難を免れたことは、靈驗記や縁起などに澤山ある話で有難い功德であるが、今主としてお話しするのは、其の賊の方である。即ち我が心の中に満ちて居る賊、例へば王陽明の言葉にもある通り、山中の賊は平げ易く、心内の賊は平げ難く、我が心の中に潜んで居る賊は退治しにくいものである。菅原道真公は熱心なる觀音の信者であつたが此の賊逃るゝ所無しと大聲疾呼せられた、逃るゝ所はないが觀音を念ずること一回すれば即時に安樂を得んと云ふ長篇の詩を御作りになつたこともある。其外色々あるが佛印對東坡の觀音問答なども頗る面白いことである。昔し空也上人は金枝王葉の立派な皇族の御一人であらせられたが、其の御修行中に、雲水姿をして或山中を一人で、而も日の暮れがたに、とぼく歩いて居られた。所が——昔はさういふことが多かつたのであるが、ふと山の曲り角に、雲突くやうな大男がすつと目の前に現はれた。而して上人の身邊を見廻はして、何か大事な寶を持つて居るに違ひないと見て取つて、大音聲で「持つて居るだけの物を残らず目の前にさらけ出せ。もう我々の手に捕まつた上は、逃げようとしても逃しはし

ない」と呼ばつた。其の時空也上人ははら／＼と涙を溢された。處が盜人は早合點して、見れば出家沙門の身である。既に慾も得も離れたさういふ姿であるのに、今持つて居る物を皆出せといふたら、洵に見苦しくも涙を溢した。さういふ詰らない坊主であるのか。そんな輩は裸にして仕舞ふからさう思つて居れと息巻いた。空也上人は靜かに言はれるのには、涙を溢したのは外の譯ではない。お前達も同じ身體に同じ心で、而も見受ける所によると、十人並み勝れた立派な體格を有つて居つて、血氣恰も盛んである、世に人間のすることは澤山あるが其れに事を缺いて追剝泥棒、人の物を只取る。斯ういふことをして世渡りをするとは如何にも殘念なことではないか。さういふ淺ましいことをしては、現在の罪み咎は言ふまでもなく、未來の果報も思ひやられる。如何にも可哀さうなことだと思つたので、見苦しくも一點の涙を注いだのであると仰せられた。それが拵えごとならば彼等に何の感じもなかつたであらうが、滿身唯だ憐れだ、氣の毒だといふ、大同情の心を以て諭されたのであるから、其眞實心が頑迷な彼等の心にも感通したと見へる。盜人はふと何か思ひ出したやうで、それから打つて變つて優しくなつてすつと雲隠れして仕舞つた。其の時は何も言はなかつたが、二三日経てから御上人様にお目に掛りたいといつて、大きな男がやつて來た。能く見ると、先達て自分を追剝がうとした盜賊である。お前達は何しに來たかと問ふと、あの時のお上人の一言が私の膽にこたえました。其の晩に他處へ行つて仕事をしようと思つても、やる勇氣が出ませぬ、かりそめにも物を取らう人を苛め

ようといふ氣も力も無くなりました。而して自分の身を考へると、長い年月強盜、殺人、姦姪あらゆる悪いことをなし人を惱めたことを思ひ出し、慚愧悔身を容れる所がありませぬ。今翻然として此心を改めました。我々のやうな罪深き者でも、お弟子にして下されませうか何卒御願ひ申し上げますと云ふた。勿論佛法は罪を悪むも其の人を憎まない。空也上人は、さうかそれは奇特な事である。昨日までは追剽強盜でも、一たび翻然として悔ひ改めた上は、無垢清淨一點の曇りのない身體で、觀音の慈悲の光りが其處に現はれたものである、さういふ氣になつたか、然らば弟子にしてやらうと仰しやつた。佛法は寛い。貴賤男女を問はず唯だ一片眞實の心を問ふのである。それから其の盜人は御弟子にして貰ふて生れ換はつた様な立派な人になつたと本に書いてある。我々の解釋はさういふ意味で、言はゞ空也上人の慈悲の精神の現はれたが如くに、一たび觀世音菩薩の名號を唱へればわざ／＼勸めた譯ではないが知らず／＼其の慈悲に感化されて仕舞ふ。故にさういふ意味に、若し三千大千國土の中に滿つる怨賊があつても、此に一人の商主があつて、諸々の商人を引き連れて」云々。此の商主といふことは商隊の長といふことで、其譯は斯ういふのである。

昔しは商隊と云ふがあつて隊を組んで外の國へ貿易に出掛けたものである。さういふことが多かつたから、此の本文にもそれを引いたのである。今でも亞刺比亞あたりで見てもさうである。沙漠の熱沙の中を駱駝に乗つた商隊が能く通る。熱い砂の中を大きな駱駝がのそり／＼隊を組んで旅行して居

るやうな圖は洋行せられた方はどなたも御覽になつたであらう。あゝいふやうな勢で三四日も宿のない野原に、天幕を張つて泊るのであるが又往々水の無い地方に出遭ふことがある。其の時は駱駝の進み行く儘に、野原の中の水のある所まで行く。仕うしても水が見附からぬ時は、駱駝を殺して其の背にある瘤の中の水を飲むといふやうなこともある。中々我々の想像の及ばないやうなことが澤山ある。所が其の商隊にはそれ／＼長がある。それが商主といふので、商主が大勢の商人を引き連れて重寶を齎持する。この處も矢張り精神的に見て宜い。而して重寶とは物質的にいへば、金剛石、金銀、さういふ類の物であるが又一面には今いふ心の中の寶である。我々の大慈悲、大智慧、大勇猛といふ此の上もない所の寶である。事實の上から云ふと、其の寶を齎らし持つて險路を経過せんに、——險しい所の道を通るので、今ならば汽船あり瀛車あり、或は電車、自動車、空中飛行機などがあるけれども。昔はさういふ便利なものが無く、洵に險しい道を通つたのである。それは矢張り心の上の險しい道と見て宜い。世の中の險しい坂路よりも、人の心は猶ほ險しいと、詩や歌にもいふて居る。——其の險路を過ぎて行かんに、誰も頼みない有様、丸て無人の所を行くやうな有様である。其の時、其の中の一人が斯ういふことを皆に教へた。「諸々の善男子、恐怖を得ること勿れ」斯ういふ場合に誰しも恐れを生ずる心がある。西洋人の言ふた言葉に、哲學者でも深夜には半ば神を信する。平常哲學を研究して無神論を唱へて居る人でも、眞夜中の森とした時には、何か神があるやうに思はれる、人間

の弱點が斯ういふ所に現はれるのである。私始めさうである。行末の分らないとに就いては、什うしても何にかに動く、所謂疑心暗鬼を生ずるやうになる。徹底した自覺がなく大信仰が無いといふと、何んと力ひでも恐れる心は免れない。誰しもさうであらう。所が「一人の人があつて斯ういふことを言ふた。皆々恐怖を抱くこと勿れ、汝等應に一心に觀世音菩薩の名號を稱すべし」。けれども此れが當り前の人ならば、即ち徹底した悟りが缺けて居る並みの人ならば、怖るゝこと勿れといつても怖れるのである。夜分歩く時、哲學の講釋を聞いた人でもさうである。頭に木の葉が觸つてもびくとする。心の中に疑ひ恐れがあるに相違ない。小供がお化けや幽霊に恐れるのもさうである。昔は關東にお化けは出ないといつて力ひでもさうである。そこが其れ弱い所があるからである。例へば親戚の大事な人が亡くなつて、其の葬つた墓場に殘された生まゝしき白張提灯が、未だふら下つて居る所へ行つて、陰氣な風が吹いて芒の葉が動くのを見ると、誰しも足並みが違ふ。そこに何か恃む所があつたならばどうでせう。一心に觀世音菩薩の名號を稱するとか、又は觀世音菩薩には限らないが何か徹底して自分に卓爾として立つて居る所のもがあるといふと、大變に違ふ。一心不亂に南無觀世音菩薩の名號を唱へよといふ。一心といふ字が能く利いて居る。平生我々の心は散亂して居る。其の場合に頭も足も口も心も全然一團となつて現はれて、只々南無觀世音菩薩と稱するのである。けれども、これに就いて可笑しい話を思ひ附いたが、これが矢張りさういふ意味でない、たゞ口の上許り觀世音菩薩と

無暗に數多く唱へても、それで宜いものではない。昔し念佛婆さんといふのがあつて、何十年來南無阿彌陀佛々と幾萬遍唱へたか分らない程、念佛に凝つて居つた。さうなつて來ると、念佛屋といふ屋號まで貰つて曇天だといふては南無阿彌陀佛、雨が降り出したといふては南無阿彌陀佛、勿論晴天にも南無阿彌陀佛、善いにつけ悪いに附けて南無阿彌陀佛、それで仕舞には、内の嫁が怪氣深いといふては南無阿彌陀佛、今日來たお客は長尻だといふては南無阿彌陀佛、一向無意味にやつて居るから、傍からそれではいけぬといふた所が婆さんは一向聞き容れない、唯々南無阿彌陀佛と數多く唱へるのが自慢で、やがて七十餘りで死んだが、極樂土産が出来た積りて、幾臺かの車に名號をウンと積んで、それを持って彼の世へ出掛けた。處が行き當つて見ると、黒金の嚴めしい門が立つて、虎の皮の禪をしめた鬼が番をして居た。これは可笑しい、門が違つたかと思つて居る内に、鬼共がやつて來て、婆さん何か澤山持參したやうだが、一體それは何だと尋ねた、婆さんは、「貴君方喜んで下さい。これは私が七十年間唱へた阿彌陀様の名號で御座います。」鬼共は暫らく小首を傾けて居たが、あゝさうか、それは大變なものだ、併し一つ試験に掛けて見よう。そこで唐箕を持つて來てバタ／＼やつて試験をした。見ると付うもどの名號も薄つぺらで、フワ／＼風に飛んで仕舞ふ。大變持つて來たけれども止まるものが一つも無い。ハ、此婆さん此處へ來たのも當然であると思つて、猶段々調べて行くと、内にたつた一つ手堅いのがあつた。これが一つあるから、此處を轉じて良い所へ行けるかも知れぬ。



全體この一つは、婆さん仕うしたのだと聞くと。婆さん能く考へて思ひ出した。或年の夏、蠶を飼つて居つて桑摘みに行つたことがある。處が雲一つない晴天であつたに拘はらず、忽ち一天掻き曇つて、電の光、雷の音、凄じい天氣になつて、遂に雷が頭の上でごろ／＼と鳴りはためいた。其時思はず知らず、心から南無阿彌陀佛と稱へたことがある。其の時のがそれで御座いませう。さういへばそれに違ひなからうといふたといふ話がある。お道化話のやうであるけれども、さういふことが無いとも限らない。口で幾ら唱へても一心に唱へたものでなければ、今の話のように、虎の皮の禪をしめた鬼に調べられたら、皆な飛んで仕舞ふに違ひない。そこで一心といふことが大事である。一心に觀世音菩薩と稱する。本當に一心に唱へるならば、觀世音菩薩が其處に現はれる。それを實現するといふことが大變必要である。其の觀音の名號を稱するのである。「此の菩薩能く無畏を以て衆生に施す、」無畏といふのは畏れることがないといふので、淺草の觀音堂の額に施無畏とある。大ひに無畏を施す。これが智仁勇の勇氣に當るのである。觀音様は極く優しい女の懷ろに抱かれるやうに、誰でも普通に思つて居るやうだが、優しいのは其の一面である。又一面には大陽の輝くやうな明らかな智慧がある。又一面には惡魔外道を悉く摧服する鐵錘の様な大勇猛心を備へて居る。このことは後に至つて詳しくお話することにする。

「是の菩薩は能く無畏を以て衆生に施すが故に、汝等若し名を稱する者は、此の怨賊に於て當さに解脱することを得む」と斯うある。一心に名を唱へるならば、我が煩惱妄想は立ち所に消へ失せて、十年懲役終身徒刑も直ちに赦されて青天白日の身となることが出来る。前にあつたやうに、其の中の一入が斯ういつて皆に警告した、そこで大勢の商人が聲を發して南無觀世音菩薩と唱へた。心に念じて口に唱へるのは結構であるが、更に其を身に行ふやうにしなければならぬ。心に思ふただけでは徹底しない。身心一如に南無觀世音菩薩と其の名を唱へて行けば、即ち解脱することを得む。大變長くなつたから、簡単にお話を終へますが「無盡意、觀世音菩薩摩訶薩、威神の力巍々たることは是の如し。」初めにあつた通り、無盡意菩薩其の外大勢の方々が、觀世音菩薩の因縁を佛にお尋ねしたので、佛が無盡意菩薩に答へられたのであるから、此處でも無盡意と呼ばれるのである。「觀世音菩薩摩訶薩、摩訶薩と附け加へたのは丁寧にいふだけである。これは大心の衆生と翻譯される梵語である。菩薩摩訶薩、威神の力巍々たることは是の如し。」觀世音菩薩は唯だ優しい許りでなく、一切の怨賊一切の惡魔一切の外道一切我を迫害する所のものども、皆悉くそれに打ち勝つて仕舞ふといふ力が巍々堂々たること此の通りである。これは二つに分けて言はなかつたが、初め七難といふた中のこれが其の怨賊の難である。

第六回

○若有衆生多於姪欲常念恭敬觀世音菩薩便得離欲若多瞋恚常念恭敬觀世音菩薩便得離瞋若多愚癡常念恭敬觀世音菩薩便得離癡無盡意觀世音菩薩有如是等大威神力多所饒益是故衆生常應心念。

【和訓】若し衆生有つて姪欲多からむに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬すれば、便ち欲に離るゝことを得じ。若し瞋恚多からむに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬せば、便ち瞋を離るゝことを得じ。若し愚癡多からむに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬すれば、便ち癡を離るゝことを得じ。無盡意、觀世音菩薩は、是の如き等の大威神力あり、饒益する所多し。是の故に衆生は常に應に心に念すべし。

【講話】此れまでお話致した所は、七難と斯う一口に稱す。今日からお話する所は、三毒である。七難といふのは外から来る所の禍、三毒といふのは内から起る所の禍である。併し外からとか内からとかいふのも、一應さう申すのであつて、何時も申すが如く、お經には事釋といふて事實の上の解釋、又觀心釋といふて精神的の解釋と、斯う二様あることは屢を申す通りである。が假りに分けて見れば内外といふとが言へる。さて毎々申すのであるが、矢張り我々は觀世音菩薩の權化であるといふ、斯ういふ信仰が何時でも眞つ向にかざされて居らなければならぬ。觀世音菩薩はどういふ菩薩である

かと斯う考へて、今此に現はれて居る我々自身が、即ち慈悲なり智慧なり勇氣なりに於て満ち／＼して居る、觀世音菩薩は我々の身體に潜んで居られるといふ此の信仰が何時も心に満ちて居るならば、洵に有難味が其處にある。お互にお話する者も聽く者も、何時も其の心して居ればお話が能く分る。

「若し衆生あつて姪欲多からむに」云々。これは只今も申した如く三毒の中の第一番の姪欲である。矢張經文などの言葉は、我々が考へると極く質實な言葉を使つたものである。質實、質素、洵に飾り氣無い言葉を使つたもので、今ならば性慾とか生殖慾とか、廻り遠い言葉が澤山あるけれども、明らかに包み隠しもなく姪慾といふて居る。姪慾といふことは推し擴めて見ると、廣いことになるのであるが、大體易の言葉にもある通り「天地あつて萬物あり、萬物あつて男女あり、男女あつて夫婦あり、夫婦あつて父子あり、父子あつて君臣あり、君臣あつて上下あり、上下あつて禮義錯はる所あり、夫婦の道は久しからざるべからざるなり」。斯ういふやうな言葉が易經の中に出て居つたと記憶する。其の言葉の中に「然る後」といふ言葉が這入つて居るけれども、それは省いて申したのである。さういふやうな有様で、此の天地間、人類それ自身を初めとして一切のものを眺めて見ると、皆天地間にありと有らゆるものは、畢竟陽とか陰とか或は剛とか柔とか或は男とか女とか、言はゞ夫婦雌雄の現はれて、それはもう色々の學問の上から、例へば生理學上から眺めても宜い。心理學上から眺めても宜い。其の他植物學の上から見ても、動物學の上から見ても、それ／＼専門の學問から眺めて見て

も、何物か夫婦ならざるものはないのである。これが天地自然の正しい有様といふて宜いのである。處が疑ふ者があつて、佛教では動もすると五戒とか十善とかいふやうなものを立て、其の中には随分倫理に背いた行ひがあると斯ういふて居る人が昔から今まで澤山ある。つまり佛教では親子といふもの、縁も斷ち、夫婦の縁も打ち切つて仕舞ひ、唯だ獨身生活をして、而して曰れ一人を潔くするといふことを、佛が様々に誡めて居ると、昔から儒者が攻撃したものである。處がそれは其の一を知つて其の外を知らないものといふて宜しい。佛は男女の關係を、大體二つに別けて居る。男女の慾といふものを、邪姪、不邪姪と斯ういふ二つに別けて居る。邪姪は即ち姪慾と、さういふて居る。不邪姪は正しい慾で、これは差支無いことになつて居る。邪姪は佛教の戒法で極く八釜しくいふて居る。戒法の上では其の下に戒の字がある。佛の弟子には大變種類が多い、階級が非常に多い。其の中で比丘といふ一階級の者には、獨身生活を獎勵されて居る。生涯妻を娶らずに、道の爲めに世界を家として働けよ。斯ういふことを比丘に教へられて居る。つまり私共は此の比丘の端くれとして、斯ういふ風に佛から教へられて居るのである。處が一方には在家、比丘に對して在家の信者或は優婆塞ともいふが、其の在家の方に向つてはさういふことは、教へられていない。唯だ邪姪を致すことは相成らないと、斯ういふ誡めである。一夫一婦は固より天地の正道である。其の一夫一婦は生涯睦まじく相信ぜよ。さういふて居る、詩經にあるが如く、「關々たる雉鳩は河の洲にあり、窈窕なる淑女は君子の好

述」此の詩は文王御夫婦の睦しいことを歌ふたのであらうが、さういふ睦しい夫婦の間柄を續けようとするには、何うしても夫婦外の邪まの交りは慎しまなければならぬ。それ故に邪姪といふ邪まな男女の關係を佛は誡められて居るのである。邪まな男女の關係、即ち一夫一婦の外に女を求め男を求め、斯ういふのを佛は邪姪であるといふてお誡めになつて居る。處がさういふことは、今更ら説教を聞かなくとも能く分り切つたものであるが、段々詳しく考へて見ると、夫婦の中にも邪姪がある。佛様は中々さういふ内密のことにも詳しいので、一夫一婦といへば、何も其の間に邪まなことが無いやうであるが、其の中にも邪姪があると説かれて居る。それに就いて種類が擧げられて居る。例へば非時とか非處とか非支とか非量とか斯ういふのがある。これ許りではないが、先づこれに就いてお話し見ると、非時といふのは時ならぬ時の男女の交りである。非處といふのは處にあらざる所の男女の交りである。非支といふのは、總て男女はチャンと交るべき所の筋が極つて居る。其の以外の筋を使ふて交るのを非支といふ。佛は戒法にも餘程詳しいことを云はれるので、さういふ不合理な交りをしてはならぬといふのである。それから非量といふのは、分量に非ざる所の男女の交りといふ。分量といふても宜し。又節度といふても宜い。兎も角も度を超えた所の交りといふのである。これは夫婦の中にもあることで、斯ういふやうなものを算へて、それが邪姪であると佛は誡められて居る。故に姪慾と二字で讀んで仕舞へばそれまで、あるけれども、詳しく別けるとすれば、中々廣い意味に亘るの

である。兎も角も一夫一婦の大倫を空くせしめようと、佛は懇々として詳しくお説きになつて居る。今の教育上にもさういふことがあらうと思ふ。文化の進んだ國には、盛んに性慾の研究をやつて、もつと進んだ所になると、其の研究を教育の意味に於て會得せしめようと勉めて居る國さへある。つまりそれが會得されて居ないから、非時、非處、非支、非量といふやうなあらゆる邪淫を犯すことになるのである。戒法の上には、佛が人を誤らせないやうにと、斯ういふやうに懇々とお説きになつて居る。處が講釋として斯ういふことを言へば妙なものであらうが、實際斯ういふことは——所謂人間の性慾といはうか本能の衝動といはうか、中々之で制驭するといふことは、教育の上からでも又は宗教の上からでも、餘程心を眞面目にして考へなければならぬ。殷鑑遠からず、歴史を讀んで見ると、大抵事の起りが閨門である。僅に閨門の治ると治まらなるとのそれからして、亂れると亂れないとの道が分れて来るやうになる。古より英雄豪傑學者宗教家と云はれて居る者でも、大抵歴史を繕いて見ると、皆此の一事の爲めに身を誤り國を滅し、害毒を社會に流す者がなか／＼算へ切れぬ程である。歴史を知る者は分つても居らうが、先づ日本の英雄では豊太閤を思ひ起すけれども、豊太閤の歴史は、或點に至ると、矢張り此の一事の爲めに、大に誤つて居る。又忠臣の一人に算へて宜いであらうが、新田義貞は付うであるかといふと、矢張り此の點に於て鈍る所があつたやうな譯である。さういふ例は一々算へ立てると際限がない。西洋の方で見ても、シーザーであるとか、ナポレオンであると

か、皆此の一事に至つて大に惑ふて居るのである。さういふやうな有様であるから、例へば此の世間で何心なく謠ふて居る歌でもさうである。淨瑠璃でもさうである。大抵皆この事から發して居る。例へば會根崎心中などもさうである。あれ一つではない。近松の心中物と云はれて居るものは皆さうである。西洋でもシエロクスビヤのハムレットなどが、矢張りさういふやうな所から起つて居るのである。大抵の事柄が皆其處から出て居る。今日の新聞でも、雜報欄内を眺めて見ると、日々の記事が多くは皆それである。さういふ點に人間が多く身を誤るものである。處で佛はそこへ眼を着けて、三毒の初めの一つとして、此のことを此處でお説きになるのである。處が佛の眼の着け方は、心の方を先きにして形は次にして居る。それは四十二章經であつたと思ふが、或る若い坊さんが——それを一人の人も書いて居る所もある。兎も角誰でも宜い。——若い人があつて、付うも性慾を制することが出来ない。姪慾といふものは、付うも其の念が始終我を煩はすので、自ら氣を激まして、これでは佛道の修行が出来ない、女の爲めにもならない。如何にも我は淺ましいものである。と深く愧ぢ入つて自ら憤慨して、其の根を斷たうとした、と斯うある。利器を持ち來つて自分の精根を斷たうとした。それを佛がお聞きになつて、それは飛んでもない謬りである。我が教へは決してさういふことを奨めるものではない。決してさういふことを教へるのではないと云はれた。其の言葉の中に、「其の陰を斷ぜんよりは其の心を斷ぜよ」。其の今の男の根を切つて仕舞ふよりも、其の心——惑へる所の心を切つ

て仕舞へ、心をぶち切つて仕舞へ。と斯ういふので、佛の教は常にさうである。私の所へも色々の人が来て、此姪慾の一事に付て人間の最も偽らないことを言ふて来る者が多い。年老つた人もあれば、立派な學者もある。其の人は屹度眞面目な人に相違無い。私は色々自分の経験なり考なりを、其の人々に話したことが澤山ある。併しなから何をいふても、佛法では形は次ぎである。先づ其の姪心をぶち断つて仕舞へ。斯う佛が言はれたので、若い人が氣が附いて、今更の如く目が覺めて、それから大變偉らい人になつたといふことが四十二章經に見えて居る。中々これは容易のことではない。瞋る心、愚癡の心、姪慾の心は誰もあるけれども、此に其の慾を除け、姪慾を除けとあるは、其の姪慾の機械を無くして仕舞へといふのではない。そこが大乗佛敎の有り難い所である。誰が不具的生活をせよと勸めるものがあらう。これは大乗佛敎で獎勵しないのである。唯だ姪慾の心を轉じて慈悲の心とせよ。斯う書いてある。瞋りの心を以て直ぐに勇猛精進の心とせよ。愚癡の心を其の儘に轉じて智慧の心とせよといふのである。それは此に字面には現はれて居ないけれども、法華經の中殊に普門品には、觀世音菩薩が大慈悲を以て説法せられて居る所の意味、其の意味が籠つて居るのである。そこで第一番に三毒を擧げて——我が身を毒するものを三毒といふが、其の中の一番は姪慾である。「衆生若し姪慾多からむには、若し人々の中に姪慾の多きに苦しみ惱む輩があるならば、淫慾を断たうといふとに——其の方に力を用ゐなくとも宜い。唯だ此の方に力を用ゐれば宜い。即ち常に念じて觀世音菩薩を

恭敬せば、其の慾に離るゝことを得む。常念といふことは有難い言葉である。誰れでも一遍は念ずることが出来る。或は數回念ずることはあるけれども、繼續しない。宗教は或一事を幾度か繰返しくして行く所に最も有難味があるのである。我々は母の胎内に宿つて、それから生れ出たものである。四時の循環とか晝夜の交代とか、別に珍しいことはないが、其の中から有らゆるものが生み出され、あらゆる善きことが其の中から發育されて居る。故に淫慾を断てよといふのではない。淫慾あるが爲めに萬物は生育して行くのである。矢張り其のものから萬物が生ずるので、決して妄りに断ち切るべきものではない。唯だ若しそれが爲めに惱み苦しむならば、常に念じて觀世音菩薩——此の慈悲の心に満ちたる觀世音菩薩、勇猛精進の力に満ちたる觀世音菩薩、大智慧に満ちたる所の觀世音菩薩、斯う三つに分けたけれども、三つに限るといふ譯ではない。あらゆる大威神力を有つて居らるゝ其の觀世音菩薩を常念して、恭敬——これは吳音で讀むとクギャウであるけれども、漢音ではキャウケイ、恭しく敬ふといふ意味、——常念して敬ひ仰いで居るならば、即ち我れ自身が觀音の現はれであるといふ信念信仰を重ねて來たならば、其の慾に離るゝことを得るであらう。洵に有難い所と思ふかどうか？

「若し瞋恚多からむに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬すれば便ち瞋を離るゝことを得む」。これも中々どうも六かしいことである。瞋るといふことは、段々斯う偉らい人の傳記などを見ても——怒る心の

無い人は一人も無いやうであるが、唯だ優れた人は人に怒りを移さずして自分に向つて怒る。人を叱らずして自分を叱る。大に怒るには相違ないけれども、人に向つて怒りを移さない。我を叱り我を鞭ち、我に向つて誠めて居る。凡人とは其れだけの違ひがあらうと思ふ。だが併し、そこに怒るといふ言葉は能くいふことであるが、論語にも「一朝の忿りに其の身を忘れ、以て其の親に及ぼすは惑ひに非ざるか」といつて居る。どんなに善いことをして、あの人は感心な人だと云はれても、一朝怒つた爲めに折角の善いことを何もかも無くして仕舞ふとは能くあることである。經文を讀んで見ると、怒りを制する爲めに有難い金言が澤山ある。「怒りは功德の林を焼く」といふ言葉があつて、一度び瞋りの心を生ずれば、生涯積んだ功德も一朝にして無くして仕舞ふと佛は誠められて居る。處が之を身分の上でいふと、人に使はれる者よりも、人を使ふ者の方に誠むべきは此の瞋りである。人に使はれるものは、よしや心に怒ることがあつても之を發することの出来ない場合が少くない。人を使ふ人になると、容易に自分の怒りを人に移すことが出来るのである。身分ある人たとへば、學者、政治家、宗教家、富豪、貴族といふやうな、人を使ふ側の人は、最も此の一事を慎しまなければならぬ。斯ういふやうに懇々と古人の教えられたことが澤山ある。大抵日常の事實を見ても、何でもない怒によつて、身を滅し財を無くすることが珍しくない。小さい怒りになると、無教育の者又は考の無い人が、主人から叱られた爲めに腹を立つて、其の怒りを移すことが出来ないから、器物を毀すはまたしも家宅に

火を放けるといふやうなことがある。さういふことをやらない輩でも自ら首くるとか、水の中に飛び込むといふやうなことをするのは、みなこれ、怒の爲めである。瞋恚、愚癡、姪慾、此の三つが始終關聯して居る。姪慾の酷い者が、矢張り身を滅し財を失ふ、愚癡もさうである。處が古人の例を見ると――段々思ひ起すのであるが――後漢の時代の人に劉寬饒といふやうな人がある。有名な人である。非常に人格の高い、生涯其の憤つたことを一家族の内でも見たことがないと云はれた人である。何時も朝早く起きて沐浴し、それが済むと神佛に天下國家の泰平を祈り上げる。それから朝服を着て参内の時刻を待つて居る。さういふ風に萬事正しい人であつたが、或日朝服を着て居る膝の上につた時に、下婢がお給仕に出て來て、熱い羹物を、主人が恭しくキチント官服を着て居る膝の上にだら／＼と溢した。これは大變なことをしたと、下女が慌てて詫言をいふと、劉寬饒は顔色も變へずして、お前手を傷きはしなかつたかと云はれた。自分の朝服の汚れたことには少しも氣を留めぬ様子で、却つて下女の身をいたはつたのである。さういふ所に其の人の面影が現はれて居る。チャント晴衣を着て居る所へ、茶を一滴溢しても心を動かすのが普通の人情であるのに、官服を着て今や参内しようといふ間に、熱い羹物でそれを汚されても、其の方へは目も呉れずに、手を傷きはしなかつたかと、過を犯した者をいたはるとは、流石に有名な人だけあつて違つたものである。昔の人が瞋恚の心を轉じて心の修養をしたことは斯の如くである。さういふ例は外にも澤山ある。有名な物理學者

のアボジツトもさうである。アボジツトは大氣壓の眞理を發明しようと思つて、二十七年の間、毎日晴雨計を見つめて、其の結果を日記に書き入れて、非常に苦心して研究して居つた。其の位綿密に心を潜めて研究して居つた所が、新しく雇ふた下女が、或日先生の留守の間に、書齋の掃除をしようと思つて、書齋へ行つて見ると、机の上から部屋一面に何にか紙に書いたものが散らばつて居る。下女はそれが貴重な先生の研究書類とは心附かずに、斯んな反古紙が散らばつて居るのは洵に見苦しいといふ忠義立てから、皆それを纏めて火をつけて焼いて仕舞つた。處へ先生が歸つて來られて、部屋の様子を見て驚いて仔細を問ふと、下女は得意顔に、あんな汚ない反古紙を部屋中に散らかして置いては、掃除も出来ないもので困つたから焼き棄てましたと答へた。それを聞いたアボジツトは一方ならず失望落膽したけれども、決して怒りを移すことをしない。暫く手を拱いて考へて居たが、やがて徐々として靜かに下女に向ひ、此の頃雇入れた許りのお前だから知るまいが、あれは私にとつては大事なものであつた。然かし既に焼いて仕舞つた以上は致し方ないが、此の後部屋の掃除は私がするからお前はかまわぬでよい、今回の事は私の注意の足らなんだ爲めて私の落ち度である、おまへはナニモ心配せずとよいといつて、少しも怒りを發しなかつたといふことが、其の傳記に書いてある。さういふ例は外にも澤山ある。かのニュートンなどにも、それに似たことがある。これも有名な大學者であるが、かねてニュートンは可愛らしい犬を飼つて居つた。ダイヤモンドといふ名を附けて、始終可

愛がつて養つて居つた所が、何といふても犬のことであるから、致方のないもので、先生が留守の間に居間へ來て、机の上にある大事な書き物、即ちニュートンが苦心して考へて置いて置いた書類を、口に啣へて、噛むでく噛み破つて仕舞つた。そこへニュートンが歸つて來て、それを見て大變失望したであらうけれども、——我々どもなら直に怒る所であらうが、ニュートンは少しも怒らないで、犬に向つて言ふには、「成程貴様には大事な書類とも結構な書物とも知れまいが、是れは多年の苦心を以て私が漸く考へ出した大切の事柄の記録である。以後は決して此處へ這入つてはならぬぞよ」と、そつと椽さきから抱下したといふとが或本に書いてある。斯ういふとは、平生の修養がなければ中々出来るものでない。扱て裏からいふとさうであるが、表からいふと前の通りである。瞋恚がある爲めに、餘程偉らい學者や物識りでも、又財産や地位があつても、一朝の怒りの爲めに、直に名譽を損じ身を害したる類例は敢て少くない。故に大に慎むべきは怒りである。昔或る村夫子の所へ、物を識らない質朴な老爺が來て、「どうも私は何も知らないで困りますが、一生涯の守りになるもので、何にか手輕いことがありませんものなら、それを一つ教へて頂きたい」と云ふた、そこで先生は六かしいことを教へた所で仕方がないが、勘忍といふことは何事にも大切であるといふ所からして、勘忍の二字を書いた、これは生きた守り本尊であるぞ、一生涯の守りはたつた此の二字で足るぞといふて其書いたものを老爺に與へた。處が老爺は質朴で、所謂知らぬが佛であるから、「勘忍の二字と仰しやるけれども、

「かんにん」では四字では御座りませぬか」といふた。成程何も知らない人から見れば、「かんにん」は四字である。處が先生は怒つた。「勘忍といへば二字ではないか。さういふことをいふから、貴様は何も知らないと云はれるのだ、馬鹿者は仕やうのないものだ。丁寧と言へば、勘忍といふことは堪え忍ぶといふことであると更に教へた。さうすると老爺は、益々不思議な顔付で、「たえしのふ」といふと今度は五字になりますといふた。すると先生は眞赤になつて、さういふ馬鹿ものでは、もう俺は何も言はぬと、ぶり／＼怒つて仕舞つた。處が老爺は無我な顔をして、「貴君は怒りなざるけれども、堪忍といふ字を守れとあなたがいられるから、私は腹を立てませぬ」といふたとやら。おどけ話のやうであるけれども、其通りである。瞑るといふことは、如何なる大人學者でも、往々にして陥り易い穴である。故に、「若し瞑恚多からむには、常に念じて觀世音菩薩を恭敬すれば、恭ひ敬ふといふならば、「便ち瞑に離るゝことを得む、」瞑恚の心が本から離るゝのみならず、それが直に勇猛精進の心になるであらう。

「若し愚癡多からむに、常に念じて觀世音菩薩を恭敬すれば、便ち癡に離るゝことを得む。」愚癡といふことは、愚といふも癡といふも共に「おろか」なこと、これは何方かといふと、物を知らない考へ無い人に愚癡が多い。丁度我々の愚癡といふものは、此の智慧の光りを蔽ふ所の雲みた様なものである。仰いで空を見ても雲がかゝると、太陽の光りも月の光りも星の光りも一切見えぬ。さういふやうに愚癡の心があると、佛教で教へる所の三世因果應報の道理もさつぱり分らない。それが大體分ら

ないから、神も無い佛も無いと斯ういふ。君子はさうでない。天命を畏れ大人を畏れ聖人の言を畏れるといふて居る。畏れ敬ふといふ心が無かつたならば、其の人は放肆邪思到らざる所が無いと思ふ。人間は何か外に抵抗すべきものがあれば物の存在を知るけれども、一々神といひ佛といふても、別に何も抵抗するものが無いから分らないやうであるけれども、人間の小さな目には分るものでない。大なる不可思議なものがあるといふことは、昔から偉い人、靈眼を有つて居る人の皆認めて居るとである。今の世は調子が變つて來て居るから、たゞ僅かな學問技術の智慧が出來たといふて、それで宜いと思つて居る。これが皆愚癡の致す所で、神あることも分らないければ、佛あることも分らない。實在あることも分らない、三世因果應報の道理あることも分らない。さういふ者が即ち雲の如く霧の如き愚癡に目を蔽はれたものである。さういふやうな譯であるから、其の中から色々な邪見といふやうなさういふ結晶物が降つて來たり、貪、瞋、痴、我執、我見といふやうな電、霰、雪、又は電、雷鳴の起るのも皆それからである。其の佛の邪見といはれるのは、之を常見と斷見との二つに分けてある。斷見といふのは、一切因果の眞理を打ち切つて仕舞つた恐るべき考へ。常見といふのは、何時も此の通り人間界には山が聳え水が流れ、何時もかも月夜の如く何時もかも春の夜のやうであるといふ考へ。何方かといふと、斷見常見の其の間に多くの人が往來して居る。其の間に往來して、それが已れの見識を以て考へて居るやうに思つて居るけれども、佛はそれを邪見といふ。煩惱から起り所智障から起



る。それは皆愚癡といふものである。故に若し愚癡が多からむには、常に念じて觀世音菩薩を恭しく敬へば、癡に離るゝことを得んといふのである。どういふ鹽梅に恭しく敬ふかといふに、自分の信念で我は大慈悲、大智慧、大勇猛の力に満ちたる所の觀世音菩薩を一身に活現したるものである。我は觀世音菩薩の權化である。斯ういふ信念を以て恭敬すれば、便ち癡を離るゝことを得む。

もうさういふて置いて敢て差支なからうと思ふ。さうして置いて、「無盡意よ、觀世音菩薩は是の如き等の大威神力あり、饒益する所多し。この故に衆生は常に應さに心に念ずべし」。前にも申したやうに無盡意菩薩が多くの菩薩の總代となつて、佛に向つて觀世音菩薩の因縁を問ふたのであるから、此處に無盡意といふことがあるのである。無盡意よ、觀世音菩薩は此の如き大威神力がある。洵に恐るべき所の淫慾を斷ち切り、瞋恚を斷ち切り、愚癡を悉く焼き亡して仕舞ふ所の大なる威神力がある。言ひ換へれば、此の如く堅固なる所の威神力がある。「饒益する所多し」といふのは、觀世音菩薩の功德が一切衆生を利益する所が多い。「この故に衆生は常に應さに心に念ずべし」。始終自分に有つて居る觀世音菩薩であるから、暫らくも忘るゝとなく、常住不斷、心に念ずべし。其の心を以て家庭を治め、其の心を以て妻子に對し、其の心を以て婢僕に對して行くならば、家庭は常に春の海の如く、平和に長閑に治つて行くであらうと思ふ。觀音經の特色として、未來のことは餘り説いてない。死んで後ちどうなるかとか、さういふことは説いてない。人間の身體を棄て、どうなるものでもない。現在の男

女、其の儘にして置いて、而して皆な苦しみを離れ樂しみを得ることが出来る。それが此のお經の特色と私は思ふて居る。故に家庭に於ける教として、普門品が洵に能く出來て居るといふやうに私は考へて居る。

### 第七回

○若有女人。設欲求男。禮拜供養。觀世音菩薩。便生福德智慧之男。設欲求女。便生端正。有相之女。宿植德本。衆人愛敬。無盡意。觀世音菩薩。有如是力。

**和訓** 若し女人ありて、設し男を求めんと欲して禮拜供養せば、觀世音菩薩、便ち福德智慧の男を生ぜむ。設し女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女を生ぜむ。宿に徳本を植えて衆人に愛敬せらる。無盡意、觀世音菩薩は是の如き力あり。

**講話** 觀音經も段々お話致して來て、遂に此に至りましたが、此の前には七難と三毒といふことのお話を致して、それは初めをお聞きになつた方々はお分りになりましたが、言はゞ七つの難を轉じて七つの福となす、云ひ換へると、禍を轉じて福ひとなすといふのである。其の次は三毒即ち貪瞋

癡の三毒で、中には此の貪を淫慾として居るものもあるが、同じことである。其の三毒の迷ひを轉じて智慧となす、これも矢張り禍を轉じて福となすといふのであつて、それから遂に今日の所に至つたのである。今日の所は一口にいふと、二求章と稱する。二求といふのは二つの求めである。それは何であるかといふことが、此れからのお話である。

前述の如く難を轉じて易となし、毒を轉じて藥となせば我々の心といふものは、奇麗さつぱりとなる。そこで始めて此の二通りの願ひが叶ふといふ譯である。これは前々から度々私が申し上げたのであるが、私のお話するのは、觀世音菩薩の慈悲を身に體してのお話で、而して貴女方のお聞きになるのは、貴女方が取りも直さず觀世音菩薩の慈悲の現はれとしてお聞きになるのである。さういふ觀念を始終有つて居なければならぬ。つまりさういふ考で居る所で、我々凡夫と觀世音菩薩とが親しく出遭ふことが出来る。どちらかと申せば、慈悲と慈悲とが相接觸するのである。けれども、我々の地位からいふと、慈悲とは云はないで信心の信となる。菩薩の方からは願ひとなる。菩薩の慈悲の誓願力と我々の信仰力と出遭ふた所が、取りも直さず生きた觀音世菩薩の現はれといふものである。さういふ觀念でお聞きになつたならば、總て此の經文が解釋が出来ようと思ふ。

「若し女人ありて、設へば男を求めんと欲して禮拜供養せば、觀世音菩薩、便ち福德智慧の男を生ぜむ。」今讀んだ所は、私に考へさせるといふと、これは一つの胎教と見做して宜いと思ふ。胎教といふ

のは、御存知の通り胎内から教へて行くことである。教といふことは、つまり只今は學校教育といふて、學齡になれば初等の學校に入れ、段々進んで高等の學校に導いて行く。それも教育の一つとして大切な教であるけれども、凡そ教育といふものは、生れ出た後の教育は其必要が分つて居るが、其の以前に於ても教育しなねばならぬ。また世界の風に吹かれぬ前に、既に我々は何等かの教育を受けて居つて、而して生れ出て來たものである。其の意味からいふと、斯ういふ所が胎内の教と見て宜からうと思ふ。胎内に於ける教といふことは、教育家が講釋すると、教育的に胎教を色々に説明する。それは立派な説もあるが、もう一つ我々の希望を言はしめるならば、たゞ教育的である許りでなく、宗教的にも胎内の教を施して行かなければならぬ。それ故に之を胎教の御說法と見做して宜からうと思ふ。若しさう認めないで、たゞ皮相的に之を考へると、觀世音菩薩はどういふ菩薩であるか知らないけれども、何でも館屋が館人形を拵えると同様に、福德智慧の男でも端正有相の女でも。勝手次第に拵え上げる。昔から神が人間を作つて、魂まで細工したといふ話があるが、それと變りが無い。佛敎は科學的の道理に適はない教であると、斯ういふ風に見られるであらう。それは全く皮相から起る所の極く淺薄な考といふものである。宗教といふものは、どうしても智慧一偏だけのものではない。どちらかといふと、智慧と共に慈悲を重んじなければならぬ。世間の言葉でいふと、智に伴ふ情である。情意を能く噛み分けて行かなければならぬ。斯ういふ工合なれば、先づ能く子を思ふといふこと

は、女として一番先立つ所の考であらうと思ふのである。女許りでなく、言ふまでもなく男でもさうであらうと思ふ。我々は色々の務めを以て生れ出て居るけれども、我々の祖先が我々に良きものを遺して呉れた如く、我々はそれに倍して、もつと良きものを拵えて後世子孫に遺さなければならぬ。これはどうしてもそう考へなければならぬ。またさうでなければ、人間の務めとして面白くない。其の願ひを果さうとするには、どうしても良い人間を一人でも餘計にもうけなければならぬのである。そこで夫婦相寄つて其の因縁により、子供といふものが出来るのであるけれども、特に直接其の重任に當る人は、誰かといふと、どうしても婦人を推さなければならぬ。此の本文に若し男子ありと云はないで、女人ありとあるのは其の爲めである。開けない時代には、男子と女子と先天的に違ふと思つてゐた時代もあるけれども、さうではない。男も女も殆んど同等同位のものである。就中、子供を拵えるといふに至つては、直接に女の務めと謂はなければならぬ、特に日本では、昔から「敷島の岩戸神樂の昔より、女ならでは夜の明けぬ國。」などといふて居る。此の歌は意味の取りやうによつては妙なことに聞えるけれども、全く此の直接に子供を拵えることをいふたものに違ひない。又一休和尚は、御承知の通り滑稽な坊さんで、色々の狂歌を作つて居るが、其の中に「女ほど世にも尊きものはなし、釋迦も達磨もいよくと生む。」言葉は可笑しいけれども、全く其の通りである。重い責任を負ふて居るものは女である。昔から聖人賢人英雄豪傑といはれたものも、皆母の胎内を煩はして

生れ出て来たものである。女の責任は實に容易ならぬと謂はなければならぬ。元來私は家庭を有たないけれども、同時に色々の家庭を知つて居る。富んだ家庭、貧しい家庭、貴い家庭、賤しい家庭、其の他色々の家庭を知つて居る。それであるから、家庭の實情は能く分つて居るが、家庭の治まると治まらないのとは、婦人の力にある。殊に子女を教育し良き子供を育て上げるといふことは、男よりも婦人の責めに掛つて居ることが大變多いのである。昔からの色々の人の傳記などを讀んで見ても、母親の賢いものは皆立派な子供を有つて居る。それは理窟でも何でもなし、事實が證明して居る。故に婦人にあつては、第一に人の妻になると、先づ良い子を生まみたいでありませう、又さうでなければならぬ。それには、生み出した後に始めてどうしようとか斯うしよとかいふのではモウ既に遅い。我が胎内に一人の子供を宿した日より、言はゞ一種の教育の意味を有つて居なければならぬ。宗教的には何か其處に一つの信仰がなければならぬのである。それであるから、殊に歐米などの様子を聞いて見てもさうであるが、母親たる者で無宗教者などは殆んど一人も無いらしい。故に後には大哲學者になる人でも——無神論を唱へるやうになる人でも、又學問上から無宗教を唱へる人でもさうである、母の胎内に宿つた時は、宗教を聞きながら大きくなつたものである。無心な胎兒の時代にも、宗教的教育を受けて、而して此の世の中に生れ出て来たものである。私は暫らく歐米の家庭にも居たが、其實狀を見るに、どうしても斯うなけらねばならぬと思ふ。殊に觀音經といふものは、未來だ

とか冥途だとかいふことは、粟粒程もいふて居ない、全く現世の教である。現世の教であるのみならず、特に家庭に於て最も適切な教である。さういふやうな所から、今此に二求といふことを御説法になつて、子を生むといふ所から、斯ういふ考を有つて居なければならぬと説かれてあるのである。

「若し女人ありて、設し男を求めんと欲して禮拜供養すれば、觀世音菩薩、便ち福德智慧の男を生ぜむ。」——本文だけで見ると、何のこともないやうであるけれども、色々考へて見ると洵に有難い。これが度び／＼申す通り、御經を見る時には、何時も事釋、觀心釋——義釋といふても宜い、又理釋といふても宜い。事釋即ち事實の上から一遍眺めて見、それから觀心であるから更に心の上から一遍眺めて見なければならぬ。此處に現はれて居る男といふ字と女といふ字でもさうである。形に現はれて居る男、女は、言ふ迄もなく互に顔を突き合せて居るのであるが、もう一遍、觀心釋即ち精神的に眺めて見ると、男といふことは智慧を代表したのである。それに人格をつけて男といふ。女といふのは慈悲といふ意味である。それに人格をつけて見ると、こゝに現はれて居る優しい女の子となる。本來御經は活讀しなればならぬ。文句の儘では分らない。活きた眼を以て御經を見ようとするには、何時も心の上から眺めて見なければならぬ。さうして眺めると、男は智慧也、女は慈悲也、而して我々が此に禮拜供養する觀世音菩薩は、一面には慈悲の現はれてあり智慧の現はれてある。同時に又一面には、勇猛精進の現はれてある、而してこれが一つの心である。斯ういふ工合に見て行くとどんな六

かしい御經でも、チャント直ぐに分るのである。若し此に婦人があつて男を求めんと思ふならば、たゞ心で思ふただけではいけない。禮拜供養するといふのである。禮拜供養といふとも、六かしく字義をいふと、色々の禮拜があるけれども、我々が平生普通にやつて居る禮拜は、三遍づゝ禮拜するのであつて、其の三遍づゝするといふ釋は、三毒の汚れの心を去つて、而して清き三寶を崇め奉るといふ意味で禮拜するのである。供養といふことも、色々あるけれども、或は敬供養といふたり、或は經供養といふたり、又は利供養といふ。之を三供養といふのである。御經には色々これに就いて微細なことが書いてある。敬供養といふのは、寺を建てるとか立派な道場を立てるとかいふことである。經供養といふのは、御經を讀んだり御經を書寫したりすることである。利供養といふのは、即ち外の方で四供養といふ、飲食——食物であるとか、衣服、臥具、或は醫藥、さういふやうな供養である。そんなことは御經の文字を講釋する時には必要なことであるが、今此處では省いて置く。どうぞして良き男の子を得たいと斯ういふたならば、思ふただけではいけないから、之を實行に現はすのである。而して如何にするかといへば、禮拜供養を怠つてはいけない。誰でも良き子を産みたいと思ふ筈であつて、今日私が見た所でも、あの人は華族であるとか、或は富豪であるとか、高い地位があり、立派な肩書きがあるとかいふても、それはほんのうはべから見たのであつて、動もすると上流社會の家庭から、色々の不良なるものが現はれて來、色々墮落したものが現はれて來るのである。まして況んや

そのみならず、生んだ子が、生れながらにして片輪であつたならば、生れながらにしてそれが悪い性質を有つて居つたならば、生れながらにして白痴であり生れながらにして低能兒であつたならばどうしたものである。若しさういふことであつたならば大變な御心配であらうと思ふ。それであるから未だ生み出さない前に於て胎教として先づ教育せなければならぬといふのは、是處をいふのである。矢張り母親たるもの、其の心次第によつて、良き子を生むことが出来ようと思ふ。世間に遺傳説といふことがあつて、それに關したことが澤山あるが、其の邊のことを更に生物學的に眺めて見ると、青い葉の上に居る虫は、矢張り青い色をして居る。それを保護色といふ。又蝶々などは始終綺麗な花の中を飛んで居るから、綺麗な羽を有つて居る。其外總てさういふやうな有様である。母親が一念宗教の心があつて、其の心に生きた觀世音菩薩を朝夕禮拜供養して、而して善きことを口にし、善きことを身に行ひ、善きことを常に考へて居るならば、其の腹に宿つて来るものは、どうしても善い子でなければならぬ。教育の上から講釋したならば、立派な説明も出来るであらうが、私は宗教的にお話するのである。兎に角母なる人が一種の温かい慈悲深き聰明の心を以て、宿した子供を天然の佛たるやうに育て上げるといふことは、餘程大切のことであらうと思ふ。若し一人でも悪い息子が出来たならば、如何に立派な家庭でも之が爲めに傷つけられることになる。一家が一生悲惨な中に暮さなければならぬことになる。さういふ浮き目を見ることがある。一人

の子供の善悪で、影響する所が非常に大きいことを考へて見ると、容易ならぬ所のものである。それであるから、若し此に女人あつて、一人の男子を得たいといふて禮拜供養したならば、觀世音菩薩は便ち福德智慧の男を生ぜむといふのである。觀世音菩薩が子を作る譯ではない。子を作るものは女人である。

佛教では其の邊の解釋を一々因縁によつて明かにする。本來銘々因縁によつて生れ出て居るのであるけれども、茲には宗教的胎教の意味で解釋しなげねばならぬ。そこで其考へて願ひを致したならば、「便ち福德智慧の男を生ぜむ」と斯うある。世の中には福があつても徳の無い人がある。又徳があつても福の無い人がある。偉らい人になると福德共にある。偉らくなければ福も徳もない。處が福德があつても、智慧が無ければ如何ともすることが出来ない。男子としてはどうしても智慧が本領である。これと共に福德——徳行といふことが又男子としての本領である。今の如くにして願つたならば、便ち此の福德智慧の良き男の子を生ぜしめることが出来る。平たく言へば授けられるのである。之を事實の上でいふと、澤山觀音靈驗記などに現はれて居る。例へば法然上人とか、將軍田村磨とかの話は有名なものである。さういふことは一々擧げて言はなくとも、澤山ある例である。併し今は其の邊のことは畧して申上げませぬ。此の如く善きことを口にし、善きことを身に行ひ、善きことを常に考へて居たならば、必ず福あり徳あり智慧備はつた男が授かるであらう。

「設し女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女を生ぜむ。」と斯うある。端正といふことは、一口にいふと洵に缺け目の無い立派な顔貌に出来上つたるがそれである。顔貌が立派に出来上つても、又假令如何に美しくいふても、傾城や白拍子のやうな美しくいふのでは、徳が現はれない。そこで有相といふことが必要なので、婦道、婦徳といふものが姿形ちの上に現はれなければならぬ。それが女の品位として大切なものである。其の品位といふことを、此處では有相といふ文字に書いて居るのである。どうぞ一人の娘を得たいといふ願ひがあるならば、正しい心に正しい行ひ正しいことを口にして居れば、便ち端正有相の娘を生むことが出来よう。此の經文を見ると、男の方には禮拜供養といふことが現はれて居つて、女の方には禮拜供養といふ文字が現はれて居ないけれども、勿論其の意味はあつて、たゞ文字を略してあるだけである。顔貌といふことも、幾らか男の方にも加はつて居る。福徳智慧といふことも、又女の方にも附いて廻つて居るのである。此れ等はたゞ御經の言葉を略さんとした爲である。それで表には男は福徳智慧で、裏面には顔貌が伴つて居る。女は表面からは端正有相であるけれども、裏面からは福徳智慧が相伴つて居るのである。互ひ／＼に入り合せて居るのである。さういふ意味で「設し女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女を生ぜむ。」これも読み方によつては、「端正有相の女、夙に徳本を植えて、衆人に愛敬せらるゝものを生ぜむ。」と讀む者もある。私の讀んで居るのは普通の読み方である。即ち「設し女を求めんと欲せば、便ち端正有相の女を生ぜん」と句切つて

置いて、それから「夙に徳本を植えて衆人に愛敬せらる」と讀んで置く。其の生れ出た所の娘でも息子でも、それが一夜細工に觀世音菩薩が男でも女でも作るといふ譯ではない。即ち前に申した胎教の意味であつて、さういふ信心を有つて居なければ、其處に宿りたる所の男にもせよ女にもせよ、夙に徳本を植えて衆人に愛敬せられることが出来ない。人に愛せられ人に敬はれるといふことは、只其の人が愛くるしいとか、何とかいふ意味ではない。大に由つて來る所があることを説いたのである。夙にといふのは、今よりも前にといふことである。前にといふとは古くという意味で、ずつと大昔も中昔も又其の間の昔もあるが、兎に角人には根も無く葉も無くして他から愛敬せられるといふ事はなくして、愛敬せられるに就いては、必ずや深い／＼因縁があるのである。それは何であるかといふと、徳本を植えてあるといふのである。徳の本を植えて居るのである。我々はお互ひにたゞ人とといふと、母の胎内から生れ出で、墓場の土になる間だけ人間生命と思ふて居るけれども、人間の生命は、大昔から今日まで一貫して居る。其の中に若い時もあれば段々に年が寄り、果ては病氣になつて遂に死ぬるのである。所謂生老病死、大海の中の波見たやうなものである。或は交代して行く所の晝夜見たやうなものである。或は四時の循環するが如きものである。今生きて居ると思ふのは働らいて居る時で、死んだといふのは一時休息したものに過ぎない。一たび目をつぶつて仕舞へば、後は野となれ山となれといふて済むものではない。因縁和合して幾度びか隠れたり現はれたりして、無限に亘つて決して

其の間に盡さる譯ではない。遠い所を眺め深い所につけて見ると、人に愛せられて人に敬はれるといふことは、決してあだなことではない。昔しくに立派な徳の本を植えて居るからである。徳の本を植えて根が張り葉が繁つて居ればこそ、それが報ひ來て人に愛敬せられることになるのである。徳の本を植えるにも色々ある。六波羅密の布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を段々推し擴げると八萬四千の徳本となる。偉らい徳を植えつけるやうであるけれども、ずつと本に立ち返つて見ると、矢張り觀世音菩薩の現はれたる、慈悲、智慧、勇猛精進の力で、其の根底に向つて金剛不壞の信仰心を打ち立てたといふことに歸する、徳本の業は分けて見れば幾つもあるけれども、先づ此の信ずるといふ信の一字が大切である。信はあらゆる善根功德の母である。丁度母が子を生むが如くに、此の信仰を一心に打立つればあらゆる善根功德、何もかも是れより生れ出づるものである。それによつて見ると、徳本を植えるといふことは、正しき信の一字に歸するといふても、敢て言ひ損ひではなからうと思ふ。夙に徳本を植えて衆人に愛敬せられるといふやうな、さういふ良き娘を生み出し、さういふ良き息子を生み出さうとするには、此の信の一字を平生から大切に守らなければならぬ。

「宿に徳本を植えて衆人に愛敬せらる。無盡意、觀世音菩薩は是の如き力あり。」無盡意菩薩よ。さう心得よ、觀世音菩薩は此の通りの力がある。力といふことは、經文を調べて見ると色々あつて、赤ん坊の啼くのも力である。又は婦人は怒るのを以て力となすとも書いてある。妙な力もあるものである。

菩薩は慈悲を以て力となす。今こゝに觀世音菩薩は、即ち大慈大悲の願力を以て力となすのである。此の大慈大悲の願を以てなす所の力には、何ものも敵するものが無い。仁者は敵なし、仁心あるものには天下に敵するものが無いといふのと同じことである。大願力の中には一切衆生を抱かれてある。一切の世界は皆此の力の中に包まれてあるといふても差支が無いのである。觀世音菩薩は是の如き力があるぞよと仰せられたのであります。

### 第八回

若有衆生恭敬禮拜觀世音菩薩。福不唐捐。是故衆生皆應受持觀世音菩薩。名號無盡意。若有人受持六十二億恒河沙菩薩。名字復盡形。供養飲食衣服臥具醫藥於汝意云何。是善男子善女人功德多不。無盡意言甚多世尊。佛言若復有人受持觀世音菩薩。名號乃至一時禮拜。供養是二人。福正等。無異於百千萬億劫。不可窮盡。無盡意受持觀世音菩薩。名號得如是。無量無邊福德之利。

**和訓** 若し衆生あつて、觀世音菩薩を恭敬禮拜せば、福、唐捐せざらむ。是の故に、衆生皆應さに觀

世音菩薩の名號を受持すべし。無盡意、若し人あり、六十二億恒河沙の菩薩の名字を受持し、復た形を盡すまで、飲食、衣服、臥具、醫藥を供養せむに、汝の意に於て云何。是の善男子善女人、功德多きや否や。無盡意言さく、甚だ多し、世尊。佛言はく、若し復た人あり、觀世音菩薩の名號を受持し、乃至一時に禮拜供養せむに、是の二人、福、正等にして異なること無く、百千萬億劫に於ても、窮盡すべからず。無盡意、觀世音菩薩の名號を受持せば、是の如く無量無邊の福德の利を得むと。

——實は觀音經を講ずる前に當つて、和讃やうのものを異口同音に大勢の人が唱へることが出来るならば、それは良いことであらうと思ふ。併しながら、斯ういふことは此方から少しでも無理に強ふるやうになつては、どうも面白くないから、そこは銘々の御思召次第であるが、——此の間自坊の古倉の反故の中から斯んな和讃が出て參りました。誰が作つたのか今記憶しないけれども、斯ういふものが見附かつたから披露して置いて、ごつと素讀をして見ます、假りに他日此處で講話の始まる前に之を讀むとしても、調子が揃はぬければいけませぬから、御參考までに一通り讀むことに致します。文句は極く平易に出来て居ります。

歸命頂禮觀世音

昔は勝寶妙如來

未來は光明功德佛

十大願の海ふかく

今此の娑婆に示現して

生とし生ける者のため

大慈大悲の手を垂れて  
一の月のうつる如く  
三十三に身をわけて  
二求兩願も成就せり  
常々菩薩を念ずべし  
無量の福德集まりて  
畢竟梵音海潮音  
扱また行者の臨終は  
これ此菩薩を信ぜずば  
童男童女に至るまで  
南無大悲觀世音

種々に濟度を成し給ふ  
感應れいけん新なり  
十九の説法有がたく  
若し人現世は安穩に  
念彼觀音の其のちから  
春の晨に鳴く鳥も  
聞聲悟道の法のこゑ  
蓮の臺をさゝげ來て  
渡に船をいむならん  
念々疑ふこゝろなく  
奄阿盧利伽娑婆訶

譬へば萬の水澄みて  
聞くに法華の普門品  
七難三毒みな滅し  
後生も善處と思ひなば  
如何なる障りも除なり  
秋の夕べの虫の音も  
實にやあをぐも愚なり  
隨願往生とげしめり  
然らば高きも賤きも  
誠に頂らい致すべし

これだけであります。他日はそれが印刷でも出来たならば、御銘々に一枚づゝ分けたなら宜からうと思ふ。一寸此に披露して置いて、素讀して見たのであります。



「若し衆生あつて、觀世音菩薩を恭敬禮拜せば、福唐捐せざらむ。何時もく繰り返して申上げるこ  
 とであるが、苟も我々が觀世音菩薩に親しくお目に掛らうと思ふならば、全體我々は何ものであるか、  
 我は即ち觀世音菩薩の權化であると、斯ういふ觀念を常に持つて居なければならぬ。今までも申す通  
 り觀世音菩薩といふは、即ち大慈悲、大智慧、大勇猛心、——智慧と慈悲と勇猛精進の力との其の現  
 はれが即ち觀世音菩薩である。其の觀世音菩薩の現れが、直ちに即ちこの我々であると、斯ういふ確  
 かな自信力といふものを常に持つて居なければならぬ。それを以て昔から色々様々の功德靈驗が現は  
 れるのである。今までもお話し致して來た通り、初めに七難といふことがあつた。其の七通りの難儀  
 を轉じて、それを直に七通りの幸となす——七難を轉じて七福とする。世間の言葉にいふ通り、禍ひ  
 を轉じて福となすといふことが出来る。それは何によつてさうなるかといへば、詳しくいふと、願ひ  
 と信心との力である。それで七難を轉じて七福となす。其の次ぎは三毒を轉じて三徳となす。色々言  
 ひ方もあるが、我が心を害する所の三通りの毒、それを轉じて直に三通りの徳となす。斯ういふこと  
 がある。それは初めからお話し致した通り、七難三毒といふことである。それから二求といふのがある。  
 二つの求めといふことで、良き男の子、好き女の子の二つを求めて、而して其の願ひが満足せられる。  
 斯ういふやうな靈驗は昔から澤山あるが、皆な此の心より轉じて來たもので、自分の信する力によつ  
 て、此の如き功德因縁を自分で生み出すのである。丁度母親が子を生むが如くに、什んな良い子でも

皆な我から生み出だす。斯ういふことを申して來たのである。茲に於てか觀世音菩薩は此の位の廣  
 大なる力があるのであるから、今ま若し衆生あつて、觀世音菩薩を恭敬禮拜すれば、福唐捐なからん  
 といふのである。唐捐といふことは、字の通り唐は空しくといふこと捐は捨つると斯ういふ。エンと  
 も讀みケンとも讀む場合がある。空しく捨つることなからんといふことは、平たくいふと無駄ではな  
 いといふことである。若し衆生あつて——衆生とは我れ人許りではないが、先づ人を重にして、今日  
 生けとし生けるもの、誰でも觀世音菩薩を恭敬禮拜すれば、恭敬禮拜といふ文字は能く分つて居る  
 が、恭敬は恭しく敬ふといふことで、而して禮拜は拜むといふこと。それを文字上から詳しく考へる  
 と、初めの七難の所では、觀世音菩薩の御名を唱へんと斯うある。それから三毒二求の所に於ては、  
 觀世音菩薩を心に念ずると、斯ういふ工合に書いてある。此處には念ずるとは云はない。又御名を唱  
 へるとも云はない。唯だ恭敬禮拜せばとある。之を佛教家の用ゐる言葉に當て嵌めて見ると、身口意  
 ——三業の功德といふことになつて居る。心に念ずるといふのは、即ち身口意の意である。御名を唱  
 へるといふのは、口の業。身は身の業で、恭敬し禮拜することは身體で行ふ。心に念し、口に唱へ、  
 而して身體に於て親しく恭敬禮拜する。斯ういふことである。恭敬禮拜するといふは、たゞ觀音様を  
 向ふに立て、置いて、而して我が身體を以て幾度か拜み禮拜するのであるけれども、佛教に於ては凡  
 そ七通りに禮拜を分けてあるといふことが經文に出て居る、斯ういふ所の禮拜は、平等實相の禮拜と

いふ。平等實相といふことは、平生の言葉に餘り用ひないことであるが、一寸言ふと、平等は平らか、同様の意味で、實相は眞實の姿と書いてある、其の心で向ふに崇め立てしあるところの、諸佛なり、菩薩なりを禮拜する。表面からいふと、我と彼であるが、我れ我れを忘れ、彼れ彼れを忘れるのである。彼は此れに向つて禮拜するといひ施すといふさういふ心を忘れて仕舞ふのである。願信一如で、願ひと信心とが一體になつて、即ち一心不亂にすつと成り來つた所、「實相平等の現はれを禮拜恭敬する」といふ。斯様な心持ちであるから、心と身體がびつたり一つになつて來る。其處に大に味ふべき所があるであらうと思ふ。

古歌に「唱ふれば我れも佛もなかりけり」とあるが、さういふ有様でたゞ南無阿彌陀佛である。此處では即ち南無觀世音菩薩である。南無觀世音菩薩と、斯ういふ。さういふことは、自覺して居ない人から見ると、たわい無いやうに思ふかも知れぬけれども、洵に力あり意味あることである。それであるから、たゞうはべから佛敎を眺める人は、佛敎は偶像禮拜敎である。佛敎徒は偶像禮拜者である。さういふ工合に見て仕舞ふから、佛敎にとつては誠に迷惑千萬な話である。然るに今いふ平等實相の恭敬禮拜といふことに至るといふと、例へば、向ふに崇めてある恭敬する佛が、たとへ石や金で作つたものに過ぎないで、而も其の中には手の抜けて居るものもあり。半分鼻の缺けたものもあるといふても之を平等實相の上から見ると、ちよつとも差支がない。向ふに立てたる佛様なら佛様と觀音様なら觀音様と自分とがびつたり一つになつて、其處にちつとも別け隔てがない。此の如くに恭敬禮拜するならば其處には生きた佛様生きた觀音様が現はれて來るのである。それであるから、佛敎に於ける禮拜は偶像禮拜などいふ意味とは大變違ふものである。斯うなつて來ると、我が身を初めとし總てのものが、悉く佛様なり觀音様なりの大慈悲の現はれ、大智慧の現はれ、大勇猛心の現はれでないことではない。斯うなつて來るところが世の淺見の學者などが佛敎を誹る場合には、さういふ所を見て呉れないで、たゞうはべから眺めて彼是言ふて居るのである。そんな事で敵かれても踏まれても、我が佛敎ではちつとも痛くない。何ても恭敬禮拜を身體で實地に行ふ、此に心を据えなければならぬ。其處に願信一如の境涯があるのて、洵に有難い。併し斯ういふことが經文に書いてある。佛在世の時に出家した坊さんが一人あつた。其の坊さんは一向深い學問もなければ、餘り智慧のあつた方でもない。どつちかといふと、正直一方といふ人であつた。處がその時分には、聲聞乘の人の悟りには色々階級が極つて居つて、例へば羅漢の境涯を得るには、初めは須陀洹、斯陀含、阿那含それから阿羅漢、斯ういふ風に悟りを開く順序がある、順序によつてそれ々の資格があつて、低い所から高い所と段々に攀ぢ上つて行く。決して一足飛びに大乘の方面に行かれるといふやうな譯ではなかつた。其の坊さんは、どうしても羅漢の境涯を得なければならぬと熱心に思ひ詰めて居つた。たゞ羅漢といへば、よく平生でも人がいふて居る言葉であるが、それがどんな人を指していふかといふと、羅漢は一體梵語

觀音經講話

のアラハツ——之を翻譯すると、殺賊といふことで、盜人を殺すといふ意味になる。さういふと、何か警察官か監獄の役人のやうに聞へるけれども、そんなものではない。我が心の中の一切の惡念妄想、此の煩惱の盜人を殺し盡した人、其の境涯に至つたものを殺賊といふのである。其の他羅漢の意味の翻譯は二三通りあるけれども、他は省いて申しませぬ。さういふ境涯である、處が今道心のこの坊さん、極く正直な寧ろ愚直な方であるが、どうか羅漢の悟りを得たいと思つたけれども、何分一足飛びに行かれないから、人に頼んで手引きを得たいと思つて、或時若い他の佛弟子達の大勢集まつて居る所に行つて、「私はどうしたならば悟りが開かれようか、悟りを開いて羅漢の境涯を得ようと思ひますが、如何にして宜いか」と、洵に正直正面で相談した。處が若い人達といふものは何時でも左様だが輕はづみなものであるから、あいつは何も知らない癖に、羅漢の境涯を得たいなどは、分に過ぎた大望である。一つ愚弄してやれといふので、「宜しい羅漢の境涯は、我々が得させてやらう。それには先づ、手を合せてお辭儀をして、じつと慎んで、何でも此方する通りになつて居れ。」斯う若い人達がいふた。そこでどうしたかといふと、若い人達は手毬を持つて來て、「羅漢の境涯を得るには、初めに須陀洹の境涯から、段々に順序を履んで行かなければならぬ。我々がそれを一つ／＼得させるから、其の積りて有難く思へ」といふて、持つて來た手毬を以て、其の今道心の坊さんの頭を力任せにボンと毆打つてソラ須陀洹向だ、又ボンと毆ぐつてソラ須陀洹果だ、ソラ斯陀含向だ、ソラ斯陀含果

だ、阿那含向だ阿那含果だとボン／＼やつた、今道心の坊さんは、何だか譯は分らないけれども、洵に有難い、洵に恭しげないと只一心不乱に直ッ正直に受けた。さうすると、若い人達は更に其手毬を以てソラ今度は阿羅漢向の境涯を得させるぞ、ボン、どうも有難い。今度はいよ／＼阿羅漢果の境涯を得させるぞといつて、大きくボンとやつた。其時に其正直坊さん、不思議に阿羅漢の境涯を得た、之を支那風の口調でいふと、豁然として大悟した。といふのは、學問でも理窟でもなく、坊さんが願信一如に、親しく這入り込んだからである、斯ういふ話が經文に出て居る。今觀世音菩薩といふても若し信念の無いものから見れば、これに向つて頭を下げるのは何であるかといふが、それは親しく觀世音菩薩の慈悲を我々自身の相出遭ふた處に、恭敬禮拜したならば、其の功德は無量無邊、大きき測るべからざるものがあらう。斯ういふ所が有難い。動もすると、禪宗の坊さんは拜むことも入らない、禮拜恭敬をしないのが悟りを開いたものであるとか。坊さんは悲しい時に涙を出したり、嬉しい時に笑つたり、さういふことはしない筈である、それが禪宗坊さんの眞面目であるなど、如何がはしい坊さんの大言壯語するのを見て、大乘佛敎を誤解して居る者の中には、それを悟りを得たものゝやうに考へて居るものもある。識者から見ると、こんな馬鹿げたことはない。若しそれが大乘佛敎であるならば、實に非宗敎的、非倫理的非常識的の甚だつまらないものである。此れは餘程細心に考へなければならぬ。もう一つ例を擧げると、これも有名な話であるが、黄蘗の希運禪師、即ち我が宗祖臨濟禪

師のち師匠さんに當る人、此人が二六時中常に能く禮拜した、私も支那へ行つて實地に見たのであるが、あちらで本式の最敬禮をやる時には「腰を曲げて、敷瓦の上でもタ、キの上でも此額を持つていつてコッソリとやる。夫が永年やつてゐる内には此の額に瘤が出来る。ところが黄蘗禪師は宗旨の上にも實に大機大用を備へた人であつて、實に非凡な人であるにも拘はらず、毎朝々々佛の前に行つて、何か唱へては禮拜をする、其頃大中といふ人が居つたが、此人は後に宋の眞宗皇帝となられた方で、其の頃は太中といはれて、禪宗の坊さんと一緒に修行して居られた。其の太中が、或時和尚の禮拜を見て、黄蘗和尚はあれ程の大機大用があるにも拘はらず、そして又平生佛に着いても求めなると、斯ういふて居りながら、禮拜をするとはどうもをかしいと。そこで、黄蘗和尚に斯う尋ねた。「佛に着いて求めず法に着いて求めず衆に着いて求めずしかるに禮拜して何を求めるのでありますか。」すると黄蘗和尚、佛に着いて求めず法に着いて求めず衆に着いて求めず常に禮拜することは是の如しと答へられた、そこで太中が何も向ふに就いて求めることがなければ、禮拜するに及びますまい。(一)寸言ひさうなことであるが、さうすると、黄蘗和尚はことごとくしく講釋しないで、直ちに大きな手を差出して、太中の頰筋をビシヤリとやつた。此處では哲學的講釋や理屈ではオツ付かぬ。すると太中が「大難生、乏は手あらな、といふと、黄蘗和尚、この眞箇禮拜の境涯に向てなんの處だの細だのといふことがあらふか。」といふて又々ビシヤリとやつた、斯ういふとが有名な話であるが、これが洵に有難

い。今のなまかな禪者は佛を拜むとか崇めるとかすると、何とかかんとか云ふであらうが、中々さうではない。本當の禪定佛法の境涯は、何時もいふ通り、意は毘盧頂額を踏むといふて佛の頭の上をも土足で踏む程に志は高く持つてゐても、其と同時に日常の行は鼻垂小僧の足許をも禮拜する位に卑近な實地な行をする。それが禪坊主の實行方法である。それで始めて大乘佛法の全き境涯が現はれるのである。

「若し衆生あつて、觀世音菩薩を恭敬禮拜せば、福、唐捐なからむ。」初めに七難三毒二求を擧げて來たが、有らゆる福は又此にある。恭敬禮拜は決して無駄にはならない。この故に衆生、即ち生さとし生ける所の人は、觀世音菩薩の御名を唱へて、恭敬禮拜すべし。無盡意——又呼び出しになつて居る。無盡意菩薩は大勢の人々の代表者であるから、何時も斯う呼び出しになつて居る。無盡意よ、「若し人あつて、六十二億恒河沙の菩薩の名字を受持し、復た形を盡すまで、飲食、衣服、臥具、醫藥を供養せむに、汝の意に於て云何」これは經文の言葉で、チャンと申す所が極まつて居つて、四少の功德の比較、即ち四多四少とは、四つの多いこと、四つの少いことで、それを比較して説かれたのである。何が多いこと、少いことであるかといふと、一つは福田。福田とは佛の施されたる福田で、百姓が田地に種を播けば、秋豊るが如くに、佛は禮拜供養すれば必ず福德を興へる。丁度田地から穀物が上ると同じであるから、福田といふのである。即ち佛菩薩の福田である。それからもう一

つは持名、名を保つといふことである。此の福田を持名する。それから時節、即ち時である。四番目は供養四供養といつて四通りの供養がある。本文にもある通り、飲食、衣服、臥具、醫藥、これが四通りの供養である。最初から數へると、第一福田、第二持名、第三時節、第四供養、と斯うなる。其の一つは多い福田、多い持名、多い時節、多い供養で、もう一つは、極く少い所の福田、極く少い所の持名、極く少い所の時節、極く少い所の供養。斯ういふことである。それを較べてお説きになつたのである。無盡意よ、若し人あつて、六十二億恒河沙のといふ、此の恒河といふのは、今はガンヂス河といふて、これは印度に於ける四大河の中の大きい川である。川も大きい、其のまた川の眞砂の數であるから、仲々大變なものである。大かた誰も數へたものは一人もあるまい。其の數知れない眞砂が六十二億——門外漢などは佛教といふものは、斯ういふ空想的な宜い加減のことをいふて、俗にいふ大法螺吹きのやうなことをいふと思ふかも知れぬが、さうではない。これは觀心釋即ち精神的解釋からいふと六十といふのは、所謂六大——地、水、火、風、空、識といふもので、それから二億といふのは、身體と此の心とである。斯ういふものを標準として六十二億といふ數を擧げるのである。何時もいふ通り、精神的には斯ういふ解釋をするのである。又事釋即ち事實的にいふと、今お話したやうに、ガンヂスの川の眞砂を、六十二億程も合せた大多數の數である。故に大きいことをいふのは趣意でないけれども、今までの多いこと、少いこと、を較べる爲めに、斯ういふ數を擧げたのである。

若し人あつて、六十二億もある恒河の其の眞砂の數——大變な數である、それ程多い所の菩薩の名字、勢至菩薩であるとか、地藏菩薩であるとか、普賢菩薩であるとか、色々變つた菩薩の名字——名前である。其の名字を受持し、而して名前をお唱へ申して、而かも形を盡すまでといふのであるから、生きて居る一生涯の間、色々供養する。たゞ禮拜——拜む許りでなく、飲み物を施し、食物を施し、寢る時の臥具を施し、病氣に用ゆる醫藥を施し、有らゆる供養をして、其の長い間勉めるといふならば、汝の意に於て如何、無盡意よ、こなたは何と考へるか。是の善男子善女人、功德多きや否や。斯ういふ數へ切れない程の菩薩の名前を受持し、一生涯の長い間、斯ういふ供養をしたら其の徳といふものは多いと思ふか、少いと思ふか、どうであるか、(言ふまでもなく廣大無量である)無盡意申さく、仰せまでもなく、甚だ多し世尊。斯う答へた。すると又佛は少い方をお擧げになつて、若し復た人あり、今度は色々の菩薩の名ではなく、即ち六十二億恒河沙の菩薩の名字ではなく、たつた一つの觀世音菩薩の御名を受持し、乃至禮拜供養せむに、此の一時といふのは、ホンの一時間といふ意味ではなく、たゞ一念といふても宜い、たつた今此の時といふても宜い。極く僅かな時間の間、禮拜供養したならばどうだ。此の二人の福、正等にして異なることなし。初めは大變廣大のことであり、今は極く簡單なことであるが、即ち四通りの、福田、持名、時節、供養、それが多いと少いと大變事が違つて居るけれども、當人の得る所の幸福は、正に等しうして寸分も功德に違ひは無い。斯ういふのである。併

しながら、素人にはチトおかしなことに考へられるかも知れぬ。どうもわかりにくいと思はれるかも知れぬ。何故といふに、我々は比較的片一方は良いといひ、片一方は悪いといふ。又片一方は佛であり、片一方は凡夫である。一方は迷ひで、一方は悟りである。一つは清らかであり、一つは穢れてある。それが即ち解しにくい所であると思ふ。併しそれには色々昔の人が解釋をして居るが、私共の調べた所に依ると、天台大師のいふには、今擧げた方十二億恒河沙の佛といふのは、どれも此れも一人の觀世音菩薩の分身である。名こそ違へ、數こそ違へ、總して觀世音菩薩の平等實相の現はれである。大智慧、大慈悲、大勇猛心の本體の現はれである。それが場合と時によつて、或は普賢菩薩として現はれ、或は地藏菩薩として現はれ、或は勢至菩薩として現はれるといふやうに、色々様々の佛や菩薩になつて現はれるのであるが、つまるところ、一つの觀世音菩薩に外ならない。如何にせん、我々は數の多少によつて見やうとするのであるから、賤しむべき心を起すのである。天台大師はさういふ工合の解釋である。色々古人には、解釋しようとして種々の物を持つて來てくつ附けたやうな話がある。例へば、如何に大勢の菩薩方の名前を唱へようとしても、心にはさう／＼唱へられるものでない。唯一心不亂に唱へる上は、功德は等しいものである。斯ういふ意味に解釋して居るものが澤山あるけれども、簡單明白でない。それなどよりも、天台大師の見る通り、元來觀世音菩薩は、無量無邊に形を換へ、手を換へ品を換へて、此處彼處に現はれて居る。是れから後の本文にもある通り、三十二相色々様

々に身を現じて、子供にもなれば、女にもなり、居士にもなれば婆羅門にもなる、比丘尼にもなる、さういふやうに色々の相に現はれるのである。それ故にこの二人の福正等にして異なることなし。それのみならず、時間からいふならば、百千萬億劫の時間、この劫といふのは長時間を指して、いふのである。經文の中に、或土地に四十餘方里の大石があつて、一千年に一回づゝ、其の石の所へ天人が天降つて來て、薄絹のやうな柔かい羽衣を以て、一遍づゝ其の石に觸はる、さういふ風に千年毎に一度づゝ觸つて行く中に、段々其の石が磨滅して仕舞ふ。其の時を劫といふので、其の劫が百千萬億といふのであるから、大變な長時間である。處が觀世音菩薩を念じた其の功德といふものが廣大無邊にして、窮め盡すべからざるものである。無盡意よ、觀世音菩薩の名號を受持すれば、此の如く無量無邊の福德利益を得るぞよと、斯う仰せられたのである。本文から見ると、極く易い文字許りであるが、色々深く考へれば考へる程、觀世音菩薩の廣大無邊なることが感ぜられる。

第九回

○無盡意菩薩。白佛言。世尊觀世音菩薩。云何遊此娑婆世界。云何而爲衆生設法方便。之力其事。云何佛告。無盡意菩薩。善男子。若有國土

衆生應以佛身得度者。觀世音菩薩。即現佛身而爲。說法應以辟支佛身得度者。即現辟支佛身而爲。說法應以聲聞身得度者。即現聲聞身而爲說法。

**和訓** 無盡意菩薩、佛に白して言さく、世尊、觀世音菩薩は云何か此の娑婆世界に遊び、云何にして衆生の爲に說法す、方便の力其事云何。佛無盡意菩薩に告げ給ふらく、善男子、若し國土の衆生ありて、應に佛身を以て得度すべき者には、觀世音菩薩即ち佛身を現じて而も爲に說法す。應に辟支佛身を以て得度すべき者には、即ち辟支佛身を現じて而も爲に說法す。應に聲聞身を以て得度すべき者には、即ち聲聞身を現じて而も爲に說法す。

**譯語** これから以下三十二應身に就て御話するのであるが、無盡意菩薩が、佛即ち釋迦牟尼如來に向つて申されるには、「世尊よ、斯う呼び掛けて置いて、觀世音菩薩は如何にして此の娑婆世界に遊ぶかと御尋問になつた。——此の娑婆といふのは梵語であつて、此方の言葉に翻譯すれば、忍土といふことである。今日我々が現在生息して居る此の世界といふものは、四苦及び八苦の世界といふても宜い程のもので、四苦といふのは即ち四つの苦みで、四つの苦みといふのは、生老病死の事である。凡そ世の中に生れたものは必ず死ぬる。又健康であるといふものも、何時かは病氣に罹ることを免れな

ら。若しといふて居る者も、直きに衰老の境に陥つて仕舞つて、其次には死ぬる。是が生老病死といふもので、之を稱して四苦といふのである。我々が此の世界に居つて、最も希望する所のものは常樂我淨である。此常樂我淨の境涯に居るのを以て、人間の極樂なり幸福なりと申して居るのである。けれども、思ふことがさう／＼思ひ通りにゆくものではなくして、つまりどうか斯ありたいといふて居る内に、日々夜々時々刻々に皆な死に近づいて行くのである。我々が血氣盛な時代には水火猶辭せずといふ勢があるが併し夫も束の間で直きに年が寄つて仕舞ふ。我々は洵に健康である百までも生きる、百二十五までも生きるといふて居つても、何時病魔に襲はれるか分らない。遂に此の死滅の境涯に至つて仕舞ふ。さうして見れば、我々の希望といふものは常に後から／＼となつて、外れて仕舞ふものであるから、此の間を通つて行く我々の心持は、洵に苦しい譯のものである。さういふ有様を稱して四苦といふ。此の四苦に更に四つ加へたものが八苦である。其の四つといふのは、第一が會者定離。會ふものは必ず離れる。それが一つの苦である。どうぞして親子夫婦兄弟一家團樂として何時までも離れともない。我々の願ひとしては常にさうであらうけれども、色々の事情の下に、親子夫婦兄弟は段々分散して仕舞はなければならぬ。これが世の中の常である。第二が怨憎會苦。どうぞして逢ひともない、我と彼とはどうしても心が合はないから、さういふものに逢ひともないと思ふて居るやうな、さういふ言は、仇、敵とかいふものにも、朝な夕なに顔を合はさなければならぬやうなことが

屢々あるものである。第三が求不得苦。我々の求といふものは限りのないものである。第一我々人間は先づ智識慾といふやうなものを有つて居る。世間に有りと有らぬものを皆知り得たいといふやうな、何か知ら慾望を有つて居るけれども、到底宇宙間の萬物、悉く其の物を知り盡すといふことは出来ぬ。一つ知り得たならば、更に第二の疑問が起つて来る。それが分れば又第三の疑問が起つて来るといふやうに、知り得る範圍が廣ければ廣いだけに、猶更ら分らないことが多くなつて来るものである。さういふことが矢張り一つの苦みの本である。又人間は名利慾といふものを有つて居る。我々には成るべく名の達せんことを欲する慾望がある。又利益の益々増進せんことを希ふ慾望がある。此の名の愈々達せんことを願ひ、利益の益々多からんことを望む心は、誰も皆有つて居るけれども思ふ通りにならない。それが一つの苦みである。それから生存慾。即ち此の世にながらへて居りたい、何時が何時までも此の世にながらへて有らぬ幸福を享受したいといふことは、萬人の願であるけれども、さうはいかない。常に天地間の現象といふものは、晝夜の交替するが如く、四時の循環するが如く、我が身の上に生老病死が時々刻々に逼り來つて、恰も後から何物か我を追ひ掛け來るが如くに、我を追ひ詰めて居る。さういふやうな有様で、遂に死滅になつて仕舞はなければならぬので、到底何時までもながらへることは出来ない。斯んな鹽梅で例を擧げて見ると、智識慾とか名利慾とか又は生存慾とか、さういふ慾望が次から次へと起つて來るけれども、それが矢張次から次に滅び去つて仕舞

ふといふやうな譯で、到底天が全きを人に與へないといふのが如く、兩手に花を持つやうな思ふ存分のこととは、我々が如何に求めても求め得られるものでない。さういふことが大なる苦みである。第四が憂悲惱苦、是は總ての苦みを集めたもの。常に我々は何かといへば憂ひ悲しみ而して惱む。今算へたやうな色々の希望があつても、それを充たすことが出来ないといふので、貧賤に居る輩は貧賤の爲めに憂ひ、富貴にある輩は富貴の爲に悲みの絶間なく、殆ど身を火宅に置やうなもので、世の中は火事場同様に、寸時寸刻暫らくの間も安心して居ることが出来ないといふ有様である。斯ういふやうなことを四苦並びに八苦と稱して居るのである。斯かる四苦八苦、言はば憂ひ悲しみ惱みの多い世の中に居つて、而して暫くでも我々は生活を續けて行かなければならぬ。それにはどうしても忍耐の力が無ければならぬ。互につらいことを忍び洵に苦しいことに耐えて、其の日を安らかに送つて行かなければならぬ。常に不便、不満、不自由、不足を耐え忍んで、苦中に樂を見出すより外に仕方がない。斯ういふ苦惱の多い世界に生息して居る以上、自分の心の平和を得、自身の安心を得て、如何なることに遭遇つても、それに耐えられそれを忍び得られる力を養成して行かなければならぬ。つまり昔の人の言葉にある通り、静中の静は眞静に非ず動處靜にし得來つて纔に是れ性天の眞境、樂處の樂は眞樂に非ず苦中樂にし得來つて纔に心體の眞機を見る。さういふ鹽梅で、世の中が如何に苦しみの海であつても、涙の谷であつても、自分の心さへ常に靜かにして自分の心さへ常に樂しく安心を得られるならば、假



令身は如何に四苦八苦の中に出没し往來して居るといふても、所謂苦しみを轉じて樂しみとなし、禍を翻して福となし得ることが出来る。それを遂げ得るには、一つの信念又は宗教心といふものに依つて修養せられた力による外はない。今無盡意菩薩が佛に申されるには、「其の大慈大智大勇猛の力を有つて居る所の觀世音菩薩は如何にして此の苦惱多き娑婆世界に遊び、遊戯三昧せられるのであるか、換言すれば此の苦しい不自由な世の中を樂しみと見、不足を満足と見、不完全なものを完全と見て、而して恰も遊戯せられるが如く、其の愉快なる所の心を以て、此の娑婆世界の衆生を濟度せられるのであるか。如何に衆生の爲めに方便の力を用ひられるか。觀世音菩薩が此の世界に臨んで衆生の爲めに説法度生せられるが、其の方便の力はどうかといふものであるか。」と——此に方便といふのは、佛法では常に眞實といふことに對せられて居るのである。之を世俗では嘘も方便といふやうに用ひて居るが、決してさういふ意味ではない。それは大變誤解したる所の説で、つまり方便といふのは、所謂眞實に達するまでの道行きである。即ち言葉は換へていふならば、一つの目的を達する手段方法といふて宜い。それ故に常に反して道に合するを權道といふのである。常には背いて居るが道には適ふて居る。之を權道と稱する。丁度世間に正道と權道との二つあるが如くに、佛法でもさういふものが入用である。衆生を濟度する爲めには、手を換へ品を換へ、色々の手段方法を講じて、丁度良醫が病に應じて藥を與ふるが如くに、衆生の境遇に應じて、之を道に引き入れて行かうといふ、其の觀

世音菩薩の遊戯せられ、方便の力を用ひられる其の事は如何であるか承りたいと、無盡意菩薩が申されたのである。そこで佛が無盡意菩薩に告げ給はく、「善男子、若し國土の衆生ありて、應さて佛身を以て得度すべきものには、觀世音菩薩即ち佛身を現して而も爲めに説法す。」

此の佛身を現して而も爲めに説法すといふ是れからが三十二應身に這入るので、此れが其の第一である。菩薩の本體は常に一つである。菩薩の本地といふものは「妙覺果滿なり」とあつて、佛の本地に似て居るのであるが、一度ひ衆生濟度となると、直ちに妙覺果滿の位地をへり下つて出て来て、而して何物にでも應じて方便の力を以て説法せられるのである。丁度磨き澄ました明鏡の物を映すが如く、柳は綠に花は紅に、美人は美しく醜婦は見てく、物其のものが有りの儘に寫るが如くに、菩薩も其の前に來たものに應じて身を現はすのである。「面白や散る紅葉も咲く花も自づからなる法の御姿」といふ歌があるが、さういふやうな趣である。まづさういふ有様で、若し此に衆生あつて、それが佛身を以て得度して宜いものならば、觀世音菩薩は我を忘れて直ちに佛身を現して而も爲めに説法する。抑も佛身といふものは、如何なるものであるかといふに世の中には佛といふことを大變誤解して居るものが多い。佛とは人以外のものである如き考を有つて居る。佛といふものは生きて居る人ではなくして、死人を指していふものと考へて居る。誰れそれが佛になつたといふのは、其の人が死んだといふことである。佛といふものは現世に於て活動して居る時に要が無くして、死んで後唯だ冥途の道案

内として要するやうに思はれて居る。さういふやうに甚しく誤解されて居る。一と廉の物識り、儒者と云はれて居る人までが佛を誤解して、説文的に文字の組立てからいふと、人扁に弗で、人に弗すと書いてあるから、殆んど人非人といふが如きものと解釋して、此の世から縁遠いもの、如くに見て居る、随つて佛を字の儘にすると、直ちに悲觀的に考へたり厭世じみたものと考へたりして、段々誤解に誤解を重ねて、今日では佛の意義が晦まされて仕舞つたやうな有様である。何時もいふが如く、佛は梵語では佛陀といふので、それを翻譯すれば覺といふことになる。自覺覺他覺行圓滿、これが昔からの定義である。つまり我々が觀世音菩薩の誓願の如くに、此の智慧、慈悲、勇氣、の三つを全くしたならば、それが即ち佛である。所がそれを佛敎學の敎相風に解すると、佛といふのは中々廣い意味があつて、一口に言ふと、法、報、應の三身である。つまり一身が三身あつて三身が又一身である。それを佛といふのである。此の三身を別けてお話すれば、覺行圓滿の本體といふものを指して法身と稱する。次に本體から現はれ出でた所の此の姿、即ち眞に智徳圓滿の身體を指して報身と稱する。それから應身又は化身といふたりするのは、即ち應用自在といふ現はれである。法報應の三身といふことは又外の言葉でいふて見ると、理智用ともいふことが出来る。法身といふのが理體で、報身といふのが智慧の現れである。而して應身といふのが其の作用である。之を理智用といふたり又は御經々々によつて言葉が違つて、體相用ともいふたりして居る。例へば起信論などには其の通り體相用とい

ふて居る。どういふても宜しい。同じ佛といふても、本體から眺め又は現象の上から眺めて、本體と現象とが感應道交して、現象は即ち本體から出たものであつて、本體を離れての現象ではない。丁度水と波の如きもので、水が體ならば波が即ち用である。即ち體と用とが常に陰陽融合して而して働いて居るのである。此の道理は佛敎各宗の見地に就いて、到る所にあらざる所は無い。其の或處には、本體を平等と呼び、現象を差別といふて居る。平等即差別差別即平等即ち作用といふことに當つて居る。本體を離れて現象のあるものではない。本體と離れて作用のあるものではない。つまり佛身といふても、之を哲學的に言へば今の如く色々であるけれども、今此處でお話するのはさういふ哲學じみたことではない。其の一つの理想を此に實現した其の上からいふのである。「若し佛身を以て得度すべきものあれば、即ち佛の身體を現はして人の爲めに説法する」と斯ういふ。勿論此の如く現はす佛身は即ち應神である。

「應さに辟支佛身を以て得度すべきものには、即ち辟支佛身を現じて而も爲めに説法す。」此の辟支佛といふのは、矢張り原語であつて、其の辟支佛といふ意義を翻譯すれば、緣覺といふたり又は獨覺ともいふ。何故辟支佛といふ意味を獨覺といふかといふと、佛が此の世に在さざる時にあつて、獨り森林の中に住んで居つて、飛花落葉の無常を觀じて、それに依つて悟りを開いた人である。獨り自分の悟りを開いたといふ所から獨覺といふのである。又緣覺といふのはどういふ譯かといふと、獨覺者

たる此の人が、十二因縁又は十二因果ともいふが、即ち十二因縁といふものを自分の心に観念して、而して一つの悟りを開く位の人であるからである。其の緣覺又は獨覺といふことは、原語で言へば辟支佛といふのである。此の十二因縁を詳しく説かうとするには、今此の席では容易に盡すことが出来ないから、唯だ其の名目だけを擧げて見ると無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死、といふので、合せて十二である。此の十二のものたる、原因が結果を來し、其の結果が又原因となつて次の結果を來し、其の結果が又原因となつて結果を來すといふやうに、原因と結果が聯關して少しも離れないで、次から次へと色々な法を生み出して行くのである。一言次手に其等の意義を解釋すると、つまり我々の本體といふものは、元來佛にも變らない神にも變らない大なる明かなるものを有つて居るのであるが、それが長い間に何時となく一點の曇りが附たやうな有様になる、恰も能く醒めて居つた人がふと睡氣がさしたやうな工合で、それを無明といふのである。つまり無明は迷と訓じても宜い。即ち一點迷の心が起る、それが無明である。其の次は行、心にさういふ迷が起ると、直ちに事實に現はれる。身口意の三つの業によつて、善惡二業を作つて行くことになる。此の無明を業といふが其無明業が右云ふ様な工合に原因となつて、自ら善業も作れば惡業も作りそれから其結果が又原因となつて次の結果を生むるのである。而して此の無明と行とは過去に屬するものであるから、之を過去の二因といふ。此過去の二因からして、——今度は現在に其の結果が現はれて來る。

即ち第三の識から現在に移るので、現在に於て又次の如く結果を受けて行くのである。即ち此の識といふのはどういふ状態であるかといふと、處々によつて解釋は違うが、此にある識といふのは、父と母とが交接をして、母の胎内に一點意識の宿つた所の状態をいふので、それを識の一字を以て現はしたものである。父と母が和合して母の胎内に一點の心持ちの宿つた所を識といふ。詳しいことは他日のお話に譲るとして、今は字義だけ解釋して置く。即ち一點母の胎内に宿つた心持ち、其の刹那の状態を識といふのである。次は名色。これは平たく言へば或る一つの肉の塊りで、一旦母が懐妊してやつと二ヶ月も立つた許りの頃は、まだ目や鼻や耳まで總て五官の形が現はれないもので、言はゞ心らしい生きたものがある。即ち名は心の方で色は身體の方に當るのである。斯ういふ状態を名色といふ。此の名色が段々進んで行くと、今度は六入となる。平生の言葉で六根とも稱し又六處とも稱する。母親が懐妊して四五月も立ち、段々月を重ねて來るに隨つて、今まで唯だの肉團であつたものが、追々に耳が出来鼻が出来目が出来るといふ鹽梅に、母の胎内にあつてさういふやうなものが出来る。其の位の處を六入と稱する。つまり色々なものが這入り込むといふやうな譯である。これが十ヶ月の間母の胎内にあつて段々出来上つて仕舞ふと、即ち臨月になつて母體から分れ、呱呱の聲を揚げることになる。それが第六番目の觸である。始めて此の世の中の風に觸れるのである。それが生れてから一年、若くは一箇年半程の間は、矢張りまだ觸であつて、純然たる赤ん坊の時代である。此の時代は殆

んど意識といふべき程のものはなく、赤いものを見ると唯だ手を出して掴まうとする。光るものを見ると這ひ寄つて行く。奇麗なものを見ると無頓着に口にくわへる時代である。熱いものに遭つても本當に感じない。感じて意識しない。冷たいものを握つても矢張り無頓着である。赤裸々で人前に出ても羞かしいと思はない。何とも思はない時代である。其の時代を觸といふ。其の次が受である。一二歳から四五歳まで、段々成人して行くに随つて、外界の物を心に受ける。善いものを見れば楽しむ。悪いものを見れば苦しむ。嫌なものは捨てる。苦樂捨の三受と云はれて居るものである。頭を叩いても心持が宜いと、莞爾して居る。少し何かに突き當りでもすると、痛いといふて逃げ出す。捨でもない、苦でもない、樂でもない、其處まではつきりと意識するまでに至らない状態を名附けて、受といふのである。兎も角も子供が成人して行く間に、苦しいとか樂しいとかいふことを知つて来て、苦しいから嫌やだ、樂しいから好きだ、と斯ういふやうな心が出て来るのである。それが即ち受の時代である。それから愛の順に移る。是れは先づ十四五歳からの時代を名附けるのであるが、それでも早熟する輩はもつと早いものもあり、晩熟する輩は反對に遅いものもあつて、一樣には言へないけれども兎に角人間は少なくとも十四五歳から二十歳前後に掛けて、愛着の心が起るものである、それは五慾といつて、先づ喰ふ所の慾、又は眠る所の慾、それから男女間の慾、或は自分の名をなす慾、又は自分の寶の慾即ち財産の慾、さういふ慾が起つて来る。随つて愛着の心が著しく現はれるものである。

それから又愛の最も力強いものになると、道理も利害も眼中になく、一旦思ひ立つたものならば、その事の善たると悪たるを問はずして、例へば火の中にも飛び込んで仕舞ふ、波の渦巻く中にも飛び込んで仕舞ふ、さういふ勢で自分の慾を達しなれば止まない。これが愛に續いて取の時代である。つまり愛慾の心が益々盛んになつて、遂るといふことに何處までも執着する。例へば女の一念岩をも透すといふ意氣込みで、何處までも其の物を我が手に入れなければならぬといふ強烈な心を起るのである。此の時代が最も危険な時代である。此の如く火の中でも水の中でも、貪愛の爲めには構はず飛び込むといふ危険の時代を通つて、次に移るといふと、今度は有といふ時代になる、年齢も段々重ねて四五十といふ年寄時代になると、今までの善果なり悪果なり、ちやんと未來の結果を所有して仕舞ふ、斯ういふことを有といふのである。未來に斯ういふ果を得よう、言はゞ善い果を得よう善い果報を作らうと、現にちやんと所有して仕舞ふ花が開いて實を結んで、其の實が熟して種となるやうに、愈々善惡の業を定めて仕舞ふのである。前に述べた識、名色、六入以下、此の取、有に至るまでが、現在の果であつて、それから次の生、老死といふ順序で、未來に這入るのである。斯んな工合で無明の基が行となり、行が識となり、識が名色となるといふやうに、段々原因が結果を生じ、結果が又原因となつて次の結果を生み、後から〜と原因結果が常に相關聯して、何處まで行つても循環して果てがない。之を流轉門といふ。無明が行となり、識となり、過去の因が現在を生み、現在が

未來を生んで、次第に段々生れ出て行く。故に流轉門といふ。これは迷の方の因果である。又反對に悟りの方の因果をお話すると、無明が滅すれば行から以下悉く滅亡して仕舞ふといふ所から、倒まに見て行く、老死は何から來るかといふと、生から來るのである。生は何處から來るかといふと有から來る。さういふやうに段々原因に溯つて、遂に根本の無明を滅して仕舞ふ。其の方の側を還滅門といふ始めの流轉門の方では、次から次へともを生み出して行く。還滅門の方では、次から次へともを亡くして行く。流轉門の方は迷の因果で、還滅門の方は悟の因果である。斯んな鹽梅に、世の中では我が身體許りでなく、總てのものが生老病死して行く、我が身體が生老病死し、總てのものが生住異滅するといふ、どつちにしても同じである。世の中には此の通り紛然雜然として、或ものが現はれ或ものが纏つて居るけれども、十二因縁の因縁觀からして眺めると、つまり之をほどいて仕舞ふ、世の中には何もあるもので無い。と斯ういふ工合に自分に一つの悟りを開くことを辟支佛の悟りといふ。若し相手方が辟支佛の權化といふやうなものであるならば、觀世音菩薩は直きに辟支佛にくるりと變りて說法度生する。總て相手方次第である。觀世音菩薩は何時もお話するが如く、一面の磨ぎ澄ました明鏡の如く、柳は緑りに花は紅に、相手方次第に其の通り姿を現はして說法する。「應に聲聞身を以て得度すべきものには、即ち聲聞身を現じて而も爲めに說法する」此の聲聞といふ字は、世間に用ひない字で、これは佛様の聖教を聞いて而して悟りを開くといふ意味から來たのである。

即ち佛の在世時代の弟子方が皆な聲聞である。而して辟支佛も聲聞も何れも自利的人で、菩薩の位は無い。然かし聲聞に屬する人は、どういふ法を觀じて悟りを開くかといふと、それには四諦の法といふものがある。諦といふのは眞實不虛の義である。四つの道といふても宜い。即ち四通りの道を觀じて、而して一つの悟りを開くのである。其の四諦は何かといへば、苦、集、滅、道の、四つである。つまり是れは本來から云へば、集苦道滅といふのが當り前である。何故かといふと、集といふものが原因で苦が其の結果である。而して道が原因で滅が又結果であるからである。勿論集苦といふ方は迷ひの方の原因結果であり、道滅といふ方は悟りの方の原因結果である。分けていふとさうである。處が普通ならば集苦道滅といふべき筈であるにも拘はらず、此處では結果を原因の前に置いて、苦集滅道といふて居る。何故かといふと、聲聞身位の人々には、先づ結果といふものを見せて置て、此の結果が何處から來たかといへば、斯ういふ原因から來たものであるといふ風に、云ふた方が彼等に分かり易きためである。これは獨り聲聞身の人許りではなく、世間には先きに結果を見せて、それが斯ういふ原因から來たと説明した方が分かり易い場合が澤山ある。さういふ佛の方便によつて、集苦といふべき所を苦集といひ、道滅といふべき所を滅道と、あへてこへに云ふたのである。今迷ひの方でいふと、世の中は皆苦しみ許りである、我々の身體には生老病死の四苦があり、世間の物には生住異滅の四變があつて、如何なるものにも常住不變のものはなく、何もかも世の中は苦しみ許りで

ある。何故我々の利益、幸福、快樂と云はれるものに、一々何かの苦しみが伴つて來るのであるか、喜びの裏には悲しみが潜んで居るのであるか。此の意味から云へば、實に三界は苦ならざるものは無いといふて宜い。其の苦といふ結果は何處から來たものであるかと、段々原因を尋ねて見ると、集諦といふ是れから出來上つて來たものに違ひない。自分の心の中に於て、色々の煩惱妄想を起して色、聲、香、味、觸、法の六塵を集め、五慾の爲めに貪瞋癡の三毒を恣にして、色々様々の迷を起すのである。之を教相的にいふと、見惑八十八使と思惑八十一品などが寄り集つて、此の苦しみをなすのである。言はゞ大きい迷、小さい迷ひ、さういふ幾つかの迷を我が心の中に集めて、つまりそれが爲めに此の苦しい結果といふものを我が身に受けるのである。これが迷の方の因果である。それから悟の方の因果に移つて行くと、つまり滅するといふことは、これは佛法の最終の目的である。詳しくいふならば滅道である。此の滅道といふことは原語でいふと涅槃である。涅槃といふことは滅道ともいひ又寂滅ともいふ。大乘の言葉でいふと不生不滅、大きい場合の悟といふことである。眞の大安心を得て煩惱を一切消滅せしめることは、此の滅の一字に現はれて居る。此の安心滅道の境界を得ようといふならば、此の結果を得ようといふならば、先づ道を修めなければならぬ。道といふことは三學八正道其の他色々ある。三學とは戒、定、慧の三つで、八正道とは正見、正思惟、正語、正業、正精進、正定、正念、正命で、つまり佛の教へられたる正しき道理で、正しく三學八正道其の他の道

品によつて、即ち色々善きことの道を修める結果、遂に寂滅の悟りを開くことになるのである。四諦といふことは、初めの二字即ち苦集といふことに於て迷の因果を現はし、後の二字即ち滅道は悟りの因果を現はしたものである。斯ういふ四諦の法門を觀じて、而して自分獨りの悟を開くことを、聲聞身の悟といふ、唯だ是れだけでは十分に説明が徹底しなからうけれども、餘り學問風に教相的に話した所で却つて分り悪いこともあらうから、先づ此の位にして置く。要するに多くの衆生が此の三界六道に生死流轉して、解脱する時が無いから、之を解脱して目出度く涅槃の樂果を得せしめようといふこれが觀世音菩薩の衆生濟度の本願である。決して我が爲めでなく人の爲めにするのであるが、今もいふ通り辟支佛の身を以て得度すべきものには、直ちに辟支佛の身を現はし、聲聞身を以て得度して宜い人には、直ちに聲聞の身を現はして、而して説法度生せられるのである。丁度槍舞臺に於て、千兩役者が役により百人が百人、一々其の扮装を異にして其の役柄を演ずるやうなもので、觀世音菩薩の本體も丁度それに變らない。直ちに早變はりして、來たものを相手に仕事をせられるのである。我が身體で言へば矢張り同じことで、寒い時には衣を重ね、暑い時には衣を薄くする。冬は綿入夏は輕衫と其の時節々に相應した身なりをする。それと同じことで觀世音菩薩も時には辟支佛となり聲聞身となり、又は佛身にも現じて見たりして、此の如くにして而して説法度生せられるのである。

第十回

應以。梵王身得度者。即現梵王身而爲說法應以。帝釋身得度者。即現帝釋身而爲說法應以。自在天身得度者。即現自在天身而爲說法應以。大自在天身得度者。即現大自在天身而爲說法。

【釋】 應さに梵王身を以て得度すべきものには、即ち梵王身を現して而も爲めに説法す。應さに帝釋身を以て得度すべきものには、即ち帝釋身を現して而も爲めに説法す。應さに自在天身を以て得度すべきものには、即ち自在天身を現して而も爲めに説法す。應さに大自在天身を以て得度すべきものには、即ち大自在天身を現して而も爲めに説法す。

【論】 是れ迄も度々申した様に、我々は觀音の化身である。觀世音菩薩の權化であるといふ觀念を始終有つて居なければならぬ。もう一つ擴げていふならば、此の觀音の本体は何であるかといふと、慈悲、智慧、而して勇氣是れである。此の觀念を始終有つて居つたならば、其の靈驗は直ちに我々一身上にも又家庭の上にも其の外色々の方面に向つても屹度現はれるに違ひない。斯う私共は固く信じ居る。此の普門品の終りの方に行くと、具足神通力、廣修智方便、十方諸國土、無利不現身。と斯

うある。棒讀み——所謂坊さん讀みであるから、一寸是れだけでは分らないかも知れぬが、右の原文を平たく讀んで見ると、「神通力を具足して、廣く智方便を修め、十方諸々の國土、利として身を現ぜずといふこと無し。」刹といふ字は、先づ處と訓んで宜い。此の十方諸々の國土に於て、處として身を現はさなないといふことはない。斯ういふ文字が後に至つて出て来る。斯ういふ工合に我々が觀音を眺めて見ると、言はゞ世界中何處もかしこも皆觀世音菩薩の現はれてない處は無い。であるから初めから度々お話しした三十二應身といふことが、それから出て来るのである。勿論三十二と限つたことはない。總てのものに應じて衆生を濟度せられることは、恰も水中の月影の如き鹽梅で、何處もかしこも觀世音菩薩の現はれてない所は無いといふのである。それをつゞめて、此處には三十二通りに分けてあるが、其の三十二の中で、これ迄に佛身が濟み、辟支佛が濟み、次に聲聞身が濟みて、今席第四番目の梵王身といふ其處から話を進めるのである。

「應さに梵王の身を以て得度すべきものには、即ち梵王の身を現はす。二度姿見の前に我々がスツと立つたやうなものである。我々のやうな圓頂黒衣の身は、圓頂黒衣の姿其儘に現はれる。貴女方のやうな婦人の姿は又婦人の儘に現はれる。スツと寫つて、去つて又來て寫つて、色々に影を現はすが、其處には汚れも穢れも何も無い。其儘に手加減も何もある譯のものではない。さういふ有様で、觀世音菩薩が若し梵王の爲めに説法しやうとする時には、梵王の通りに身を現す。斯ういふことは奇術

とか魔法とか云ふものでなくては出来ないと思ふのが我々平生の考であるが、併し只此五尺の身體にのみクツついてゐては自由の働きは出来ないと暫らく此身體を此儘にして之を忘れて仕舞ひさへすれば出来る。奇術でも魔法でもない。心を主として、さういふ意味の心になれば現はれようと思ふ。第一に梵王といふ王様の身であるが、詳しくお話しするには、古い時代の印度の學問、——三界、須彌山などの講釋もしないと十分ではないが、今さういふことは左程必要でもなく又暇もないから、略して置いて今此に出た梵王といふのは、三界といふて、世界を慾界、色界、無色界の三つに分けて居る。其の中の慾界、——慾界といふのは五慾の満ちたる世界、色界といふのは、字は色といふ字を書いてあるけれども我々が常にいふ色といふ意味ではなく、寧ろ形といふ意味を有つて居る、即ち形のあり世界。無色界といふのは、心許りの世界であつて形を離れた世界。斯う見た所で、詳しくいふと際限がないから、大體だけを申して置くが、其の三界が又二十五通りに分けてある。其の三界の中の色界の天部のうち初禪天の第三番目の天、天は必ずしも高い所に限らないが、其の三番目に位して居る所の天神を指して、それを梵王といふ。大梵王と大の字をつけることもある。或に尸棄などいふ名前もあり、或は螺髻梵王などいふ名前もあつたり、色々である。處て其の梵王の梵といふ字は、即ち梵語などいふ梵の字で、其の意味は清淨と翻譯する。汚れない、清らかなといふ意味である。さういふ王が何處に居るかと詮索すると、我々は自身に梵王といふ意味を有つて居る。私共の解釋はさ

ういふ解釋である。それだけでは十分御分りになるまいが、何故さういふ風に梵王が我々自身にあるかといふに、我々は三毒、五慾といふやうなものを腹一杯有つて居る。それが即ち汚れ穢れである。若し我々が一度び觀世音菩薩の大慈悲に投じて、貪慾、瞋恚、愚癡といふような迷ひの夢を醒まして仕舞へば、直ちに我々の貪慾は慈悲心に變つて行く。我々が一度び活きた觀世音菩薩の權化であると、いふことに氣が附いたならば、今までの貪慾は大慈悲心の現はれといふことになる。今まで我々の瞋恚の炎、怒り腹立つ心、——腹か立つて溜らないといふのが、一度び我々は觀世音菩薩の現はれである。少くとも我々は其の片割れであるといふことを體得して見ると、直ちに大勇猛心、勇猛精進の心となる。世間でいふ努力奮闘の心となるのである。それから智慧——若し一度び觀世音菩薩といふものを我々の身に體得して見ると、今までの愚癡蒙昧、何も分らない心が其の儘に、直ちに大智慧光明の心となる。畢竟煩惱を斷ずるとか、煩惱を取り除くとか云ふが其意味は汚ないものを取り去るといふのではない。今まで汚なかつた其ものが、直ちに奇麗になる。今までの貪慾、瞋恚、愚癡の心が直ちに大慈悲、大勇猛心、大智慧の現はれとなるといふ意味である。つまり迷ひの心を悟り我自身の本體を明かにして、離慾清淨の身となつて働くといふのである。それが分れば、梵王は三界の初禪天の中の第三天に居るとか、其の第三天は何處にあるかなどいふやうなことを詮索するのは迂遠である。今私が大乘佛敎の意味で解すると、其座などは尋ねなくとも宜い。直ちに自身に向つて梵王の身を現



すれば宜い。是れは私に何にも好んで附會し牽強するのではない。大乘に事釋——事實的解釋と、理釋——道理的解釋との二つあるが、其の道理的解釋で解すると即ちそうなるのである。今觀世音菩薩が若しも梵王身を現はさなければ濟度することが出来ないといふ場合に、直ちに我れ自身が梵王となり、而かも爲めに說法する。斯ういふ意味のことは、貴女方も何等かの場合に必ず味はうことがあらうと思ふ。例へば大人と小供とは大變違ふ所があるにも拘はらず、我々が頑是ない幼兒を懐ろに抱き上げた時には我々の心が、直ぐ其幼兒になつて仕舞ふ。又それにはぐくんだり、乳房を含ませたりする母は、赤ん坊にならなければ育てることが出来ない。意生身の上から見ると、年寄つた母も直ちに幼兒其のものになつて仕舞ふ。又人に應接するとしても、矢張りさういふ意味があると思ふ。向ふが強ければ強いやうに、弱いものには弱いやうに直ちに身を現する。今梵王身を以て得度してやるべきものゝ爲めに直ちに梵王の身體を現はして、而して親しく說法する。斯ういふのである。

「應さに帝釋身を以て得度すべきものには、即ち帝釋身を現じて而かも爲めに說法す。」帝釋といふものは、これは印度の佛であつて日本固有のものではない。處が日本には中々此帝釋様が多い。東京附近では柴又の帝釋天が有名である。其の他田舎にはまだ有名な帝釋天が澤山あるが、これも須彌山説からいふと、帝釋天の在所は知れる。それに依ると、慾界、色界、無色界、此の三界の中の慾界の中に、又六通りの天部即ち慾界の六天といふものがあつて、其の第一を四王天といひ其四王天の次に位

した所に刀利天といふのがある。神戸の附近にある摩耶山の刀利天上寺といふのは、それから名附けたのである。而して此刀利天には四方に八天づゝあるから、四八、三十二天、其中央に帝釋天が居て、それで刀利天は三十三天に別れて居るといふのである。以上は事釋の上の事であるが理釋によれば矢張り自分の心の現はれである。然らば此帝釋天は什ういふことを人の爲めにするかといふに、帝釋は十善といふものを以て、人の爲めにする。十善に就ては、他日詳しくお話することもあらうが、此に大體だけを申せば、十善とは、身三、口四、意三、といふて即ち身に三つ、口に四つ、心に三つ、之を合せて十善である。それは善い意味で、悪い意味でそれを使へば、直ちに十不善となる。手を翻せば善き働きをなし、手を覆へば悪しき行ひとなる。身三といふのは殺、盜、淫をいふので、殺は生物を殺す、盜は財物を盜む、淫は邪淫、姦淫などいふて男女の不正なる交りである。此の三つは身體ですることが多い。是れも詳しく證立をすると、心が本で人を殺し、又は口先きで殺すこともある。盜みも其の通り穴勝ち手に限つた譯ではなく、口先きでやることもあるが、併しそれは細かに分けた上のお話で、大體身口意の三つに分けて見ると、殺盜淫を行ふには、重もに身體で行ふのである。什うしても普通からいふと、手を下さなければ殺されるものでない。兎に角身體の仕業である。盜みもさうである。男女の關係も手を出さなければ出来ない。これは不十善の方であるが、十善の方からいふと、不殺生、不偷盜、不邪淫と斯ういふ。殺生といふことは、廣く述べようとすると、大變深い

お話しとなるのであるが、今日は只一寸其絲端丈を申上げて置く。これは人間許りてはない。人間許り殺してはならないといふのではない。一切の生けとし生けるものは、決して故無ければ殺さない。蚤一匹でも其處に理由が無ければ殺さない。蚊一匹でも無益には殺さない。大變廣い意味の不殺生であるが、それは態々其處にさういふ制限を人為的に勝手に設けたのではない。天地自然の道理で、何物にも段々生成發育するといふ。一つの生命を有つて居る。それを奪はないといふ所に、天地自然の道理即ち慈悲の姿を現はして居る。我々人間が生命を惜むが如くに、外のものも各々其生命を大事に思ふ。それ故に已むを得ない場合の外は物の命ちは取らない——唯これだけでは殺生戒の講釋は十分でないが、大體のことだけをいふとそうである。然かし佛教では何時も必ず斯かる制限の下に禁束せられる、云はゞつくりつけのものであるかといふに、戒法にも色々あつて、或場合には廣く許す事もある。或場合にはさうでない事もある。又或場合には保ち又或場合には行はないといふこともある。世間では付うかすると、佛教を信ずると人間が弱くなる、生存競争の今日、只殺生せぬといふだけではいけないといふけれど戒法のことは仲々そんな簡單のものではない、然かし今此處で、それを詳かに説明する事は時間が許さぬのであるから何れ他日の折りを待つとすると、場合によりては佛は故らに破戒せられたこともあるのである。それは兎に角本來此の戒といふことは、世界成立の戒法といふて、佛教を信ずる人でも信じない人でも、今日人間として生得此の如きことは保たなければならぬ筈のものである。決して佛が獨斷的に拵へたものではない、人間として生得それだけのことを保つべき資格を有つて居るといふのである。大體身三——不殺生といふのは、如何なる場合にも故無くしては殺さないといふので、言ひ換へれば慈悲の現はれである。それから不偷盜、盜みをしないといふこと、賊といふても色々あるが、極く荒い所の盜み、手を出して盜むことを普通にいふけれども、人の物を只取る許りでなく、坊さんが職分を行はなければ、法を盜むことになる。矢張り賊である。住持であつて住持の勤めを怠れば、住持の位を盜むものである。商工業家にして其の仕事に勵まなければ、矢張り其の職を盜むことになる。さういふことが細かに戒法に書いてある。唯だ財を盜むといふ丈けの單純の意味ではない。不邪淫といふのは邪しまなる淫行を慎めよといふのである。此の裏には夫婦は成るべく仲善くせよ、一夫一婦は人間自然の道であるから、夫婦は互に相敬愛するやうにせよといふのである。處て今それを獎勵するには、一方には邪淫、姦淫を戒しめなければならぬ。これが佛教の主義である。佛の階級は色々になつて居るが、其の中で比丘には邪淫を堅く戒められて居る。けれども、世間一般に獨身生活をせよとは何處にも書いてない。成るべく夫婦仲睦しく暮させたい。其以外に邪淫をしてはならない。それを説いて行くのである。以上が身三、次ぎは口四、口に四つの戒めがある。此四つは善い方にも悪い方にも使ひ得られる。第一は惡口、それから兩舌、二枚の舌を使ふこと、それから綺語、飾り言葉のこと、それから妄語、嘘つきのこと、さう四つに分けてある。

それを善い方の意味でいふならば、總て頭に不の字が附く。例へば、悪い方の嘘つきを妄語といへば善い方では不妄語と斯ういふ。總て其の裏をいふのである。併しながら、是も細かな解釋に就いて考へると、口で人を活かしたり殺したり、口で罪を作るといふやうなことも中々多いものである。心得ない人の考へでは、口で言ふことは後に残らないから、一時的に其の場さへ通り過ぎれば宜いと思つて、何でも言ふのである。併し佛教の戒法で、精神上から眺めて見ると、一言でも言ふたことは、天地間に影響することであるとまで云ふて居る。少くとも人類社會にそれが影響する。一人に止まらず廣く一般に影響するのである。善いことをしても矢張りさうである。一人に止まらず廣く影響する。丁度水面に小さな石を投げれば、小さい波紋をなして波及するやうなものである。大きい石を投げれば、大きいなりに大きい波紋が波及するやうなものである。善事でも悪事でも、社會的に我れ人に止まらず外に及ぼして行く、人の悪口を言ふといふとは、人として悪徳である。兩舌の如きは最も悪徳である。人前にあつて人の悪口をいふて、又外の人に對して前の人の悪口をいふたりして、人の身を離間中傷するやうな、色々の悪徳を犯すのは、皆二板舌を使ふからである。それから綺語、飾り言葉を使ふのもさうである。何か人の心の蕩けるやうなことを言ふたり、人の心の掻きむしられるやうなことを言ふたりして、人を惑はすのは悪徳である。大體修養の無い人が、軟文學といふやうな媚めかしい文學書でも手に取ると、色々な間違ひを起すことは世間に澤山例がある。さういふやうに若い者

の心をそゝるやうな言葉を使つて人の身を誤るのは悪徳である。新聞の記事でも文學書でも、又は音樂の如きものでも、故らに言葉を飾つて人の心を蕩かすやうなものは、總て同じことである。それであるから、何事に限らず飾り言葉を遠ざけるといふ、但し其心を堅固に保持さへして居るならば、音樂會に出やうと又は慈善の爲めに義太夫會に出やうと過ちは無いと思ふ。それから妄語、親切を缺いた言葉は皆妄語である。口では禮儀的に言ふても、心に親切を缺いて居つたならば妄語である。若し口で驚を烏と云はなければならぬやうなことがあつても、心に親切氣を存する限り善意にして犯すならば、それは妄語にならない場合がある。兎に角親切を缺いた言葉は皆妄語である。口が什うも一番罪を多く作るものであるから、それで口が四つになる。口は禍の門といふが如何にさうである。其の次は意三、心に於ける三つである。それが貪嗔癡、即ち貪慾、瞋恚、愚癡といふことにもなる。又愚癡の代りに邪見といふことが這入る場合もある。善い方から云ふと、不慳貪、不瞋恚、不邪見といふたりする。それで第一の貪慾、これは心の上にするので、佛教の戒法は精神上の法律であるから、形に現はれること許りに重きを置かない。所謂心の動機に重きを置いて居る。故に意三といふて心の中に起る所の貪慾、瞋恚、邪見若しくは愚癡といふことが、是れを又惡徳の大なるものとして居る。これを最も善き意味で身體に働かせなければならぬ。此の身三、口四、意三、合せて十善である。此の十善といふことを以て、各宗各派を網羅して居る。つい先達て亡くなられた雲照律師は、寧ろ之

を主として教を立てられたのである。そのみならず、弘法大師も十善といふことは、世間から見ると人道上の教である。それを出世間的に見ると、廣げれば十本の指縮めれば一本の手である如く。つゝひれば佛心、廣げれば十善である。あらゆる萬善萬行は、悉く此十善から出るのであつて、十善が即ち其の根本になるのであるから、十善を保つ時には心が光明である。それを犯す時には心が闇となると言はれて居る。——さういふ例を擧げると澤山ある、——維摩經にも十善は是れ菩薩の淨土なりといふ語がある。——決して小さな法門ではない。——餘り長くなるから其の位にして置くが、即ち帝釋天は十善を以て人の爲めにする。それが帝釋天の持ち前である。併し初めにも言ふ通り、帝釋天は敢て刀利天の中の何番目に居るとか、それが經典の何處にあるとか、さういふことは穿鑿すに及ばない。我が一心は即ち此の十善で、此の佛心を發見した所がそれが帝釋天の現はれてある。それ故に、應に帝釋身を以て得度すべきものは即ち帝釋身を現はして而も爲めに説法すとあるのであつて、洵に自由なものである。初めに言ふた通り鏡の映寫の如きものであり、撞く鐘の響のやうなものである。

「應に自在天身を以て得度すべきものは、即ち自在天身を現じて而も爲めに説法す」此の自在天も事釋の上から解釋すれば、須彌山説にある通り、自在天といふのは、丁度六慾天と稱する——慾界の中に六つの天があつて、其の中の一つ低い天である。六慾天の天神は什ういふものかといふと、魔王

である。自在天といふも自在天といふも、皆魔王の名である。恐ろしい魔王の名である。魔といふ字は梵語でいふと、妄執殺者といふ。翻譯すると、一切人の命を殺すといふことになる。つまり一切の功德財産を奪ひ、而して一切の智慧の命を成るべく殺すといふ意味から、妄執殺者といふのである。其の自在天の魔王は、さういふ所に住んで居るのである。然かし前例の解釋と同じことで、第六天許りに其の魔王が始終潜んで居るのではない。直ちに我が心を侵し來つて、第六天が眼を瞞らし頭を擡げて來るのである。處が觀世音菩薩は世界中關係しない所はない。何處でも慈悲の現れてない所はない。勇氣の現はれてない所はない。智慧の現はれてない所はない。斯ういふ觀世音菩薩であるから慈悲を體して、魔王が來れば直ちに魔王の身を以て説得しようといふのである。故に禪宗の修行でもさうである。唯だ佛になつた儘で修行するといふのではない。もう一とつ一轉して進んで行くこと今度は魔境涯と和合する。衆生濟度の爲めに魔境涯とも和合するのである。善人許り相手にするのはない、惡人とも接して行かなければならぬ。善でも惡でも佛でも魔でも、それ／＼の境涯に應じて修行を進めて行くのである。故に魔王が來たならば、宜しく魔王其の儘となつて現はれて行くのである。應に自在天身を以て得度すべきものには即ち自在天身を現はして而も爲めに説法する。斯ういふ處が之を釋迦牟尼如來などの一代に見ると、釋迦御一代を八相（降兜率、託胎、降生、出家、降魔、成道、説法、涅槃）に分けて居るが、其の中に降魔といふ一段がある。即ち釋迦牟尼如來が修行せら

れて居る前に當つて、色々の魔が現はれて来る。恐ろしい魔もあれば愛すべき魔もある。それは皆な自在天の仕業である。初めは大變な美人、實に天上より落ちて来たような美人が、佛の前に媚びを呈して佛を迷はせやうとする。色々様々に媚態を呈する。佛の坐禪して居られる前に、さういふものが色々と現はれる。つまり佛の禪定を紊す爲めに、色々さういふ手段をやつて来るのである。處が佛の禪定が動かないから、今度は夜又のやうな鬼のやうな恐ろしいものが現はれて来る。或は兇器を閃かして逼つたり、或は弓をひいて佛を怒らせやうとする。其の時に弓の矢が雨の如くに降つて来る。處が其の毒の矢が途中から落ちて、皆な變化して蓮華の瓣となる。さういふことは奇蹟でも何でも無い我々互ひの間でも同じことである。他人が仕ういふ惡意を以て來ても、自分が之を善意に受け取つたならば、皆な今のお話のやうなことになる。色々自分を陥れよう、苦しめようと人が迫害を加へても惡意を惡意として受取らないで、之を善意として受取つたならば、大變強いものであらう。さういふ心を一點でも體して居つたならば、一身を修め、一家を治め、進んで廣く國家社會に對しても、少しも意に介することが無くなる。強といふても、この心が無ければ眞の強者ではない。仁者は天下に敵無して、什んなに周圍から壓迫せられても、斯ういふ心を一點でも宿して居つて、相手の惡意を惡意としないで、善惡に解して居つたならば、毒の矢が直さに蓮華となつて、皆な途中で落ちて仕舞ふといふやうなことが、傳記に書いてある。これは奇蹟でも何でも無い、不可思議のことでも何

でもない、慈悲あるが爲めに觀世音菩薩が身を魔王に現じて説法するのである。或時一人の坊さんが、坐禪三昧に這入らうとして居ると、不意に一人の女が其前に表はれ、長い髪を振り亂して、洵に貴僧は怨めしい私が命にも換へられない赤ん坊を、貴僧は殺して仕舞つた。是非あの子を生かして返してくれ、さういふて坊さんの前に身を投げ伏せた。處が坊さんの考へるには、所謂斯くいふのが魔が差すといふのだらう。斯ういふ魔は直ちに退治しなければならぬ。よし打殺してくれようと、切れ物を持つて、「己れ、さういふ姿を粧ふて來たが、畢竟汝は魔である」といふて突き刺した。さうすると急に夢が醒めたやうな心持ちになつて、何處か冷りとしたのに氣がついた。膝を撫で、見ると、滑らかなものが手に觸れる。そこで能く燈火に照らして見ると、外の魔ではなく、自分の魔を刺したのであつた。其の刺し口から鮮血が淋漓として流れて居た。さういふ物語を書いた本がある。所謂心の作用から、色々のことが現はれるのである。今でもヒステリーなどの人が激しいのになると餘程妙なことを心の中に見て居るものである。甚しいのになると、人が來て自分を縛るといふやうに思ふものもある。又は人の話から、何か人が我が身に迫害を加へるとか、兇器を携へて來て危害を加へるとか、いふやうに思ふたりして、身を以て敵對しようとして、障子を突いたり若くは刃物を揮つて飛んでもない過ちを生ずることもある。それは併し病的であらうけれども、一種の精神上的の情態として、さういふことがある。又或時坊さんか坐禪をして居つたら、魔が現はれた。それは大

さい魔である。而して恐ろしい顔をして居る。手も大變長いものである。さうかと思つて見ると足が非常に短い。さういふ怪物が現はれた。我々は腹を有つて居るが、其の怪物は腹を有つて居ない。それを見た坊さんは修行が積んで居つたから、少しも恐れずに、「何か、お前は折角やつて来たが、腹が無いではないか、腹が無いでは不自由であらう。併し食ふ必要も無く飲む必要もなく、其の方では餘程調法なものであらう。」さう言ふたら、魔が掻き消す如くに消え失せた。さういふやうに或時には魔に對して説法しなげねばならぬ。又白隠禪師の室内に幽霊濟度の公案がある。若さういふ幽霊じみたものが、枕元に怨めしいといふて現はれた時に、何といふて濟度するかといふのである。故に菩薩は衆生濟度の爲めには、梵王にも帝釋天にも自在天にも色々に姿を現はして、唯だ善人に許り優しいのではなく恐ろしい大魔王の現はれた時にも、それに身を現して説法するのである。我々も斯ういふ工合に總て何事に限らずさういふ心になつて居つたならば、分相應に働くことが出来ようと思ふ。今日は此れだけにして置きます。

第十一回

應以天大將軍身得度者。即現天大將軍身而爲說法。應以小王身得度者。即現小王身而爲說法。應以毘沙門身得度者。即現毘沙門身而爲說法。應以觀世音菩薩身得度者。即現觀世音菩薩身而爲說法。

爲說法。

**和訓** 應に天大將軍の身を以て得度すべきものには、即ち天大將軍の身を現じて、而かも爲めに説法す。應に毘沙門身を以て得度すべきものには、即ち毘沙門の身を現じて、而かも爲めに説法す。

應に小王身を以て得度すべきものには、即ち小王身を現して而かも爲めに説法す。

**講義** 毎度お話しした様に、觀世音菩薩は色々の方面から其の境涯を拜ひることが出来る。色々の方面といふ内に、先づ第一には大慈悲心の方面から觀世音菩薩を拜ひることが出来る。それから又大智慧といふ側から觀世音菩薩を拜ひることが出来る。それと同時に、又更に大勇猛心といふ側からして、觀世音菩薩を拜ひることが出来る。併しこれは、假りに分けただけのものであつて、別に此處から此處までが觀世音菩薩の大慈悲心、此處から此處までが菩薩の大智慧、又此處から此處までが、菩薩の大勇猛心といふことでは無い。つまり觀世音菩薩の其の本領を假りに分けて見れば、今いふ通り三通りの方面から其の面を拜ひことが出来ると云ふのである。然かしそれと同時に、我々は何時も申す通り、觀世音菩薩の分身である。少くとも觀世音菩薩と我々とは、決して其間に絲一筋も隔りは無いといふことを始終自分の心頭に信じて居なげねばならぬ。而して其大慈悲、大智慧、大勇猛心と云ふは、言葉こそ變るけれども、世間で普通にいふ智仁勇、それと同じに見て宜しいのである。其の他また色々言葉で同じ意味のことを言ひ別けることがあるが、それは皆な疾くに御承知のことであらうと思ふ。

それで今日此れから話致さうとするのは、天大將軍身であるが、此の天大將軍は、什ういふ人であるかといふと、經文を繙いて見るに、これは初めに現はれて居つた梵王の臣下、或は帝釋天の御家來であるとかいふやうに、御經の中には書いてあります。つまり天大將軍といふのは、いつも云ふ通り經文の解釋には事釋即ち事實上の解釋と、理釋即ち精神的の解釋と二つあるが、事釋の上からいふと右の如く誰れその御家來であるといふ事になるが、理釋の上から見ると、自分の一つの意思の力即ち勇猛精進といふ側をいふのである。我々が一つの意思を定めて、一つの目的に向つて傍き目をせず、眞つ直ぐに進んで行くといふ、さういふ心を指して此處では天大將軍といふのである。將軍といふのは、今日現實に於てもさうであるが、多くの兵を率ひて敵國を降伏せしめようとする勇猛の職である。天大將軍の任務はそれである。今觀世音菩薩は初めから色々の身體を現はされたが、今若し天大將軍といふやうな身を現しなげねばならぬといふやうな場合には、直きに天大將軍其の儘に現はれて、天大將軍の爲めに説法する。斯ういふのである。洵に一つの身體を、此處では三十二通り程に現はされるのであるが、向にも三十二と數に限られた譯ではなく、幾通りにも使ひ分けるのである。丁度千兩役者が一つの身體を以て、色々の姿を現はすと同じことである。熊谷にも教盛にもなつたり、睡みの權太にもなつたり様々に變つて見せる。丁度觀世音菩薩が一つの此の身を以て、様々に働かせる現はすのは、それと同じことである。遂ひ此の前には、大自在天に現はれて説法をなされたが、今度

は早變りして直きに天大將軍と斯ういふ勇氣凛々たる所の身體を現はして、さうして活説法をする。斯ういふのである。此の眼を以て觀ると、現在歐羅巴に行はれて居る戰鬪といふものは、殆んど色々の姿になつて現はれて居るが、斯ういふ意味からいふと、矢張り觀世音菩薩の一つの働かといふて宜い。獨逸のカイザーは成程今は我々の敵であるけれども、其の人の働かを見ると中々立派なことをやつて居る。言はゞ天大將軍の身を現はして説法して居る。私共の洋行といふのは丸で夕立見た様な洋行であつて歐羅巴の邊を暫時の間飛び廻つたのに過ぎなかつたのであるから、十分のことは解らない迄も其洋行中に獨逸人に途中で逢つて見ると、皆カイザー髯を生やして肩を怒らして、言はゞ肩で風を切つて歩くといふやうな、又は眼下に人を見下して居るといふやうな、又は張り肘して威張つて居るといふやうな、さういふ風に人々がカイザー氣取りで市街を大手を振つて歩いて居た。これは大に面白いことだと思ふ。一人のカイザーがあつて仕事が出来たのではない幾千萬の人間が皆カイザー氣取りで働いて居るから其處が面白い。チャンと一つの風采が極つて居る。千人寄つても萬人寄つても獨逸人は皆カイザーの現はれの如くで、而して働いて居る様子が——それは私がさう思つて見た所爲であるかも知れぬが、さう思つて見れば、さう見えないことも無い。中々あれまでに訓練することは物質の上にも精神の上にも、一朝一夕のものではなかつたらうと思ふ。舉國一致の精神、それが多方面に同様に現はれて居る。これは獨逸の獨逸のカイザーに限つたものではない。英國人でも佛國人でも

亦同様で英國は英國風に佛蘭西は佛蘭西風に國民の精神が頗る緊張して居つて、國民総掛りで一致して居る。これが歐羅巴の生命で、皆張り切つた態度で仕事をして居るやうに見えるのが面白い。今觀世音菩薩も亦さうである。あゝいふ優しいお顔をして居られるけれども、或場合には天大將軍の如くに四方皆敵の中へでも飛び込まれて、あらゆる佛事を行はれるのが觀世音菩薩の働きである。我々も矢張り觀世音菩薩の一つの現はれであり、觀世音菩薩の權化の一つであると見ると、――私は敢て將軍といつたからとて、血腥い仕事をするに限つたといふのではない。軍事上、政治上、事業上、別して宗教上、何處でも將軍的態度を以て、自分の指した目的に向つて進まなければならぬとであらうと思ふ。それが所謂意思の力の現はれといふものである。これは何時かお話したかも知れないが、佛の十大弟子の中に、富樓那尊者といふ方があつて、これは世間で大抵知つて居る雄辯な方で、能辯の人といへば、富樓那の辯のやうだとまで云はれる程の人である。これが佛に長らく附いて修行せられて、これから何卒佛の法を世界各國に弘めたいと思ひ立たれ、或時佛に申されるには、「私はこれよりして無佛教、言はゞ無宗教の國に行つて、佛教の傳道をしたいと思ふが如何で御座りませうか」と伺ふと佛の仰せられるには「それは結構な事である。別して今の無道心、無宗教といふやうな國に這入つて、佛心を行ふといふことは、誠に結構のことである。併し心得までにいふて置くが、あの無道心の國の人民は兇惡輕燥である。若しお前が傳道に行つたならば、周圍の人民は色々お前を罵り辱しめ、

有らゆる迫害、妨害を試みるであらう、其時にはお前は仕うするか」、富樓那曰く、「それは有難い。若しさういふことに出遇ひましたならば私は斯ういふ風に受取ります。彼の國の人は賢善くして仁和い彼等は瓦や石を以て私を傷つけない誠に有難い、斯う受取ります」と。そこで釋迦の言はれるには、「さうか、それならば若しかの國の人民が瓦や石を以て汝を打擲することあらば仕うするか」。富樓那曰く、「其の時には私は善意に有難く受取ります。彼の國の人は賢善くして仁和い瓦や石を以て私を打擲するも、刀杖を以て私を傷けない――刀を以て私を傷つけ、杖を振り廻はして私を打ち据へることは致さない。それが有難いと受取ります、其時に佛は更に「然らば若し彼の國の人が刀杖を以て汝を傷つけたなら仕うするか」。富樓那曰く、「それでも私は有難いと思ひます。彼の國の人は賢善く仁和い未だ私を殺すことを爲さず、誠に有難いと受取ります。其時釋迦が尙ほ言はれるには、「若しそれならば、彼の國の人が兇器を携へ來つて、汝の首を刎ぬたら仕うするか」。富樓那曰く「誠に有難いと思ひます、抑も道を修める人々のうちには此五慾の身を厭うて刀を以て自殺し或は毒藥を飲み、繩に縊れ、深坑に投じて身を殺すものさへあるに、彼等は賢善く仁和くして此朽敗た身を殺して、繫縛から脱れしめた、ア、有難いとであると受取ります」と御答へしたといふ事であり、すると釋迦は善哉々々汝は能く道を修めて忍辱を學んだ、そういふ決心と勇猛心とさへあらば彼の國の人々を教へ導くことも出來よう、汝今より行きて未だ安らかならざる者を安らかならしめ、未だ救はれざる者を救ひ、未



だ涅槃に入らざる者を涅槃に入らしめよ」と仰せられた、そこで翌日富樓那は彼の國に赴き一夏の中に五百人の信者を獲五百の伽藍を建てたといふ事であります。此富樓那の精神は敢て富樓那一人に預けて置くべきものではない。我々皆總てさういふ精神が必要である。釋迦が法を説かれた時などを考へて見ても、後にこそ祇園精舎といふやうな大變な大伽藍——一面に黄金を敷き詰めたと云はれる程の莊麗な建築物が信者によりて造られたけれども、最初佛が山から出て来て、鹿野苑といふ公園のやうな所で説法された時には、天井があつた譯ではなく、曇も何もあつた譯ではない。全く青天井の下に立つて而して大獅子吼をされたのである。釋迦でさへ初めさういふやり方をなされたのであるから、弟子方が各地方に行つて説法なされた時には、勿論寺も無ければ道場といふものがあつた譯ではない。天幕も無かつた時であるから、矢張り青天井の下に法を教へられたのである。斯ういふのも矢張り精神的將軍の身を現はして居るといふてよほしい。假りに惡魔外道といふものが幾ら蔓つて居つたとしても、其の惡魔外道といふ醜草を刈り取つて、而して佛の正法輪を所持し榮えしめやうといふのが又將軍的態度である。雷に宗教を弘める人許りではない、凡そ國を興し家を起し、身を立て道を行ふ程の者は精神上、事實上何の上にも於ても皆精神的將軍の身を現じて努力した人である。斯ういふのを總て觀世音菩薩の大勇猛心の現はれといふのである。右の話から今ふと思ひ出したが、別に書き留めて置いたのではないから、多少本文とは相違するかも知れぬが、列子といふ本に面白い話しが書いてあ

る。それは北山に愚公といふ人があつた。何れこれは假想的のものであらうが、其の愚公は九十何歳かの老人であるが、或時、私はこれから太行山、王屋山といふ二つの山をさりとすして、平坦なものにして仕舞ひたい、——太行山、王屋山といふのは支那でも聞こえた高い山であるが、其の高い山を低く均して仕舞ひたいといふ話をした、それを聞いた人々は大笑ひをして、「毫碌爺さん、九十歳にもなつて先きも無い癖に、山の中でも格別に高い、雲の中に聳へて居るやうな大きな山を、一つのみならず二つまでも、手で均して平坦にして仕舞ひ度ひなどは、餘程馬鹿氣たことを考へたものである能く臆面も無くさういふことが言はれたものである」と嘲笑つた。すると愚公が「イヤ、さう笑ふたものではない。私が死んでも子は残つて居る。其の子には又子が生れる。孫が生れる。孫が又子を生む。曾孫を生む。されば子々孫々は限りなく續いて行く。言はゞ第一の我れ、第二の我れ、第三の我れといふやうに、私の形こそ變つて行くけれども、私自身の精神は、何時までも子々孫々に傳はつて行つて、仕事をする。成程太行山や王屋山は大であるけれども、子も生まなければ孫も生まな

い。初めから一つの何千尺といふ山は、何時まで經つても同じ山である。石も殖えない、土も増さない。言はゞ子孫まで仕事をしないが、私の子孫は限りなく、私の精神が此の子孫を通じて仕事をすることが出来る。あの太行山や王屋山は幾ら高い山だといつても、之を平げることはいと易い」といふた。初め笑つた人も其の言で閉口して仕舞つたといふ。さういふ話が列子といふ本に書いてある。人間の

仕事はそれである。勇猛精進の力を揮つて、不退轉の仕事をしねばならぬ。今日我々が世間を眺めて見て殊に必要を感じるのは、個人としても國としても、勿論智慧學問も入用であるが、就中智慧學問の働きを實地の仕事に用立てるものが第一必要で、それは意思の力であると思ふのであるが、之を人格化していふたならば、將軍身其のもの働きのことである。應に天大將軍の身を以て得度すべきものは即ち天大將軍の身を現はして、而も爲めに説法する」とあるのは、之をいふのである。

次に現はれたのは毗沙門身である。我々が毎日色々身を現はして仕事をして居るやうに、今度は早替りをして毗沙門身が現はれた。毗沙門神といふのは、此れも須彌山説を一通り話さなければならぬ筈であるが、さういふことは他日詳しくお話することにする。大體を言へば須彌といふ高大な山があるとして、其の須彌の四方に四天王といふものがある。四天王の中の一つは北方多聞天王といふのである。毗沙門といふのは梵語であつて、翻譯すれば多聞天といふ。それは事釋即ち事實上の解釋で、經文にはさう書いてあるが、これも精神上から見ると、毗沙門天の生れは何處であるとか什ういふ風には仕うしたとかいふことは尋ねるに及ばない。一度び毗沙門天を念ずる時は、直ちに毗沙門の身を現はすのである。つまり毗沙門天は治國護王の神として、國を治め其の國土を護衛する所の神様とも、或は福德を授ける所の神様とも云はれて、七福神の中に位して居る。それだけの勇氣を以て現はれて居る神である。兎に角善神を助けて惡神を退ける。災難から救ふて幸福を興へる。貧しきを助けて福

を生み出すといふやうに、有らゆる善い意味のことは、毗沙門天が悉く占めて居つて、有らゆる惡い意味のことは、毗沙門天の力を以て退治して仕舞ふといふ目出度い所の神である。若し毗沙門天の身を現して説法しなければならぬ必要が起る時には、直ちに毗沙門天の身を現して而も爲めに説法する。恰も天上の月は一つであるが、色々の水によつて其の影を宿すようなものである。澄んで居つても頓着しない。濁つて居つても頓着しない。什んな水にでも影を宿す。それと同じく觀世音菩薩は何所にでも身を現して説法するのである。説法するといへば、何か木魚でも叩いてお経でも讀むといふように思ふかも知れぬが。さうではない鍛冶屋がカン／＼汗身どろになつて働くのも、それは鍛冶屋の説法である。商業家が算盤珠を膝の上でバチ／＼弾いて、一生懸命に儲け事を考へるのも、それが商業家の説法である。此の頃のやうな炎天で、所謂金を爍かす暑さの時でも——これは汽車にでも乗つて旅行する時に、能くさういふ景色を見るが、煮えくり返るやうな田圃の中や、熱風の吹き捲くる畑の中で、鋤鍬を以て百姓が働いて居る。それが即ち百姓の説法である。子が親に對して孝を盡すも臣が君に對して忠を盡すも、亦皆説法である。説法は決して木魚を叩いて御經でも讀んでやる許りが説法ではない。毗沙門天を以て得度すべきものには、即ち毗沙門天を現して而も爲めに説法すると斯ういふ。此の毗沙門天に就いて色々因縁話をする澤山話がある。第一に今日あたりでも小さい子供供の頭にさへ宿つて居るがあの楠正成は最初毗沙門天に願掛けして出來た申し子で幼名を多聞丸と

稱すと書物に書いてあるがそれである、既に胎内に宿らない前から、毗沙門天に祈念した位であるから、胎内に宿つてからは猶ほ更其の信仰が篤かつたに相違無い。是れが即ち胎教で、さういふ風に精神的に育てられたのが正成公である。生れ出てからも勿論のこと、家庭教育が總て精神的に行はれたことは申すまでもない。さういふ精神で、胎内にあつても生れてからも育てられたから、大分世間の普通の人とは違ふ。正成公一代の精神は、總て宗教的精神から割り出されて、それが色々の方面に働き掛けてある。故に正成公の生涯の事蹟といふものは、百歳千歳の後に至るまでも人口に膾炙せられて其の忠君愛國の精神は凛として天地の間に存し所謂火に遭つても焼かれず水に遭つても漂はされず今日我々の頭に嚴かなる楠。正成公の顔が明かに現はれて居る。此正成公が嘗て南都に遊びて一禪者に片岡の邊に出逢ふた事がある。道々話す次で、就て心要を乞ふた、すると其僧が公の名は何ぞと問ふた。公曰く正成、僧曰く「者個、是れ什麼ぞ。」公言下に省悟す、招て家第に請して懇懇に誨へを受く、爾來兵を用ふること自在にして謀略神の如しとある。これは正成公が何にも突然に斯う云ふ問ひを出してそれで偶然に省悟したといふ譯ではない、平素深い深い所に修養があつたから此機會にそれが開發したのであることは勿論言ふまでもないことである。其他尙毗沙門天に關する事實因縁話は澤山ある。聖德太子もさうである。有名な四天王寺の大伽藍を建設なされた由來といふものがそれである。太子は守屋の軍に敵對せられる時に、四天王を頭に戴いて戦はれた、中にも毗沙門天の精神を頭に飾

つて最も勇ましく戦はれたといふやうな有様である。昔に戦時に於てのみならず、太子の精神は常にさういふ所に向つて養はれて居つたのである。毗沙門天のお話は、佛説毗沙門經といふ御經に詳しく出て居る。其の中に十の福が算へられて居る。一寸其の大略を言へば、毗沙門天王は無盡の福を與へると書いてある。それから毗沙門天王は愛敬の福や長命の福を與へるとある。次には毗沙門天王は眷族の福を與へるとある。又毗沙門天王は勝軍の福を與へるといふ。斯いふ風に十の福が算へられて居る。此れは十とはいふもの、之を應用すれば、千萬無量の福に相當するのである。さういふ毗沙門天である。所で其毗沙門天は何にも須彌山まで態々捜しに行くには及ばない。一念毗沙門天を信仰すれば靚面に此に其の身を現はすことが出来るのである。

次に「小王身を以て得度すべきものは、即ち小王身を現して而も爲めに説法す」とある。初めの梵王とか帝釋とか又は自在天とか毗沙門天とかいふのは、何れも天上界の神達であるが、それ等を指して大王と稱する時は、それに對して小王と呼ぶのである。けれども人間界に於ては茲に小王と稱するものも小王ではなくして矢張り大王である。我々が現に戴いて居る日本天皇陛下は、即ち我が國の大王である。殊に先帝明治天皇陛下に至つては、少なくとも東洋、否世界に於ける大王と申上ぐるも決して差支は無からうと思ふ、其の他佛敎に於て、昔から大王とも稱すべき二三の例を擧げて見ると佛滅後約二百年計りに阿育王といふ御方があつたが此人は佛法保護に全力を注いだ御方で有名なる人

である。其の人の現に建てた碑などが印度にまだ残つて居るがそれに依つて見ると如何に阿育王が佛事せられ又仁政を布かれたかが明かに分る。西洋人の書いた書物の中にも、コンスタンチン大王が耶蘇教を保護した功績よりも猶大なるものがあるやうに始終書いて居る、其の位有力なる大王である。色々算へ立てれば澤山あるが、殊に佛敎の世界的に弘通したのは、此の阿育王の時代からである。佛一代の中には佛法も印度——五天竺位に限られたかも知れぬが、それが段々印度全國に弘まつた上進んで今からいふと、東波斯地方から歐羅巴の一部に及び、更に蒙古滿洲方面から——亞米利加には其の時分渡つて居ないが、兎に角東洋の以上諸國に普及するに至つたのは、阿育王の力である。其の人のやつた事業の概略を述べれば施藥院とか療病院とか其の他色々あるが、つまり有らゆるものを佛敎主義によつてやつたのである。公共のこと、慈善のこと、國家的のこと、宗敎的のこと、皆佛敎主義によつてやつたのである。次に日本に於て大王の御事蹟を申上ぐれば最も形の上に残つて居るのが聖武天皇でありましよう。天皇が佛敎の爲めに盡されたことは容易ならぬものである。爲めに儒者神道家などは、聖武天皇が三寶の奴と稱されて、三寶の爲めには此身をも捧げると、仰せられた事を、其の深い御精神をも知らないで、何か天皇が佛法に心酔せられてさういふことを仰せられたやうに論じて居る。處が豈に知らむや、三寶とは即ち佛法僧である。誠に宏大なる精神的のものである。其の仕事は天職的のものである。決して人爵を以て彼是れ宛てがうべきものではない。それが宗敎の宗敎

たる所以である。法即ち宗敎——精神界の爲めには、我れ躬ら其奴隷であると仰せられたので、此の位徹底したことを仰せられたことは、獨り日本のみならず、外の國にもたんと無いことである。其處に始めて宗敎の神聖なる意味が現はれて居る。歐米人でも、眞の宗敎を知つて居るものは、さういふ邊を注意して居るので、これは聖武天皇御一人に限らず、聖德太子もさうである。それから奈良朝、平安朝及び鎌倉時代、それから足利時代、徳川時代には身分が天子であり又は皇族であつて出家せられた方が澤山ある。出家して僧形となられたといふ事が唯有難いといふのではない。それだけ有難いといふのは可笑しなものである。兎に角佛敎的精神、即ち此に説く所の觀世音菩薩の大智慧、大慈悲心、大勇猛心、斯ういふものを化して一團となしたる精神の現れが言ひ知れず有り難いのである。それから支那では後漢の明帝、魏の明帝、宋の文帝、梁の武帝、唐の太宗皇帝などの佛事せられたことは實に容易ならぬものである。佛事といふても御經を讀むとか講釋を聽くとかいふやうなこと許りでなく佛敎の精神を十分に體得して、有らゆる文學の上なり、美術の上なり、又は政治の上學問の上教育の上なりに、其の精神が八方に發揮せられたのを指すので、歴史を見れば能く分る。大體のことは書き載せられてある。小王といひ大王といふのは、例へば印度にも王といふのに種々あり又支那の附庸國でも、蒙古の各部落には王といふものが澤山ある。小王といふものはさういふものを指す場合もあるが、此處で云ふ小王は其邊の區別ではない。例へば露西亞の如き大國の王でも、大王とはいは